主日の福音 2025/1/1(No.1333)

神の母聖マリア（ルカ 2:16-21）

神の解き明かしを信じ出来事を心に納め思い巡らす人

新年明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願い致します。フランシスコ教皇様は聖ペトロ大聖堂の「聖なる扉」を開き、聖なる年 2025 年「聖年」を宣言されました。

この一年間、教区の司教座聖堂や、教区司教が指定した教会・聖堂を訪問することで、免償（罪の償いの免除）を得ることができます。下五島地区では福江・打折・貝津・井持浦教会が巡礼指定教会です。福江教会の人は残る三つの教会を巡礼して、恵みにあずかりましょう。

今日一月一日は、神の母聖マリアの祭日、守るべき大祝日です。神の子の母となられたことで、マリアは神の母の誉れを受けました。通常母親は、自分の子供に起こった出来事を細かく覚えていて、一つ一つ「あの時はこうだった、あの時のことが今につながっている」と思い巡らします。マリアは神の子の母となったので、御子イエスに起こった出来事をすべて心に納めて、思い巡らします。

一つだけ、通常の母親と違うのは、出来事の意味を理解するのはマリアの力ではないということです。神の子イエス・キリストに起こる出来事の意味を知るためには神からの解き明かしが必要です。いつその解き明かしがあるのか、どのように解き明かされるのかは分からないので、出来事を心に納めて、深く思い巡らす必要があります。マリアは神の子の出来事すべてを心に納めて、深く思い巡らしたのでした。

一つの体験を紹介します。司祭になって駆け出しの時、不用意な発言で教会信徒に心配をかけてしまいました。その時主任神父様から次のようなお叱りを受けました。「お前なぁ、おれの歳にならないと言えないこともあっとぞ。」そしてこのお叱りは、還暦が来年に迫っている今、当時の主任神父様の年齢になって、ようやく解き明かされたのです。

それは、ちょっとした出来事の中でした。「ともにあゆむ」というカレンダーを一人の方が買い求めて、そのお友だちが中身を一緒に眺めていました。そこへ私が「お母さん。見とったら買いたくなったやろ？」と自然と声をかけたのです。すると素直に「はい。私も一冊ください」と言ってくれました。

中田神父が駆け出しの時、同じように「お母さん。見とったら買いたくなったやろ？」と言っていたら、「若いくせに厚かましい」と思われていたことでしょう。しかし、今の年齢になって、言葉に重みが加わったのです。「おれの歳にならないと言えないこともあっとぞ」と言われたのが、心から理解できるようになったのです。自分の力で理解できなかったことが、神様の解き明かしで 30 年後に理解できました。

今日、20 歳のお祝いを迎える方が、ミサに参加しています。ちょっと前まででしたら、「新成人のお祝い」として迎えていました。今日の出来事をぜひ記憶して、持ち帰ってほしいと思います。20 歳になってたくさんの人の前で祝ってもらえるのは特別なことです。これからの生活

で、「なぜ？」「どうして？」ということもたくさん味わうと思います。誰かがその意味を教えてくれるときもあるでしょう。しかしどうしてもその意味が分からないとき、教会に来てみてください。マリア様が出来事を心に納め、思い巡らすうちに神様からの解き明かしが与えられて出来事の意味を悟ったように、皆さんにもいつか、神様からの解き明かしがきっとあります。

どうしても分からない、説明してほしい。その解き明かしをしてくださるのは御聖体のイエス様であり、イエス様のみことばです。マリア様が神様からの解き明かしを待って、出来事の意味を深く知ったように、マリア様に倣って神様から解き明かしをしてもらって出来事の意味を知る人になってください。出来事の意味が分からないとき、教会に来て神様から解き明かしをもらおうと願う人こそ、名実ともに大人の信者です。

これから祝福式をします。記念品は、派遣の祝福前にあらためてお渡しします。

主の公現(マタイ 2:1-12)

主日の福音 2025/1/5(No.1334)

主の公現(マタイ 2:1-12)

贈り物は、人を生かす王に出会ったしるし

御公現の祝日を迎えました。占星術の学者たちがイエスを伏し拝み、贈り物を献げます。馬小屋に、三人の博士の御像を収めました。それまで、離れたところに置いていたのは、「東方で星を見て、はるばる拝みに来た」ということを感じさせるためです。

さてこの占星術の学者たちは、権力を振りかざすこの世の王であるヘロデに、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか」（2・2）と尋ねています。あらためて、「ユダヤ人の王」が何を意味しているのか確認しましょう。

マタイ福音書の 27 章 11 節で総督ピラトが「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問する場面があります。また十字架にかけられた場面、マタイ 27 章 37 節でイエスの頭の上には「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書きが掲げられました。

すると、福音記者マタイにとって「ユダヤ人の王」とは、十字架につけられるイエスを表すことになります。イエスは、ヘロデのような王なのではなく、罪から人を救うために十字架に向かって歩む「王」なのです。ここまで考えると、「ユダヤ人の王」という称号を、福音記者マタイが占星術の学者に言わせたのかも知れません。

ユダヤに住んでいるヘロデ王は自分が生き残るためなら何でもする残忍な王ですが、「ユダヤ人の王」イエスは罪から人を救うために十字架に向かい、人を生かす王です。占星術の学者たちは両方の王に会いました。そして、人を生かす王イエスにひれ伏し、黄金・乳香・没薬を贈り物として献げたのです。二人の王のうち、イエスをまことの王として選んだのです。

占星術の学者たちは私たちにも、選択を迫っています。「わたしも行って拝もう」と言うだけで、イエスを自分の中から追い出して暮らすのか、それとも「別の道を通って」（2・12）自分たちの国へ帰って行った学者たちのように、心の中に救い主を受け入れて、イエスの照らし、導きを信じて生活するよう心がけるのか、今問われています。

馬小屋は片付けられて、クリスマス気分も終わることでしょう。しかし私たちには、「ユダヤ人の王」としてお生まれになった方、つまり人を罪から救うために十字架に向かって歩むお方に見倣って生きることが求められています。教会に集まるたびに、宝の箱を開けて贈り物を献げ、今週もあなたの生き方に倣って生きますとお約束してそれぞれの場所に帰る必要があります。

これは多くの人の生きる道からすれば、「別の道を通って」生きることかも知れません。それでも、選んだ生き方が正しいと信じるなら、この道を全うしていきましょう。自分の十字架を背負って、まことの王であるイエスが歩む道を共に歩みましょう。この道を生きると決めたその時から私たちには、目で見る馬小屋は必要なくなります。

主の洗礼(ルカ 3:15-16,21-22)

主日の福音 2025/1/12(No.1335)

主の洗礼（ルカ 3:15-16,21-22）

水に触れたイエスが、私たちに触れてくださる

昨年、洗礼を授ける機会が何度かありました。本当に有難いことでした。洗礼式の中で、中田神父は水の祝福をおこなってから洗礼を授けます。儀式書の言葉を唱えて水を祝福するのですが、祝福の祈りの途中次のように唱えます。「いのちの与え主である神よ、この水を✝祝福してください。」

水の入った器に手を差し伸べて唱えますが、私は水に少し触れることにしています。儀式書には手を差し伸べることだけ書かれていますので、厳密には不必要な動作です。だた、「触れる」という動作は、洗礼式の参加者にも伝わりやすいと思っています。ちなみに復活徹夜祭で水を祝福するときは、復活のローソクを水に浸して唱えます。「復活したキリストが水に触れる」という象徴的な動作です。

今日、主の洗礼の祝日です。イエス様がヨハネの洗礼をお受けになったことで、水はイエス・キリストに触れました。イエス・キリストの御生涯全体に触れたと言ってもよいでしょう。「彼は飢えますが、無数の者を養い、労苦しますが、労苦する者たちを休ませます。枕するところもありませんが、すべてを手ずから担われます。苦難に耐えますが、苦難から立ち直らせます。むち打たれますが、世に自由を与えられます。わき腹を刺し貫かれますが、アダムのわき腹の傷を治します。」（毎日の読書・公現後の火曜日）

私たちも、水を用いて洗礼を授けてもらいました。その水は、洗礼のたびにイエスによって祝福され、いわばイエスが触れた水になります。私たちは、ヨハネが証しした「聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる」このイエスによる洗礼を受けた人です。

「聖霊と火で」お授けになると洗礼者ヨハネは証ししましたが、ヨハネ福音書の「ニコデモとの対話」の中でイエスは「はっきり言っておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない」（ヨハネ３・５）と言っています。

両方比べると、「聖霊」と「霊」は同じですが、「火」と「水」は対応しません。ですが「水」を、「イエスが触れた水」「祝福された水」と考えると、うまく対応すると思います。「火」「イエスが触れた水」どちらも「すべてを清める力」だからです。

あらためて福音朗読箇所に戻ると、洗礼者ヨハネの洗礼を受けたあと、聖霊がイエスに触れ、また「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という父なる神の声が、イエスに触れました。三位一体の神の全体が、ここで表されています。洗礼者ヨハネの洗礼で使命はヨハネからイエスに託されました。これからイエスは、「聖霊と火で」また「水と霊によって」人々を神に立ち帰らせていきます。

イエスによって、すっかり新しい時代に入りました。イエスはこれまでの時代と、これからの時代を担っていきます。イエスに付き従うた

め、私たちはまず父と子と聖霊の名による洗礼を受けました。私たちの洗礼は、三位一体の神が人に触れた最初の出来事です。「聖霊が鳩のように降って来た」「声が天から聞こえた」そういう特別なしるしはありませんが、実際には父と子と聖霊が、私たちに触れてくださった恵みの体験なのです。

　イエスは水の中から上がられて、これからどこへ向かわれるのでしょうか。今週の朗読箇所の直後は次のような書き出しになっています。「イエスが宣教を始められたときはおよそ三十歳であった。」（3・23）いよいよ、イエス様は神の救いの計画を前に進めるために先頭に立って行かれます。

　「聖霊と火によって」あるいは「水と霊によって」洗礼を受けた私たちも、態度を決めなければなりません。イエスに信頼して、示された道を共に歩むなら、イエスもこれからの人生を共に歩んでくださいます。重要な場面ではイエスは私たちに触れて、共にいることを分からせてくださいます。

年間第 2 主日(マルコ 2:18-22)

主日の福音 2025/1/19(No.1336)

年間第 2 主日（ヨハネ 2:1-11）

ぶどう酒に変わった水をあなたはどこまで運びますか

今週は、おもに堅信を受ける中学生に向けて話したいと思います。堅信を受ける中学生は、今週の福音朗読の登場人物の中の「召し使い」「イエスに指示を受けて動き出す人」です。

堅信の秘跡を受ける中学二年生の皆さんに、心からおめでとうと言いたいと思います。今週の福音朗読に重ねると、いよいよ皆さんは、イエス様から頼まれたことを、忠実に果たす役割を持つ人となります。これまでは、重い荷物も持てなかったし、忍耐が必要な難しい作業も出来ませんでした。

それが堅信の秘跡によって聖霊の賜物を受けると、これまでは持てなかった重い荷物も持てるようになり、忍耐が必要な難しい作業もできるようになります。朗読された福音書を学びながら、そのことを考えてみましょう。

「召し使い」という呼び方は嫌いだと思います。「召し使い」と呼ばずに、「イエス様の協力者」とかただ単に「協力者」と呼びましょう。イエス様の協力者は、まずイエス様から「水がめに水をいっぱい入れなさい」と頼まれました。堅信を受ける皆さんが小学生の時だったら、バケツいっぱいの水を運ぶのもたいへんでしょう。けれども今なら、灯油のポリタンク（18 リットル入ります）も運べる力を堅信でいただきます。

でも、ぶどう酒がなくて困っているときに、「水をいっぱい入れなさい」と頼まれたら「この忙しいときに迷惑だ」と思うでしょう。ここで聖霊の賜物「知恵と理解」「判断と勇己」が必要です。「イエス様から頼まれたのだから、きっと今必要なんだ」と、信頼する気持ちが必要です。堅信の秘跡がそれを授けてくれます。

イエス様は、いっぱいになった水がめの水を「さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい」と言います。まかりまちがったら、世話役からひどく叱られるかもしれないのに、自分たちがくんだただの「水」を宴会全体の責任者のところに運ぶのです。「イエス様が私にお願いしているから、信頼して運ぼう」こんな深い信頼が必要です。小学生の時だったら、ひどく叱られるかもしれないと怖くなって、最後まで務めを果たせないかもしれない。それが、堅信の秘跡を受けたら、怖さを乗り越えて、イエス様に信頼して最後まで務めを果たす勇気をいただきます。

よく考えると、イエス様の協力をした召し使いたちは、ただ「水がめに水をいっぱいにした」「水をくんで宴会の世話役に持って行った」それだけでなく、「イエス様の指示を持って行った」もっと言うと「イエス様の働きを持って行った」人たちだったのです。

すると、堅信の秘跡を受けてイエス様の協力者になる堅信組の皆さんも、「ただ言われたことをするだけの人」ではなく、「イエス様の指示を運ぶ人」「イエス様の働きを運ぶ人」に生まれ変わると言えると思

います。イエス様は聖霊を皆さんに注いで、「より大きな力を発揮できる人」「よりイエス様を信頼してくれる人」「よりイエス様の働きを多くの人に届ける人」に生まれ変わるのです。

　堅信の秘跡で受ける聖霊の賜物は、秘跡を受ける皆さんをより強く、より成長させてくださいます。それはあなたのためでもありますが、よりイエス様に喜ばれる働きをするためでもあります。堅信クラスで学んだことを、あなたはどこまで運んでくれますか？召し使いは世話役のところまで運びました。あなたはどこまで、イエス様から頼まれたことを届けますか？より多くの人に、より遠くまで、運んでくれることを大いに期待しています。

年間第 3 主日(神のことばの主日)(ルカ 1:1-4;4:14-21)

主日の福音 2025/1/26(No.1337)

年間第３主日（神のことばの主日）(ルカ 1:1-4;4:14-21)

神のことばに込められた思いに触れる聖年

残念ながら、司祭団マラソン大会は辞退することにしました。母親が同じ日、マラソン大会に乗り込んでくる上五島の司祭たちと同じ船の便で福江にやって来ます。一泊二日で親孝行することを優先しました。弁明しますが、堂崎からのコースに申し込み、時速６キロくらいで完走するつもりでした。時速６キロは、1分間で100メートル進む速さです。

「一を聞いて十を知る」という言葉があります。「非常に賢くて理解がはやい」そういうたとえです。理解する側に力点を置いている説明ですが、語られた言葉に力点を置いて考えるとどうでしょうか。

たとえば、中田神父が話している言葉は、一つ話すたびに一つ伝わる、そのような言葉です。「1分間で100メートル進む速さです」これを聞いた人が、そこから幾つものことを学ぶわけではありません。

たまに、一つの言葉に二つの意味が込められていることもあります。しかしそれに気付く人は、何十人に一人かも知れません。付き合いが長い人は、もう少し気付くようになるかも知れません。しかしそれでも、一つの言葉に二つの意味が込められているに過ぎません。本当に優れた言葉は、一つの言葉に多くの意味が込められ、どれだけ味わっても汲み尽くせないのではないでしょうか。

まさに、イエスが語られる神のことばがそうでした。会堂で、預言者イザヤの巻物が渡され、それを読み終えてからこう話されました。「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」（4・21）。イエスが語られた言葉一つ一つには、いったいどれだけの意味と思いが込められていることでしょう。私たちが何度読み味わったとしても、語られたイエスのことばの意味を汲み尽くすことができません。

幾つか、語られたイエスのことばから、込められた意味を汲み取りたいと思います。中田神父は、御父と御子、聖霊の思いが込められていると考えます。御父は、イエスの宣言を聞いた人が御子を信じるように期待しています。御子イエスは、解放と恵みの年を告げるために責任を持つと表明しました。聖霊は、イエスの宣言が真実であることを理解させてくださいます。

しかしなぜ、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と言い切ることができるのでしょうか。「この人はヨセフの子ではないか」と、疑いの目で見ている人もいたのです。「実現した」と言われるからには、すべての人に当てはまるのでなければなりません。疑いを持ち、朗読された物語の最後に町が建っている山の崖からイエスを突き落とそうとした人々にまでも、どのように聖書の言葉は実現するのでしょうか。

それは、「ゆるし」によって実現しました。イエスは「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話す中に、解放と恵みの年の宣言だけでなく、ゆるしの意味も込められていたことに

なります。神のことばは、一つのことばの中に、幾つもの意味が込められていて、汲み尽くせない泉のようなのです。

今年は聖年です。地区の中で指定された教会を訪ねることで、免償の恵みを受けることが出来ます。入口に置かれた巡礼スタンプ帳の終わりの方のページには免償の受け方が分かりやすく書かれています。どうぞ、機会を逃すことのないよう、指定教会を訪ねてください。

罪から完全に離れるとの意向を持って巡礼指定教会を訪ね、同じ頃にゆるしの秘跡を受け、聖体拝領をし、教皇様の意向にしたがって主の祈り・アヴェマリアの祈り・使徒信条を唱えるなら、全免償が与えられます。今、あなたは全免償が必要でないかも知れません。そうであればあなたが受けるはずの全免償を、死者のために譲ってあげてください。

「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した。」神のことばは今日も多くの人に多くの思いを伝えようとしています。神の思いに、一つでもよいから触れるための聖年となりますように。

主の奉献(ルカ 2:22-40)

主日の福音 2025/2/2(No.1338)

主の奉献（ルカ 2:22-40）

イエスは神と人とをつなぐきずな

主の奉献の祝日を迎えました。教会によっては、この日に家庭祭壇で使用する一年分のローソクを持ち寄って祝福してもらいます。毎年 2 月 2 日固定ですが、今年は日曜日と重なりました。

主の奉献を文字通りに考えると「神殿で、献げられた」その姿は、人が、神と結び合わされた姿と言えます。またイエス様は神が人となられた方ですから、神が人と結び合わされた姿でもあります。両方考えると、イエス様は、神と人とをつなぐ絆、ということです。

シメオンが登場します。彼は神殿に献げられたイエスを腕に抱き、神をほめたたえ、また両親を祝福します。「神をほめたたえる」ことは、神と人とが結び合わされる働きで、「両親を祝福する」ことは、神の祝福を人に結び合わせる働きです。シメオンは、幼子イエスを抱いたことで、自分自身が神と人とをつなぐ絆となっていったのです。

先週水曜日、面白いことがありました。ミサの福音朗読は「種まく人のたとえ」でしたが、平日のミサでは前半月曜から水曜までは助祭さんに説教をお願いしていて、私が木曜から土曜を担当しています。それで本来なら私は説教しないわけですが、ミサ前のゆるしの秘跡に、五人か六人、ずらっと並びました。

私は告解部屋に座って、たぶん人は来ないだろうという考えのもと、「私が説教の担当だったらこんな話をしようかな」と考えながら告解場に居たのです。私の予想通りだったら、誰も告白には来ないのですから、当日の福音朗読で思い巡らしたことは誰にも届くことは無いわけです。

ところがその日は、五人も六人も告解人が来ました。「これはチャンス」と思い、「ご両親の信仰はあなたに種まかれました。まかれた信仰が奪われないように、枯れてしまわないように、大切に守り続けて立派に実らせてください」と言い聞かせたのです。神様は私を、ゆるしの秘跡を使って神と人とをつなぐ絆としてくださったのです。

本日午後 2 時から、長崎の西坂殉教記念公園で、26 聖人殉教記念ミサが行われ、私も参列することにしています。26 聖人は、自分の信仰を守り抜くために命をささげましたが、それだけでなく、神に赦しを願い、刑を執行する人々をゆるします。26 人もまた、神殿のシメオンのようにイエスを抱いて神と人とをつなぐ絆となってくださり、殉教の証しを遂げたのでした。

ここまで話すと、察しの良い皆さんは中田神父の説教の結びを予測できるでしょう。神殿で献げられたイエス様を抱く人は、シメオンのように神と人とをつなぐ絆の働きをしてください、ということです。26 聖人は、残された時間がほとんどない中で、はりつけにされた刑場で、神の赦しの恵みを人々につなぐ絆となってくださいました。

私たちも、神と人とをつなぐ絆になることは十分可能です。食事のあとさきに、祈りを唱える。それは食事をする人と、神とをつなぐ働き

です。朝晩の祈りを唱える。それも神と人とをつなぐ働きです。神と家族とをつなぐばかりではありません。より多くの人を神とつなぐ絆になる。これはとうとい働きです。司祭や修道者を志すことは、たくさんの人を神とつなぐ絆として生きることになります。

主の奉献の姿は、私たちにも生活の中で神と人とをつなぐ絆になるよう導いています。「シメオンはイエス様を抱いたのでその働きをしました。私たちはイエス様を抱くことができるのでしょうか？」私たちは、ミサの中でみことばを聞き、聖体を拝領することで、イエス様を抱くのです。

年間第 5 主日(ルカ 5:1-11)

主日の福音 2025/2/9(No.1339)

年間第 5 主日（ルカ 5:1-11）

恐れることなく、イエスの招きにこたえよう

今週の「漁師を弟子にする」という物語は、中田神父にとって非常に慰めになります。私が小学生の頃、漁師は「危険で、きつい仕事」の代表格でした。同時に、中学を卒業して手っ取り早くお金を稼ぐのに「もってこい」の仕事でした。それは裏を返すと、「勉強ができない人が行き着く仕事」というイメージでした。

私は漁師になろうと思ったことはありませんが、当時帯封のかかった給料を持ち帰っていた父を「すごいなぁ」と思ったものです。同級生にも遠洋漁業の船に乗った人がいて、運転免許を取った途端、身分不相応のクラウンを買って乗り回したり、二十歳になる頃にはすでに一軒家を建てたりしていました。それでもイメージは拭えませんでしたが。

漁師のイメージは、イエス様の時代にもあまり良くなかったかも知れません。マルコ 1 章 16 節には「イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった」とあるのですが、「彼らは漁師だった」という言い方は、ただ職業を紹介しているようには聞こえません。下に見られている感じがすごく伝わります。

その、漁師をしていた人たちに、イエスは声をかけてくれました。私にとっては大いに慰めになるのです。下に見られている人を、イエスはそばに置いてくださり、宣教のために働かせてくれる。こんなに有難いことはありません。私もかつては、「輝明の息子が神父になれるわけのなかろうもん」と、父親の漁師仲間から言われていました。

なぜイエスは、漁師に目を留めたのでしょうか。危険な舟の上で、一致団結して魚をとる「強い結束力」でしょうか。号令にすぐに従う、「忠実さ」でしょうか。何もとれなくても、あきらめず希望し続ける「忍耐心」を高く買ったのでしょうか。

それも、弟子を集める条件に含まれていたかも知れませんが、私は詰まるところ、「下に見られている人たちだった」ということが、彼らを弟子に選んだ理由なのではないかと思っています。もちろん、誰が選ばれても構わないのですが、どうしてこんな人を選ぶのだろうと疑う人がいるなら、パウロの言葉を思い出す必要があります。「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。」（1 コリ 1・25）

イエスの指示に信頼して行動した漁師たちは、自分たちの知識や経験をはるかに超える結果を見て、イエスに従います。彼らは月の満ち欠け、季節、天気をすべて把握していて、それらの知識や経験をすべてつぎ込んで何もとれなかったのに、イエスは彼らの知識と経験をすべて凌駕する結果を示して、ご自分に従うように招くのです。

「恐れることはない」（5・10）とイエスは漁師たちに呼びかけます。「恐れないで」と言われても恐れるのではないでしょうか。一介の漁師に過ぎない自分たちが、これからどれだけの人と向き合って、神様の網

で彼らをとることになるか、全く予想が付きません。きっと多くの人々が、自分たちを下に見ている人々です。それなのに「恐れることはない」とイエスは励まします。どこまでも、イエスに信頼を寄せて従う。これ以外に恐れに打ち勝つ術はありません。

「彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。」（5・11）舟は、水の上に浮かべてこそ意味があります。陸に引き上げたままでは、舟の役割を果たせません。弟子に招かれた彼らは、こうしてすべてを捨てたのです。舟も、舟を生活の糧にすることも、これまでの知識や経験も、すべて横に置いたのです。

私たちの中で、もし舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従うつもりがあるなら、イエスの目に必ず留まると思います。イエスは今も、「お言葉ですから、網を降ろしてみましょう」（5・5）と答えてくれる人を探し続けています。

それぞれの生活の中で、ある人には社会の中で、ある人にはイエスのそば近くで、イエスに全面的に従うことを選んでくれる協力者を探しておられます。そして手を貸してくれるあなたにかけるイエスの声はこうです。「恐れることはない。」

年間第 6 主日(ルカ 6:17,20-26)

主日の福音 2025/2/16(No.1340)

年間第 6 主日（ルカ 6:17,20-26）

イエスと共にいる人は不幸の中でも幸いを得る

この前、五島中央病院で一人の入院患者に聖体を授けていたとき（そこは四人部屋でした）、隣のベッドの入院患者が耳をそばだてているような感じがしました。実際にはカーテンをしていたのでお隣の様子を目で見ることはできませんでしたが、聖体拝領の様子を共有しようとしている、そんな雰囲気が伝わりました。

特に、みことばの朗読の場面で、耳を傾けているのかな？という緊張感が伝わってきました。その方がカトリック信者だったのか、そうではないのか、もしかしたらカトリック以外のキリスト教だったのか、そこまで立ち入りませんでしたが、みことばに耳を傾けていたとしたら、今後機会があればお話をしてみたいと思いました。

今回、病院での聖体拝領、これは本当に宣教の絶好の機会だと感じました。みことばの朗読と、聖体拝領をする様子は、心の渇きを感じている人にはまたとない宣教の機会だと思います。身体が弱り、何かにすがりたいという気持ちもあると思いますが、それ以上に、心の渇きがその人の心の扉を開くのだと思います。

聖体拝領の際、朗読したみことばはヨハネ 6 章 51 節「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」ここを使いました。

儀式書には幾つか朗読箇所があって、そのどれかを選ぶわけですが、もしも、お隣の入院患者さんが聖書のみことばを聞くのが最初で最後の機会だとしたらどうだろう、ということを考えました。どの箇所、どの物語、イエスのどのようなことばが、最初で最後、みことばに触れる人に響くだろうか。

そのように考えていたとき、今日の福音朗読はとても心に響くものがありました。「幸い」について語られているのは、客観的には決して幸いとは呼べない状況です。「貧しい人々は、幸いである」「今飢えている人々は、幸いである」「今泣いている人々は、幸いである」こうした状況が、どうして幸いと呼べるでしょうか。

ところが、イエスはこの状況を「幸い」に変えてくださいます。貧しさ、飢え渇き、涙する場面に、イエスは共にいてくださるからです。イエスがそこにいなければ、貧しさ、飢え渇き、涙する場面は悲しみのどん底になりますが、神の国を用意してくださるイエスがそこにいてくださるなら、悲しみが喜びに変わります。

四人部屋の病室、おそらく誰も面識がありません。たとえばそこに一ヶ月入院すれば、たまに見舞いに来る家族だけが話し相手かも知れません。その話し相手も、15 分経てば病室を去って行きます。次に来るときまでずっと、不便な生活や病との闘いを一人耐えなければなりません。完全に、語りかける相手が存在しないのであれば、病院生活のつらさは

どれほどでしょうか。

ただ、聖体拝領を受けた患者は、入院中も神に語りかけることができます。枕元には祈祷書が置いてありました。朝晩、祈祷書の祈りで神に語りかけているのでしょう。孤独の中でも神に語りかけることができる。イエスがそばにいてくださる。その信頼で、泣きたいような状況が、幸いな状況に変わるわけです。

もちろん、私も顔を見せ、聖体を授け、神が共にいてくださることを見えるしるしで伝えることは大切です。そしていつか、悲しみのどん底が、「イエスが共にいてくれたから幸いだった」そう言えるようになって、同じ境遇の人を慰め、励ますことができる人になってくだされば と願います。

私が四人部屋に見舞ったその人は、根は明るくて物事を前向きに捉える人だと思っていますので、きっとイエス様の語る幸いを、体験によって語れる人になれると信じております。

年間第 7 主日(ルカ 6:27-38)

主日の福音 2025/2/23(No.1341)

年間第 7 主日（ルカ 6:27-38）

チャンスを活かしきるのは神。敵を愛するまで

「敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にしなさい。」（6・27）イエスは、ご自分の深い愛に満ちた活動を弟子たちに示しながら彼らと過ごしてきました。「わたしの言葉を聞いているあなたがたに言っておく」この「あなたがた」が弟子のことですから、弟子たちはきっとイエスから「人を愛しなさい」という掟を命じられるだろう、それくらいは想像できたと思います。

しかし、「敵を愛しなさい」と命じられるとは思っていなかったでしょう。誰を愛するか、考えるチャンスを与えられましたが、「敵を愛する」というのは思い浮かばないからです。「人を愛しなさい」という命令だったら、「準備はできています」と答えられたのに、「敵を愛しなさい」と命じられて不意を突かれた。弟子たちの反応は、今週の朗読以降にも見つかりません。困り果てていたことが暗に示されています。

「どのように行動するか」を選べる。そういうチャンスが与えられているときに、どれを選ぶか考えていたけれども、「これを選んでください」と示されたのが、全く考えになかったものだった。そういうとき私たちはどうやって受けとめたら良いのでしょうか。

さて、今日は 2 月 23 日ですが、ここだけの話、年数が長くなっている長崎教区の司祭たちは、次の赴任地についていろんなことが頭をよぎっていると想像しています。だいたい、御復活の 2 ヶ月前は、予備の通知が来て、御復活の 1 ヶ月前には正式な通知が来ます。

長崎教区では司祭が「任地」について希望を出す習わしがありません。それでも「移動の可能性がある司祭たちはこれくらいの人数だろう。そうなると行き先になりそうな教会はここと か、ここになるのかな」みたいなことは、漠然と考えているだろうと思っています。

しかし、イエスが弟子たちに「敵を愛しなさい」と命じられたように、「いやそれは考えてなかった」という任命を渡されることは十分あり得ます。かく言う私は「福江教会」の任命を受けたときに、ほかにもたくさん付随していることを十分理解していませんでした。つまり、浜脇教会と井持浦教会の主任司祭も兼務です。

さらに下五島地区の地区長です。肩書きが増えただけでなく、会議の数も小教区評議会、顧問会、地区評議会など、ぐっと増えてきます。考えてなかったことも含めて「愛しなさい」とイエスは言われるのです。

もうすでに目が回りそうですが、今回私には助祭があてがわれて、助祭を無事司祭に育てて送り出す。その務めもすぐにやって来ました。思ってなかったことが次々にやって来た。「これも愛しなさい。あなたが考えもしなかったことかもしれないが、愛しなさい」そう言われていると感じます。

できないなりに務めを果たしてみて思うのは、与えられたチャンスを活かしきるのは人間ではなくて神なのだということです。下五島地区

に来て「愛しなさい」という新しいチャンスを与えられましたが、私個人ではそれを活かしきるのは難しいことでした。人間ですから、したいことしたくないこと、興味のあることないこと、いろいろあります。

しかしそんな小さな器しか持ち合わせていない人間をたくさん働かせるのは、やはり神様なのだと思います。「人を愛しなさい」は分かりますが、「敵を愛しなさい」は理解できません。「人を愛する」というチャンスを活かしきり、人間が思いも付かない所まで幅を拡げてくださるのは、神なのです。

私たちは、それぞれ置かれた場所があります。「人を愛しなさい」ということは当然のことですが、イエスはその命令を完成させてくださいます。私たちにはとても思い付かない「敵を愛しなさい」という形まで、幅を拡げて、完成させてくれるのです。

あなたは、置かれた場所で誰を愛しますか。誰に親切にしますか。誰にだったら祝福を祈り、誰のためだったら祈れますか？完成させてくださるイエスの招きに信頼して、「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい」（6・36）この高みを目指して歩んでいきましょう。

年間第 8 主日(ルカ 6:39-45)

主日の福音 2025/3/2(No.1342)

鷹ノ巣殉教記念ミサ(練り直し)(ルカ 6:39-45)

迫害に打ち勝つ信仰を学んで持ち帰る

3月2日､鯛ノ浦小教区内の鷹ノ巣で起こったキリシタン六人斬り殉教記念碑前でミサを一緒にささげ、説教をさせてもらうことになっています。今週はその際の説教をもとに説教を組んでおります。起こったことをかいつまんで話すと、「キリシタンを征伐に行こう」と考えた侍が、「試し切り」と称してキリシタンの親子六人を刀にかけた事件です。

教会の暦では、今週火曜日までが年間の季節で、5日灰の水曜日からは四旬節に入ります。原則として、四旬節の日曜日には主日のミサ以外のミサ（結婚式ミサ、葬儀ミサ、種々の機会のミサ、信心ミサなど）をささげることができませんので、鷹ノ巣でのミサが3月2日に計画されたことはとても賢明な判断でした。

鷹ノ巣で命を落としたのは中田寅吉の妻ヨネとその子二人、ヨネの姉夫婦中田友吉・中田コンとお腹の子でした。寅吉の留守中の出来事でした。その後寅吉はのちの島田喜蔵神父様の姉チヨと再婚します。どのような事情であったか分かりませんが、信仰のゆえに命を奪われたこの出来事を、再婚してもうけた子どもたちに語り伝えようとしたというのは十分考えられることです。

再婚してもうけた子どもは五人でした。倉吉、イネ、モミ、七右ェ門、留蔵です。そのうち、七右ェ門の末っ子の子どもが、中田神父とその兄弟姉妹です。私は祖父の記憶がありませんが、祖母ツネは祖父から十分に鷹ノ巣キリシタンの殉教物語を聞いていたようで、私が神学校にお世話になってから祖母を訪ねに行くと決まって鷹ノ巣の殉教の話を聞かされておりました。

「悪い実を結ぶ良い木はなく、また、良い実を結ぶ悪い木はない。木は、それぞれ、その結ぶ実によって分かる。」（6・43-44）中田寅吉が最初に結んだ家族は、殉教という実を結びました。再婚によって結んだ家族も、確実に信仰の試練を後世に語り伝えました。

先祖の信仰に養われた月足らずのような私も、司祭に呼ばれました。「木は、それぞれ、その結ぶ実によって分かる。」もしこれが文字通りであるなら、中田寅吉とその家族は「良い実を結んだ良い木」だったのだと思います。

六人斬りの出来事が起こったのはキリシタン禁令の高札が撤去される3年前、1870年、明治3年です。1月27日、冬の盛りに起こりました。今日は2025年、令和7年3月2日ですから155年が経過したことになります。155年前の話を語り継いでいる。これはすごいことです。

人は自分の体験を、後世に語り継ごうとするものですが、しかしあまりにも残酷な出来事は語れません。広島・長崎に投下された一発の原子爆弾、その犠牲者の多くは、長い間出来事を語ろうとしなかったそうです。あまりにも悲惨だったからでしょう。

私たちはどうでしょうか。たとえば下五島地区には牢屋の窄の殉教

の歴史がありますが、これから 10 年後に出来事は語り継がれているでしょうか。少し延ばして 20 年後の未来を考えたとき、迫害の歴史はまだ語られているのでしょうか。

信仰体験と被爆体験は、語り方が少し違うかも知れません。被爆体験は、二度と起きてはいけないこととして語り継いでいますが、信仰体験は、迫害がもし再び起こったら、あなたは同じように命をかけますかと問いかけます。信仰の試練は、これからも起こるでしょう。その試練と正面から向き合う勇気こそ、語り継ぐべきものなのだと思います。

「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」（マルコ 16・15）私たちには、どんな世界が待っているのでしょうか。今この時代も私たちの生きている世界です。私たちは信じている信仰の価値を伝えます。そして 10 年後の世界にも、たとえそこで迫害や試練を体験するとしても、イエスの福音は生きる価値がありますと、伝える人でありたいものです。

各地で経験した迫害に系図で繋がる人はそう多くはないかも知れません。しかし迫害に正面から向き合う勇気を学んで帰るなら、私たち皆が「良い実を結ぶ木」です。マタイ 5 章の 11 節「わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである」と置き換えてもよいでしょう。

「キリスト・イエスに結ばれて信心深く生きようとする人は皆、迫害を受けます。」（2 テモテ 3・12）今日のミサで学びを持ち帰る人は全て、イエスが語る幸いを生きる人なのです。勇気を持って、迫害に打ち勝つ信仰を後世に語り継いでいきましょう。

6:39 イエスはまた、たとえを話された。「盲人が盲人の道案内をすることができようか。二人とも穴に落ち込みはしないか。
6:40 弟子は師にまさるものではない。しかし、だれでも、十分に修行を積めば、その師のようになれる。
6:41 あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。
6:42 自分の目にある丸太を見ないで、兄弟に向かって、『さあ、あなたの目にあるおが屑を取らせてください』と、どうして言えるだろうか。偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目にあるおが屑を取り除くことができる。」
◆実によって木を知る
6:43 「悪い実を結ぶ良い木はなく、また、良い実を結ぶ悪い木はない。
6:44 木は、それぞれ、その結ぶ実によって分かる。茨からいちじくは採れないし、野ばらからぶどうは集められない。
6:45 善い人は良いものを入れた心の倉から良いものを出し、悪い人は悪いものを入れた倉から悪いものを出す。人の口は、心からあふれ出ることを語るのである。」

四旬節第 1 主日(ルカ 4:1-13)

主日の福音 2025/3/9(No.1343)

四旬節第１主日（ルカ 4:1-13）

いま留まっているものは神の愛を体験させてくれますか

四旬節に入りました。「四つの」「旬」の「季節」と書きます。「旬」は 10 日間ですから、40 日間となります。御復活前の回心と償いの季節です。すでに今年の「灰の水曜日」に参加されて、受難の主日で持ち帰った枝を焼いて灰にしたものを頭に受け、断食の務めを果たした人もいるでしょう。この四旬節を過ごす中で、神が喜んでくださる生き方、神が受け入れてくださる生き方をこれまでよりも目指すことにしましょう。

その、四旬節の最初の日曜日の福音朗読に、イエスが誘惑を受ける場面が選ばれています。イエスが悪魔から誘惑を受けて、それをきっぱりはねのけた。それだけのことのように思えるかも知れませんが、「一つの言葉」をもっとていねいに読む、学ぶと、もっと朗読から学べると思います。その言葉は「誘惑する」「試みる」という言葉です。

特に、朗読箇所の最後の場面では、悪魔は「神の子なら、ここから飛び降りたらどうだ」（4・9）と誘惑しますが、その根拠を聖書から引っ張ってきます。「というのは、こう書いてあるからだ。『神はあなたのために天使たちに命じて、あなたをしっかり守らせる。』また、『あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える。』」（4・10-11）

イエスもこれに対して聖書の言葉で反論します。「『あなたの神である主を試してはならない』と言われている」（4・12）。誘惑する者も、誘惑を斥けるイエスも、聖書の言葉を拠り所にしています。そうなると、聖書の中で、「誘惑」「試み」はどのように使われているのか知る必要があります。

そこで調べてみると、「誘惑」「試み」について二通りの使い方が示されていました。人が人を「試みる」「誘惑する」というときと、神が人を「試みる」というとき、この二通りの使い方があるそうです。人が人を試みる、誘惑するのは、人への不信と疑い、神への不信と疑いを生じますが、神が人を試みるのは、試練を与えるだけでなく、神の計らい、神の愛を体験する訓練にもなるのです。

あらためて悪魔の誘惑を分析すると、それは「主を試そうとする思い」なのですから、そこからは神への不信と疑いしか生まれてきません。人からの誘いや自分自身の心の中の声が、神への不信と疑いしか生まれないのであれば、それはきっぱり断るべきです。一方、試練を感じながらもそこに神の計らいや神の愛を感じられるなら、試練は単なる誘惑ではなくなるのです。

この世の中に、「試み」「誘惑」は数えきれません。誘惑の渦の中にいるといってもよいかも知れません。それが、神への不信と疑い、人への不信と疑いを生んでいるなら、それらに向き合う必要はありません。きっぱり断る、離れましょう。しかし試みや誘惑の中には、神の計らい、神の愛を体験させてくれるものもあります。

イエス様は四十日間、誘惑の渦の中にとどまり、すべてに御父のご計画、御父の愛を見いだしました。私たちも四旬節を過ごす中で、自分に降りかかる試み、誘惑としっかり向き合い、神の計らい、神の愛に触れる体験としていきましょう。神への不信と疑い、人への不信と疑いを生むものからはすぐに離れましょう。共にいてくださるイエスが、留まるべきか離れるべきかを見極める目を育ててくださいますように。

四旬節第 2 主日(ルカ 9:28b-36)

主日の福音 2025/3/16(No.1344)

四旬節第 2 主日（ルカ 9:28b-36）

腹黒い古狸でも、イエスは変容させてくださる

いよいよ、洪助祭の司祭叙階式が近づいてきました。私も司祭叙階式前日のことを今でも覚えています。叙階式前日のその日、私とあと二人、それぞれの任地を告げられました。

「〇〇さんは福江教会の助任で働いてください。〇〇さんは三浦町教会の助任で働いてください。中田さんは、浦上教会の助任で働いてください。」二人の安堵の目が私に注がれていました。三人で誰がどこの助任だろうかと想像していたのですが、「浦上教会助任に自分はならないだろう」三人ともそう考えていたからです。

その日はずっと眠れずに、カトリックセンターの部屋から浦上教会を眺めておりました。どうして私が務めることができようか。川添神父様のもとでお仕えできるだろうか。そんなことを考えていたら、眠れなかったのです。

叙階式まであと 6 時間という、朝 4 時に、ようやく眠気が来たので布団に入りました。すると先輩から冗談で言われていた通りの夢を見たのです。「ときどき、受階者の中には、寝坊して叙階式に遅れる夢を見る者がいるんだ。今年の受階者はどうだろうね。」

見事に同じ夢を見ました。叙階式はすでに終わり、他の二人は信徒会館の祝賀会で壇上に上がり、お祝いを受けています。その様子を、私はパジャマのまま信徒会館の外から窓越しに眺めている夢でした。びっくりして飛び起きたら、まだ朝の 5 時でした。あれから 33 年経ちました。

あれから 33 年。私はどうなったのでしょうか。変わった部分と、変わっていない部分とがあると思います。先輩から「右」と言われたら「右」を向いていた素直さは無くなってしまったかも知れません。「倒れるまで働き続ける」という一途な気持ちも、無くなってしまいました。

古狸になり、もっとも嫌っていた腹黒い人間になり、すれ違ったときに感じる聖性の「香り」も感じられなくなりました。それはイエスの「様子が変わり、服は真っ白に輝いた」（9・29）という姿とは大違いです。与えられた使命を果たすたびに、イエスはいよいよ栄光を帯びていく。それに対して私は、年数を重ねれば重ねるほど、煮ても焼いても食えない代物になってきました。

何が、違うのでしょうか。イエス様は御父の使命を生きる中でついに輝きを放つまでになりますが、私は 33 年の歳月だけが増し加わっただけで、シミだらけ、しわだらけ、栄光に輝くイエスを映す鏡にさえなれていません。これまで何かが、足りなかったのだと思います。

そこで考えました。ペトロが「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。」（9・33）ここからの一連の言葉を言い終えたのちの出来事に、私に欠けていたことを見つけたのです。それは「ペトロがこう言っていると、雲が現れて彼らを覆った。彼らが雲の中に包まれていくので、弟子たちは恐れた。」（9・34）ここだなと感じたのです。

つまりこういうことです。イエスに聞き従っていくと決めた生き方だけれども、ときどき、雲が現れて覆われ、心が閉ざされてしまう。それはもちろん、驚き怪しむような体験ですが、そこで何をしたかが問われているのではないでしょうか。

9 章 35 節には「すると、『これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け』と言う声が雲の中から聞こえた」とあります。私はこのみことばに逆らい、イエスに耳を傾けてこなかったのではないか。その結果、腹黒くなり、シミだらけしわだらけになり、悪臭を放っているのではないか。そう思ったのです。

雲が現れて弟子たちを覆ったとき、彼らは恐れました。恐ろしくなりましたが、弟子たちはイエスに聞き従ったのです。それなのに私は、恐ろしくなったときイエスに背を向け、ありとあらゆるこの世のものに依存して、ここまで来てしまった。だから、輝きも、聖性の香りも、何もかもなくなってしまったに違いない。それが私の司祭生活 33 年間だった。そう思えてなりません。

肉親の父親が 2008 年に旅立ち、母親が今、五島中央病院で二ヶ月近く投薬治療を受けて闘病しています。真っ先に頭に浮かぶことは「イエスに委ねられた使命に生きる」ではなく、どうやったら死なない程度に働き続けることができるだろうか。どうやったら不安の中闘病している母親を慰めることができるだろうか。普通に誰もが考えるようなことで頭がいっぱいなのです。

「雲が現れて彼らを覆った。」今まさに、雲が現れて私の周りを覆っています。弟子たちは恐れていましたが、イエスに聞き従うことを捨てなかったのです。なぜ私には、イエスに聞き従うことが真っ先に浮かばないのか。恐ろしい結末をつい考えがちな場面で、「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」という声はどこへ行ってしまったのか。

しかし神は憐れみ深い方です。折り返しを過ぎて初心も忘れ果てた古狸にも、「顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた」そういう体験をさせることがおできになります。神にしかできない奇跡をそばで見せて、私を変えてくださるのです。前日までミサができなかった人がその日からミサをささげる。前日まで、罪を赦す権能を与えられていなかった人が、罪の赦しを与える。

こうしてそばにいる人がすっかり姿を変えるのを私に間近で見せてくださり、もう一度「イエスに聞き従う司祭」に生まれ変わらせてくださるのです。「生涯に一度だけで良いから、すぐそばで、司祭が誕生するという奇跡を見させていただきたい。」そう願っていましたが、それは思いがけず早くやって来ました。

私にもあと 15 年くらいは与えられるかも知れません。その間、心の中が雲に覆われるようなときがまたやって来ても、変わらずイエスに聞き従う司祭でありたいと願っています。聞き従って姿が変わり、真っ白に輝き、自分のために何も残さず、イエス様にお返ししたいものです。

四旬節第 3 主日(ルカ 13:1-9)

主日の福音 2025/3/23(No.1345)

四旬節第 3 主日（ルカ 13:1-9）

「それでもだめなら」と言える覚悟はあるか

大司教様は今年の誕生日前日に、大きなプレゼントを神様から頂きました。それは洪神父様です。大司教様だけでなく、長崎教区全体が、大きなプレゼントを頂きました。言葉では言い表せない喜びです。

ただ、大司教様ほどの立場になると、良いことばかりではありません。今週「実のならないいちじくの木」のたとえでしたが、「もう三年もの間、このいちじくの木に実を探しに来ているのに、見つけたためしがない。だから切り倒せ。なぜ、土地をふさがせておくのか。」（13・7）と、はっきりとした結果を求めなければならないことも出てきます。

ぶどう園の主人が父なる神で、園丁がイエス様だとしたら、「御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。そうすれば、来年は実がなるかもしれません。もしそれでもだめなら、切り倒してください。」（13・8-9）そう言って切り倒されるのはイエス・キリスト自身なのかも知れません。

父なる神が、御子イエス・キリストを切り倒せるはずがありません。しかし、イエスが十字架にかけられたことを考えると、切り倒せるはずがなくても、切り倒すことが求められ、それを実行します。大司教様が、誰よりも父なる神とイエス・キリストに倣って生きるお方であるなら、切り倒せるはずのない相手を、実際には切り倒さなければならない。そういう過酷な立場におられるのではないでしょうか。

今回中田神父は、個人的に「洪助祭が司祭になったら、福江の助任にください」とお願いしました。協力者が完全に新しい司祭になると、一から人間関係を築いていかなければならず、私は負担が大きいと思ったからです。ただ、お願いする側は自分の希望だけ言っておけば良いのですが、大司教様は福江のことばかりを考えてはいられません。

大司教様がぶどう園の主人であるなら、私たち司祭は園丁なのですから、「もしそれでもだめなら、切り倒してください」これが言える人でなければなりません。私の願いがふさわしくなければ、切り倒してください。あるいは私自身を切り倒してください。その覚悟は必要です。

そこまでの覚悟を持たなければ、大司教様だけに辛い決断をさせることになります。私は今回、その覚悟を持っていただろうか。「今年も彼を育てる努力をしますから、このままにしておいてください」と、願うことだけが頭にあったのではないか。反省が残ります。

ぶどう園の主人は、実を付けるまでどこまでも辛抱しますが、一方ではたとえご自分の独り子でさえも、切り倒す決断もおできになる方です。ただ、切り倒す方にだけ残酷な思いをさせてはいけない。主人を信頼した上で、「ためらわずに切り倒してください」と園丁である司祭たちが覚悟を見せることで、大司教様は本当の意味で仕事が出来るのだと思います。

すべての長崎教区司祭が、中村大司教様に、「もしそれでもだめなら、切り倒してください」と言える司祭でありたいものです。

四旬節第 4 主日(ルカ 15:1-3,11-32)

主日の福音 2025/3/30(No.1346)

四旬節第 4 主日（ルカ 15:1-3,11-32）

頂くはずの財産の分け前は父親の深い愛と赦し

ついこの前ですが、母親を福江ターミナルで完全に見失いまして、福江ターミナル案内所で迷子のお知らせの放送をしてもらおうか、真剣に考えるところまで行きました。その日は二回目の投薬治療を終えて仮退院する日で、10 時に病院を退院し、11 時 45 分のフェリーに乗せ、私も付き添って奈良尾で船を降りて弟とバトンタッチする予定でした。

福江港に行ってみると、平日にもかかわらず駐車場にほとんど空きが見当たりません。母親はすっかり足が弱っていて車を遠くに置いて歩かせるわけにもいかず、「ちょっとの距離だから」と思って横断歩道にいちばん近い場所で車から降ろし、「ターミナルの正面玄関で待っててね」と念を押して、私はいちばん遠い場所に空きを見つけたのでそこに車を置いて荷物を抱えて母親に合流しようとターミナルに行きました。

ところが中田神父がイメージしている正面玄関に母親がいません。「中まで入ったのか」と思ってターミナルに入ったら、ジャージを着た中学生がウヨウヨいたのです。雨後の竹の子のように背が伸びた、大勢の中学生に阻まれて、どうしても母親が見つかりません。じっと目を凝らしても、ショルダーバッグをたすき掛けにして投薬治療でごっそり抜けた髪を隠すために帽子をかぶった母親が見つかりません。11 時 45 分まであと 20 分。次第に焦りが出て来て、パニックになりそうでした。

こうなると、良くないことが頭をよぎります。認知症の家族が散歩に出ていったまま、二度と会えなくなった。今晩、私の母親がそのニュースとして流れるのではないか。果てには最悪の結果で発見され、永遠の別れになるのではないか。私は血の気が引き、気が変になったように同じ場所を何度も行ったり来たりします。中学生には異様に見えていたでしょう。あとで知ったのですが、この日は中学校の先生を船で見送る日でした。どうりで中学生と保護者がうじゃうじゃいたわけです。

決心して、放送で呼び出そうと考えたその時、玄関をもう一度見たら母親がフラフラと歩いてきます。遭難者が見つかった瞬間は、こんな感じなのでしょう。肝を潰したのが一転して安堵に変わりました。それと同時に、心の中で母親を叱りたい衝動にも駆られました。しかしここはぐっと我慢して、「心配したんだよ」と声を掛けたのです。

母親はどこを歩いたのか、雨にずいぶん打たれていました。「ジェットフォイルの乗り場に行って、ここじゃないなぁと思い直して玄関に戻ってきた。」心臓が飛び出すかと思うくらい驚きました。それでも、戻ってきてくれて何よりでした。ただ、ありがとうという気持ちでした。

母親とフェリーに乗り、奈良尾港に降り立ちます。弟が打ち合わせ通りに待ってくれていました。ちょっとトラブルがあったことを告げて、今まで以上に気をつけて過ごしてくれと頼んで交代しました。午後 2 時頃に別れましたが、奈良尾からの帰りの船まであと一時間あります。用意していた四旬節第 4 主日の福音朗読を開いて、あー母親を見失ったハ

プニングは、この福音朗読を読むためにあったのだと思ったのです。

朗読は「放蕩息子」のたとえです。父親は下の息子に財産を分与して旅立たせました。私は思ったのです。父親は後悔したかもしれない。息子を説得して、旅立たせるべきではなかった。もはや二度と会えなくなるかもしれない。あるいは最悪の結果で死の国に送り出さねばならないかもしれない。旅立っていく息子の姿を見失ったその時から、生きた心地はしなかったのではないか。そう考えたのです。

私も、同じ思いをしました。あの時、「先に降りててね」と言うべきではなかった。本当に後悔しました。ですから見失った母親を見つけたとき、帰ってきた下の息子を見つけた父親が飛んで行って息子を抱きしめ、息子の謝罪を遮ったのが、痛いほど分かったのです。上の息子は弟の犯した過ちを非難しますが、父親は上の息子が体験しなかった苦しみを味わったので、違う受けとめ方をしたわけです。

「お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。」（15・32）本当に、「死んでいたのに生き返った」「いなくなっていたのに見つかった」を心底体験しなければ、帰ってきた弟、帰ってきた母親を手放しで喜べません。生きているだけで、見つかっただけで赦してあげられる。それを初めて体験しました。

「放蕩息子」のたとえを、私はこれまでもずっと、「父親」の立場で理解しているつもりでした。しかし、誰かを「死んでいたのに生き返った」「いなくなっていたのに見つかった」と言える深い体験をしなければ、本当の意味で父親の立場で誰かを赦し、受け入れることはできない。今回つくづくそう思いました。徐々に年老いていく母親が、より深く放蕩息子のたとえを理解させてくれました。

四旬節第 5 主日(ヨハネ 8:1-11)

主日の福音 2025/4/6(No.1347)

四旬節第 5 主日（ヨハネ 8:1-11）

イエスは今も地面に何か書き続けておられる

今週の福音朗読に学びを得るために、教会の暦を考えておきましょう。今週は四旬節第 5 主日で、来週は受難の主日「聖週間」が始まります。聖週間に入る前に、四旬節の過ごし方の総まとめになるのが今週の福音朗読ではないかなと考えました。

律法学者やファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女性をイエスのもとに連れて来ます。イエスを訴える口実を得るためでした。もし イエスがこの女性に石殺しを命ずるなら、当時ユダヤの国は死刑にする権限をローマから取り上げられていたと思われますから、ローマの禁令を犯したかどで彼をローマに訴えることができます。逆にこの女性を大目に見て釈放するなら、律法違反と騒ぎたてることもできます。どちらにしても、この事件は彼らにとって絶好の機会になっていました。

ここには、私たちが陥りやすい過ちが含まれています。誰かを引き合いに出して、「あの人よりは正しい」「あの人よりはマシだ」と考える傾きです。罪深いと思われる人を引き合いに出して、「私たちは正しいことをしようとしています。違いますか？」と迫っているわけです。

「イエスはかがみ込み、指で地面に何か書き始められた。」これは人々に考えさせる時間を与えたのかも知れません。本来、神の前で罪の大きい小さいや多い少ないなど、どれほどの意味があるでしょうか。パウロの手紙にあるように「裁きの場合は、一つの罪でも有罪の判決が下されますが、恵みが働くときには、いかに多くの罪があっても、無罪の判決が下されるからです。」（ローマ 5・16）神の働きはこの通りです。

イエスはパウロがのちに手紙に書いた通りのことを実行なさいます。「恵みが働くときには、いかに多くの罪があっても、無罪の判決が下される」。罪人を仕立て上げ、自分はあの人よりマシだと考えがちなこの世界に、イエスは「わたしもあなたを罪に定めない」（8・11）と明言して、すべての人に恵みをもたらすために来たことを証明したのです。

今年の四旬節、私たちはどのように過ごしてきたでしょうか。回心と償いのわざに、真剣に取り組んできたでしょう。愛のわざを積極的に取り入れてきたでしょう。ただ、その中でもし誰かが思い浮かび、「あの人よりは四旬節を立派に過ごしてきた」と思うならば、私たちは誰かを罪人にして自分を正しい人にしているのではないでしょうか。

御復活のお祝いまであと二週間あります。この間、イエスは私のためにどのように接してくれるでしょうか。自分が過ごしてきた四旬節を「あの人よりマシだ」と思っているなら、イエスは今も私たちが考えを改めるまで、かがみ込み、指で地面に何か書き続けられるでしょう。

私たちが、イエスのほかに頼る方はいませんと、謙虚さを保つなら、「わたしもあなたを罪に定めない」と言ってくださるでしょう。これからは、四旬節の総仕上げの日々となります。

受難の主日(枝の主日)(ルカ 23:1-49)

主日の福音 2025/4/13(No.1348)

受難の主日（枝の主日）（ルカ 23:1-49）

イエスの愛といつくしみの物差しで生きる

今年の聖週間の説教は、全部五島中央病院で母親の付き添いをしている時間と、たまたま病院で洗礼を授けることになったご夫婦の働きかけで書き上げることができました。

ピラトは、イエスのことを三度も「この人に罪は見つからない」と言います。「三度」この回数がいろいろな場面と結び付いていきます。ピラトが「この人に罪は見つからない」と証言するたびに群衆は「十字架につけろ」と叫んで、イエスを罪のある人にしてしまいました。

ペトロがイエスを三度「知らない」と言ったことを思い出します。長い間イエスと寝食を共にして、「あなたのためなら命を捨てます」（ヨハネ 13・37）とさえ誓ったのに、「知らない」と答えたのです。もちろんペトロは平常心を失っていたのですが、人が平常心を失うと、こんなにも弱いものなのだということを、群衆も含め、あらわになりました。

「あなたたちをゆるさない」とイエスが考えれば、ペトロも群衆もゆるされるはずがありません。しかしイエスは平常心を失った人間をおゆるしになります。三度、ご自分を拒んだことをゆるすため、イエス様は十字架に向かわれました。

私たちは、生涯に一度くらいは、取り返しのつかない過ちをしているのではないでしょうか。私にも覚えがあります。一度と言わないくらいあります。何回も、死刑にならなければならないとすら思っています。しかし、取り返しのつかない過ちを、イエスはゆるしてくださるのです。ゆるされたので、私たちには今日が与えられているのです。

心の中で、人を「十字架につけろ」「あいつは死に値する」と考えたことはないでしょうか。イエスが「あなたは心の中で人を死刑にしましたね。あなたはもはやゆるされません」と断定すれば、私たちに今日という日は与えられないはずです。しかしイエスはそうはなさいませんでした。私たちが今日も生きられるように、私たちのために十字架にはりつけにされ、私たちの取り返しのつかない罪を今日もゆるしてくださっているのです。

私たちは主の祈りで「わたしたちの罪をおゆるしください。わたしたちも人をゆるします」と唱えています。私たちが人をゆるすときの物差しは何でしょうか。私たちが人をゆるすとき、それはイエスの愛といつくしみが物差しとなるべきです。私が先に、イエスの物差しでゆるしていただいたからです。

「あんな人は死んでしまえ」と心の中で思った。それをゆるしてもらったのであれば、人に対してもイエスの物差しで接してあげましょう。たとえ相手が、イエスの物差しを知らない人であっても、私がイエスの物差しで人生を生きることは尊い価値があり、神に覚えられるのです。

聖木曜日(ヨハネ 13:1-15)

主日の福音 2025/4/17(No.1349)

聖木曜日（ヨハネ 13:1-15）

罪を覆うのはイエスが与える神の愛

今日、洗足式が予定されています。最近、洗足式に協力してくれる人を確保するのが難しくなってきました。そこには何かしらの理由があるのでしょうが、洗足式がいつの時代でも「あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない」（13・14）というイエスの命令・イエスの模範を受け入れる道具であってほしいと願います。

イエス様は、いよいよ救いの計画が完成に近づいて、弟子たちに深い愛をお示しになります。「イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。」（13・1）イエス様が「この上なく」示された愛は、いったいどれほどでしょう。

イエス様が示された模範は、弟子たちの理解を超えていました。足を洗おうと弟子たちに近づくイエス様に、弟子たちは困惑しています。「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか」（13・6）。

最近同じ光景を私は目撃しました。司祭に叙階された洪神父様の最初の祝福を受けようと、中村倫明大司教様が洪神父様の前に跪いたのです。「大司教様、あなたがわたしの祝福を受けるのですか？」それを見た私は心の中で考えました。「大司教様、とんでもないことです」と。

まことの神の祝福を、洪新司祭を通して大司教様が願ったのですから、「とんでもない」と考えた中田神父の考えが間違っていることは確かです。しかし私の心に最初に浮かんだ言葉は残念ながら「さすが大司教様。すばらしい」ではなく、「とんでもないことです」だったのです。

弟子たちには、僕の姿を取られたイエスの模範が理解できませんでした。すでにイエスを裏切る考えを抱かせていたイスカリオテのユダさえも足を洗ってあげるのは、考えられないことです。客観的にユダは、取り返しのつかないことをしようとしているのです。

ここにおられる皆さんが、足を洗ってもらいたくない理由を持っているのは知っていますが、イエス様は足を洗うことでこの上なく愛し抜こうとしておられます。それを拒む理由として、足を洗ってもらいたくない人の述べる理由は十分ではないと思います。

イスカリオテのユダさえもイエス様は包み込もうと、弟子たちの前にかがみ込もうとしておられます。神の愛だけが、弟子を包み、覆うことができます。今日、洗足式に協力してくださる方々は、人類すべてを包み、覆う神の愛に自分を委ねようとしている方々です。

今年、洗足式のために一歩前に進み出ることができなかった人も、来年は前に出てほしいです。この上なく愛し抜かれたイエスに、自分を委ねる人がいるなら、イエス様が残された聖体の秘跡も、それを取り扱う司祭職も、この世界に残り続け、イエスの愛の記念を現代に証しし続けることができます。

聖金曜日(ヨハネ 18:1-19:42)

主日の福音 2025/4/18(No.1350)

聖金曜日（ヨハネ 18:1-19:42）

イエスは十字架上ですべてを成し遂げられた

受難の主日の受難の朗読には、ほかに十字架につけられた犯罪人の侮辱の言葉が残されていますが、聖金曜日のヨハネ福音書の受難の朗読では、「また、イエスと一緒にほかの二人をも、イエスを真ん中にして両側に、十字架につけた」（19・18）とだけあって、犯罪人は登場しません。十字架上のイエスに、より注意を向けさせようとしています。

なぜイエスは十字架から降りないのでしょうか？中田神父なりに、二つ考えました。一つは、すべての人の罪を背負うためです。イエスを裏切った弟子。でっち上げの裁判を開いた指導者たち。死刑に引き渡した人。本当のことを知ろうとせず、「十字架につけろ」と叫ぶ人。また今日の朗読では衣服を剥ぎ取って分け合う兵士たちもいます。すべての人の罪を背負うために、最後まで十字架から降りませんでした。

もう一つ考えたのは、積極的にイエスを十字架につけていない人たちです。宗教指導者や彼らに同調するユダヤ人に加担はしていませんが、意思表示しなかった人、明確に反対しなかった人のためにも、イエスは十字架にとどまったのではないか。そう考えました。

明確に反対しない人は、当時の人々だけではありません。現代にも繋がっています。私たちはいろんな場面で、反対すべき時に反対せず、態度を曖昧にすることがあります。それは強い言葉を使うなら、卑怯な態度です。当然、卑怯な人も罪人です。

では、罪人は十字架上のイエスのもとにいてはいけないのでしょうか。そうではありません。罪人に「あなたはここにいていいのだよ」と伝えるために、イエスは十字架にはりつけにされた姿でとどまっておられるのです。イエスが罪人の一人に数えられたのは、「あなたはここにいて良いのだ」そう伝えるためではないでしょうか。

私は 3 月 20 日、叙階式ミサの教話で、なぜイエス様は十字架から降りないのか、そのことを受階者のお二人は説教台から、祭壇の上で、告げ知らせてくださいとお願いしました。その答えが、「あなたはここにいていいのだよ」ということなのです。

説教の最後に、イエスが十字架の上で「成し遂げられた」と言われたことにも目を留めましょう。「そこには、酸いぶどう酒を満たした器が置いてあった。人々は、このぶどう酒をいっぱい含ませた海綿をヒソプに付け、イエスの口もとに差し出した。イエスは、このぶどう酒を受けると、『成し遂げられた』と言い、頭を垂れて息を引き取られた。」（19・29-30）私たちは頭を下げて、しばらく沈黙のうちに祈りました。

「成し遂げられた」。イエスはこの言葉を最後の晩餐でなく十字架の上で語りました。つまり、すべてが成し遂げられた場所はこの十字架上なのであり、私たちは十字架上から「成し遂げられた」と言われるイエスを、心に納めて家に帰るのです。私たちは出来事の証人なのです。

復活徹夜祭(ルカ 24:1-12)

主日の福音 2025/4/20(No.1351)

復活徹夜祭(ルカ 24:1-12)

十字架のイエスも復活すると呼びかけている

主の復活、おめでとうございます。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。」(26・6）空の墓に立ちすくむ婦人たちに、神の使いはイエスの言葉で解き明かします。

神の使いがイエスの言葉を引用したのは、イエスの言葉だけが、動揺する婦人たちを納得させる力を持っていたからです。「婦人たちはイエスの言葉を思い出した。」（24・8）姿形が無い以上、婦人たちの拠り所はイエスの言葉だけでした。

婦人たちは、墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせました。しかし使徒たちは、「この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった」（24・11）とあります。弟子たちをかばって言うならば、弟子たちもまた、イエスの言葉だけが自分たちを納得させる力を持っていたので、まだ信じられずにいたのでしょう。婦人たちの言葉では、自分の殻を破って、墓に向かうことができませんでした。

しかしペトロは墓に向かいます。「ペトロは立ち上がって墓へ走り、身をかがめて中をのぞ（いた）」（24・12）。「立ち上がって墓へ走った」とありますが、座っていた人が立ち上がるためにはよほどの理由があるはずです。ペトロは、婦人たちの言葉を「イエスの言葉を含んでいる」と受けとめて、墓へ行ったのです。ペトロは誰よりもイエスの言葉を必要としていたし、誰よりも先に出来事を理解したかったはずです。ただ、墓には亜麻布しかなかったので、驚きながら帰りました。

婦人たちは神の使いを通してイエスの言葉を思い出しました。使徒たちを代表するペトロは、イエスの言葉を確かめようとして、墓では確かめることができませんでした。登場人物は共に「イエスの言葉だけが、自分たちを納得させる力を持っている」と考えていたのです。

最後に考えましょう、今日ここにお集まりの皆さんは、何を求めておいでになったのでしょうか。「年に一度は、御復活祭の頃に聖体を受ける」この義務からでしょうか。「復活の喜びを教会家族皆と分かち合いたい」こんな思いを持って、おいでになったでしょうか。

説教を聞きながら、「婦人たちやペトロのように、私もイエスの言葉だけが私を納得させる力を持っていると信じています。」「ですから復活したイエスの言葉を確かめに来ました」こんな動機になってくれたらすばらしいと思います。

もしかしたら、「今年の復活徹夜祭では、イエス様は何も語っていないではないか」と考えているかも知れません。ではどこに、復活したイエスの言葉を求めたら良いでしょうか。十字架上のイエスが語ってくださいます。「人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている」（ルカ 24・7）。

主日の福音 2025/4/20(No.1352)

復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）

聖書の言葉は復活したイエスにすべての人の心を開く

あらためて主の復活おめでとうございます。この復活の主日（日中）で朗読された箇所の結びは、中田神父にとって非常に印象的です。「イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。」（20・9）

復活徹夜祭で、「イエスの言葉だけが人々を納得させる力を持っています」と話したのですが、今日の復活の主日（日中）の先ほどの箇所を前もって読まずに準備したとはとても思えない、神の深い配慮を感じます。個人的には、これこそ「言うべきことは、聖霊がそのときに教えてくださる」（ルカ 12・12）これだと感じました。

復活徹夜祭で考えたことが、日中のミサでさらに深まりました。イエスと生活を共にした人々にとって、「イエスの言葉だけが人々を納得させる力を持っている」というのは理解できます。しかし、時間の経過と共に、イエスと生活を共にした人、イエスがおられた同時代の人々はいなくなります。その疑問に、日中のミサの朗読が答えてくれました。

「イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかった」。聖書の言葉がはっきりと理解できたとき、イエスと生活を共にした人でなくても、イエスの復活を信じることができるということです。

実は今年の聖週間に、一人の方が病床で洗礼をお受けになり、洗礼台帳の 2824 番として記録されました。病床でどのようにしてカトリックの信仰と出会い、イエスを信じ、洗礼を受けることになったのでしょうか。この説教を準備する時点でまだ洗礼式を終えてませんでしたので、おおよそこのようなことだろうという内容をまとめてみます。

洗礼を受けた方には配偶者がおられます。すると配偶者を通してカトリックの信仰に触れたことはすぐに分かります。しかし、配偶者がカトリックで自分はカトリックでないという方はいくらでもいらっしゃるでしょう。そのすべてが配偶者を通じて洗礼を受けるわけでもないですから、何かを理解したから洗礼を受けたのだと考えられます。

それは、やはり聖書の言葉だと思います。配偶者のどこかに聖書の言葉が刻まれていて、その聖書の言葉が照らし導いたのではないでしょうか。イエスと生活を共にしていなくても、イエスと同時代の人でなくても、聖書の言葉は「イエスは必ず死者の中から復活されることになっている」ことを理解させ、ある人を洗礼の恵みへと導いていくのです。

最後に、徹夜祭では「復活賛歌」を歌い上げました。本日、日中のミサでは「復活の続唱」が歌われました。復活の続唱はこれから一週間続きます。聖書の言葉を信じるなら、時代を超えて人は復活の主に出会い、その中には洗礼の恵みにあずかる人も現れる。そのことを信じて、これからも復活の主を世に向かって告げ知らせることにしましょう。

神のいつくしみの主日(ヨハネ 20:19-31)

主日の福音 2025/4/27(No.1353)

神のいつくしみの主日（ヨハネ 20:19-31）

聖霊を受けなさい

私たちを13年にわたって導いてくださったフランシスコ教皇様がお亡くなりになりました。選ばれた年齢が高齢だったので、与えられる時間はそう長くないと、ご自身十分理解していたでしょう。ですから教皇様は、就任された直後から、次々と驚くべき業績を残されました。

教皇様ご自身が発表する文書に「回勅」というものがありますが、環境問題に正面から取り組まれた初の回勅「ラウダート・シ（ともに暮らす家を大切に）」は、預言者が現れたと思わせるような文書でした。預言者は、神が語られた言葉を伝える人ですが、現代人に神様が警鐘を鳴らすなら環境問題でしょう。ですから本当に預言者だったのだと思います。

フランシスコ教皇様が残された業績をもう一つと言われたら、私は第16回の世界代表司教会議（シノドス）」で取り上げられ、これからの教会が目指すべき道だったと思います。この会議は「ともに歩む（シノドス的）教会のため――交わり、参加、そして宣教」というテーマのもとに開催されました。

従来の教会は、聖職者が決めたことを信者が守り、実行する。そうした傾向があり、硬直してしまっていました。教会は今、シノドスの道を、すなわち互いに耳を傾け合い、互いに支え合い、互いに祈りのうちに聖霊の導く方へと歩んでいくことを当たり前にしようとしています。

第16回通常シノドス総会において、教皇フランシスコがしばしば口にされたのは、「聖霊が主役です」という言葉だったそうです。それは、今教会に必要なのは「聖霊の導きに素直に耳を傾ける」ということです。「聖職者に」だったのを、はっきり「聖霊に耳を傾ける」としたのです。

もちろん、ああなるほどと聞いてすぐに分かる内容ではありません。それでも、何度も思い巡らすとき、私たちは必ず「聖霊が主役の教会」を実現していけるのだと思います。今週の「神のいつくしみの主日」に選ばれた福音朗読箇所が、まさにヒントを与えてくれました。イエス様が力強く「聖霊を受けなさい」（20・22）と言っておられるからです。

イエス様は、これからを弟子たちに委ねます。その際、弟子たちに息を吹きかけて「聖霊を受けなさい」と仰いました。聖霊が導き、働いているとき、本来の教会の姿を取り戻します。弟子たちも、聖霊の息吹を受けて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた状態から、本来の宣教する姿を取り戻していきます。

トマスもそうです。彼もほかの弟子たちに復活したイエスが現れたと聞かされても、心の戸に鍵をかけてしまいました。硬直した司祭、硬直した信者、硬直した教会共同体の姿でした。そのトマスにも聖霊の息吹が注がれて、ともに歩む者の一人と変化していったのです。

私たちに注がれる聖霊。それは神のいつくしみの形ではないでしょうか。復活したイエス様は「あなたがたに平和があるように」と仰って、

手とわき腹とをお見せになりました。弟子たちを責めるためではありません。手と、わき腹の傷の先におられる復活の主、栄光あるイエス・キリストの手で包み込み、脇に抱きかかえるためです。

弟子たち自身も傷を抱えていましたが、神のいつくしみに包まれたことで、すべての人を神のいつくしみで包むように、諭されたのです。それは最も深い傷を負ったトマス、先に出現を受けた弟子たちより深く傷ついていたトマスにも、誰よりも神のいつくしみを理解し、人々を同じように包む者となるよう教えてくださったのでした。

神のいつくしみを受けて、一人ひとりが神のいつくしみを届ける人になれるかどうか。その決め手は聖霊の恵みだと思います。私たちが神のいつくしみに包まれ、神のいつくしみを届ける人となるために、イエスは今も私たちに「聖霊を受けなさい」と招いています。

復活節第 3 主日(ヨハネ 21:1-19)

主日の福音 2025/5/4(No.1354)

復活節第 3 主日（ヨハネ 21:1-19）

形だけでなく生き方も主の招きに応える

中田神父は 1966 年生まれですが、1966 年生まれの人の価値はどれくらいなのでしょうか。ワインに例えてみました。ネットショップで 1966 年物のワインに付けられた値段は、2 万円とか 3 万円とか、ちょっと手が出せない値段でした。もちろんそれ以上の値段もあります。

日本では、人間国宝に認定された人がいます。人間国宝は、伝統的な芸能や工芸技術を極めた人が、国の認定を受けることで、認定された人はその技術を継承・発展させる役割を担います。不思議だなと思うのは、人間国宝に認定される人は若い人ではなく、お年を召された方です。

歳を取ると機敏な動作はできなくなるし、視力聴力、全般的に落ちてくるし、体力も衰えてきます。きっと若い人のほうが、機敏な動作ができるし、記憶や体力も充実しているでしょう。それでも、伝統的なものを極め、歳を重ねた人が人間国宝に認定されているわけです。

今週の福音で、イエスはペトロにこう言っています。「わたしの羊を飼いなさい。はっきり言っておく。あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。」（21・18）これは何を言おうとしているのでしょうか。

「若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。」ペトロであっても、自分で何でもできると思ってしまい、勘違いすることもあったでしょう。けれども年をとってから、違う形で神の栄光を現すようになるのです。

ペトロにイエスが「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか」（21・16）と三度尋ねるわけですが、若いときに問いかけられるのと、年をとってから問われるのとでは明らかに違うと思います。ペトロが問いかけられたのは、目の前の三度だけでないかもしれません。

つまり、イエスと宣教活動に出かけていた頃、ペトロが使徒たちの頭として活躍していた頃、ローマで殉教する瞬間、それぞれの三つの場面にも思い出したのではないでしょうか。ローマで殉教するとき、「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか」あのイエスの言葉がよみがえり、「主よ、あなたは何もかもご存じです」（21・17）ときっぱり答えたのだと思います。

それが、一つひとつの言葉の重みなのかも知れません。助任司祭の時代に、主任司祭の説教を何度も聞きに行って、「なんだ。あれくらい自分でも話せる」と思ったものです。しかし当時の主任司祭の年になってみて、「時間だけが過ぎたのではないか。何一つ近づけていないのではないか」と、愕然とするのです。

「年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。」本当に、行きたくないところに連れて行かれることばかりです。それでも、イエスの十字架の意味を学ぶため

には本物の十字架を背負う必要があり、眠れない日があったり、痛みをこらえて日々の務めを果たす中で「これこそ、行きたくないところへ連れて来られたのだなぁ」と実感するのです。

年齢によって、境遇によって、ささげるべきものが違います。それでも、1966年生まれの同世代の中で、イエス様から手に取って貰えるワインでありたいと思います。「わたしに従いなさい」（21・19）との言葉に、形だけでなく生き方も、応えていきたいものです。

復活節第4主日(ヨハネ10:27-30)

主日の福音 2025/5/11(No.1355)

復活節第 4 主日（ヨハネ 10:27-30）

マリアに倣い、イエスが留まれる場所に自分を変える

新しい教皇様が選ばれました。ミサの中で唱えられないのではないかと心配してましたが、安心しました。また本日は世界召命祈願の日でもあります。そのことも含めて話したいと思います。

今年のルルド祭は聖年に行われました。説教を聞いている時点で、指定巡礼地を訪れ、教皇様の意向にしたがって、主の祈り・アヴェマリアの祈り・使徒信条をささげ、聖体拝領も予定していますから、あとは聖年に与えられる免償を受けるために、ゆるしの秘跡を 20 日前後の期間内に受けましょう。そうすることで、全免償を受けることができます。

福音朗読でイエスは言われました。「わたしは彼らに永遠の命を与える。」(10・28)復活祭を祝ってから三週間になりました。復活の主は、ご自身のために何も残さず、私たちにすべてを与えてくださいました。その上に、永遠の命を与えてくださいます。人類は、この「すべてを与えてくださるお方」にどのように感謝すればよいのでしょうか。

私たちから、主イエスに何かを与えることができるのであれば、もちろん喜んで与えたいですが、私たちはイエス様に与えることのできるものを持ち合わせていません。人と人とが互いに贈り物をするように、互いに与え合うことができないのです。

全人類が、イエスに対して同じなのでしょうか。ただ一人、神の御子に持っているものを与えることのできたお方がいました。それは、イエスの母マリアです。マリアは被造物の中で唯一、イエスに与えることのできるお方でした。「わたしは彼らに永遠の命を与える」（10・28）と言われる方に、マリアはこの世の命をお与えになったのです。

ただ一人イエスに与えることのできたマリアと、私たちとの違いは何でしょうか。それは「無原罪の御宿り」ということです。ベルナデッタを通しておおやけになった「恵みあふれる姿」が、私たちとの違いです。私たちはここ井持浦のルルドに集まり、永遠の命を与える唯一のお方である神の御子にこの世の命をお与えになったマリアをたたえます。

マリアをたたえる私たちは、マリアを恵みで満たした同じ神の恵みに照らされて少しずつ学びを得ます。マリアは神の御子に、言わば「宿」を用意しました。母となったすべての女性と同じく、およそ 10 ヶ月宿を用意しました。実は私たちも、今日のルルド祭のミサ（各自のミサ）に参加してイエスに「宿」を用意できるのです。どんな「宿」でしょうか。

イエスは最後の晩餐で、ご自身を食べ物としてお与えになる「聖体の秘跡」を残してくださいました。聖体となられたイエスは、ご自身のとどまる「宿」を必要としています。「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。」（黙示録 3・20）ルルド祭のミサでみことばと聖体に養われる私たちは、しばしの間イエスに「宿」を用意できるのです。

今日の典礼でイエスにお宿を用意できるのは短い時間かもしれません。マリアは24時間、それも長い期間お宿を提供しました。私たちが望むなら、24時間、しかも人生という長い時間を、イエスのお宿として提供できます。特に、マリアに倣いたいと願う方々に、神はあなたの望みを叶える召命の恵みをお与えくださるでしょう。

願うことを叶えるためには、きっと理解者、協力者も必要でしょう。教会によっては、司祭修道者の召命を支える信心会や委員会のあるところもあります。イエスがいつも留まることのできる宿となりたい。また、そんな召し出しのある人を支えたい。この願いが叶えられるように、ルルドの聖母に取り次ぎを願いつつ、ミサを続けてまいりましょう。

復活節第5主日(ヨハネ13:31-33a,34-35)

主日の福音 2025/5/18(No.1356)

復活節第 5 主日（ヨハネ 13:31-33a,34-35）

新しい掟は人を新しい生き方に導く

皆さん、ミサに来たときにあまり見かけない人がいたらどんな反応をするでしょうか。皆さんのほとんどが日本人ですから、すぐにお近づきになるのは無理でしょう。今週イエスは、「互いに愛し合いなさい」と仰せになります。

今週の福音の「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい」（13・34）を黙想するために、一つの箇所を参考にしたいと思います。ヨハネ 15 章 13 節です。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」

私が一緒に読み比べたいヨハネ 15 章 13 節は、「どのように愛するのですか」と聞かれたときの答えです。ただ、「自分の命を捨てる」は、説明が必要でしょう。もちろん、「ゴミ箱に捨てる」という意味ではありません。話の中でどのように使われているかを考える必要があります。

ここには、「自分の命を投げ出す、差し出す」ということは含まれていると思います。自分の命を投げ出すと、どうなるのでしょうか。投げ出された命は、「条件を付けない」で用いられることになります。

信頼している友に、「わたしの命をあげるから、このような使い方をしてほしい」と条件を付けるのではなく、「わたしの命、わたしにとって何よりも大切なものを、条件を付けずに差し出します。」そういう意味で捉えましょう。

「互いに愛し合いなさい。」互いに、自分がいちばん大切と思っているものを差し出します。その際、条件を付けずに与えるのです。「わたしがこれだけ愛したのだから、同じだけ愛してほしい」ということではありません。

「愛する」ことには、時間や都合やまごころを与えること、さらにはゆるすことも含まれるでしょう。それらを、使い方に条件を付けるのではなく、期限を設けてゆるすのでもなく、無条件に与え合う。これは通常考えられる愛の形ではないわけです。イエスご自身が模範を示され、イエスだけが与えることのできる掟、つまり、「新しい掟」なのです。

互いに愛し合うという「新しい掟」を学んだ人は、従来の掟を超えた生き方が必要です。新しい生き方が必要です。従来の生き方は、何かを期待して与えたりゆるしたりしていました。しかし、イエスが示された「新しい掟」を学んだのですから、家庭の中で、社会の中で、条件を付けずに愛し合うことが求められています。

実はすでに、学ぶ前から新しい掟を生きている人もいます。子どもを育てる親の中には、人に言えない苦しみを抱えている人もいます。配偶者の一方は子どもを無条件に愛していても、もう一方は子どもが親の期待に沿わず、結果が出ないのはお前のせいだと責められている場合があります。

それでも、無条件で配偶者にも子どもにも愛を与えて生きている人

もいます。「新しい掟に沿って生きていること」を人に教えられたわけでもなく、知らずに新しい掟を立派に生きている人もいるはずです。必ず、その人は報われます。

　イエスが示された「新しい掟」を世に証しできるのは、今日ここに集まった皆さんです。今日学んだからです。皆さんを通して、すべての人が「新しい掟」を知ることができますように。皆さんを通してより多くの人が新しい掟に触れて、神の民の一員に加えられますように。

復活節第 6 主日(ヨハネ 14:23-29)

主日の福音 2025/5/25(No.1357)

復活節第 6 主日（ヨハネ 14:23-29）

どこに、御父と御子を住まわせる部屋を用意しますか

今週の福音朗読は先週月曜日の福音朗読と重複していて、月曜日に考えたことを元に話したいと思います。私たちが声をかけてもらうのに、通りすがりの人や遠くにいる人に声をかけてもらうより、一緒に住んでいる人に声をかけてもらうのがよりきめ細かいのは至極当然なことです。

私は六年ほど前に大腸ポリープを四つ切除してもらったことがあります。ポリープを疑ったのは前任地の司祭館で働いてくれた方でした。日常生活でのちょっとした変化に気付き、「大腸検査をしてください」と強く勧められたので、発見に至りました。命の恩人です。

皆さんの周りでも、同じようなことは起こっているでしょう。その経験を元に今週の朗読を読むとき、「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたしの父はその人を愛され、父とわたしとはその人のところに行き、一緒に住む」（14・23）は「そういうことか」と納得できるのではないでしょうか。

御父と御子が、一緒に住んでくださいます。一緒に住んでくださっている御父と御子が、聖霊の導き・照らしを与えてくださるのです。私たちに照らしと導きを与えるのに、通りすがりの人でなく、遠くにいる人でもなく、一緒に住んでおられる方が声をかけてくださるのです。これほど安心できる導き手が、他に考えられるでしょうか。

「弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」（14・26）私たちはこれまで、聖霊の働きを遠くで起きている出来事のように考えていたかも知れません。それが、すでに日常生活の中で、最もそばにいてくれる人が誰よりも的確に助けてくれる体験と実は重なるのだと知ったとき、聖霊の働きはより身近に感じられ、信頼の気持ちが湧くでしょう。

ただし、御父と御子が住んでくださる私の中の住まい、聖霊の働く住まいが、私にとって頻繁に行き来する導線に置かれているのか、めったに近づかない場所なのかによって、導きも違ってくるはずです。当然、頻繁に行き来する場所に置かれる必要があります。

たとえは俗っぽいですが、朝鮮ドラマを観ていると、王様は王宮の中に住み、王妃の他にも側室がいたりしますが、側室の中にはお声もかからず訪ねてももらえない立場の方もドラマでは登場します。同じ王宮の中に住んでいても、王が頻繁に通る導線に置かれていなければ、それは王宮に住んでいないのも同じことです。

私がイエスのことばを守って生きるため、イエスの愛に生きるため、御父と御子は私の中に住んでくださり、聖霊の照らしと導きをくださいます。その声が、喜ばしい声としていつも聞こえている。そんな状態を保ち続けたいものです。耳障りだから遠くに追いやる、邪魔な扱いをする。そんな暮らし方を選ぶべきではありません。あなたは、どこに御父と御子を住まわせる部屋を用意し、その声に耳を傾けますか。

主の昇天(ルカ 24:46-53)

主日の福音 2025/6/1(No.1358)

主の昇天（ルカ 24:46-53）

主は天に上げられ、高い所からの力で覆う

皆さんは特別な人と握手したことがあるでしょうか。国を代表する方と握手の経験はあるでしょうか。中田神父にそのような経験があれば話したいですが、残念ながら特別な握手はしたことがありません。

それでもあえて、特別な体験を示してほしいと言われたら、司祭叙階式の体験を挙げたいです。大司教様は聖香油を私の手のひらに塗りながらこう唱えました。「御父は聖霊の力によって、主イエス・キリストに油を注がれました。信じる人々を聖なる者とし、感謝の祭儀をささげるために選ばれたあなたを、キリストが守ってくださいますように。」

この瞬間、私はキリストと結び合わされたと感じました。「イエス様と握手をした」と言える体験でした。「イエス・キリストと握手をしたこの手は、ほかのことには使えない。」そういう感覚がありました。

実際には、いろいろなことに手を使います。教会の働きのほかにも、魚釣りのためにも手を使いますし、ソフトボールやテニスにもこの手を使います。ただ、最優先に使うべきは、イエス・キリストのためなのだと、聖香油を塗られている間は考えていたのでした。

本日、主の昇天の祭日です。次の箇所が強く目を惹きました。「わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい。」（24・49）「高い所からの力に覆われる」とは、天の高みと、私たちの地上とが、結び合わされるということではないか。中田神父の今週の注目点です。

司祭叙階の時に、聖香油で両手を覆っていただきました。その時イエス・キリストと結び合わされたと感じました。イエスが天に昇って、地上の民が高い所からの力に覆われたとき、天と地は固く結ばれたのです。まさに「覆われた」、全世界の民が神と固く結ばれたのです。

この学びをもってミサを続けていくと、主の昇天は私たちと無関係ではなくなります。なぜなら私たちもミサの中で、復活し、天に昇られたイエスと固く結ばれるからです。それは、みことばと聖体拝領です。

すると、こんなことも言えるのではないでしょうか。「日曜日のミサでイエス・キリストに固く結ばれた私は、最優先でイエス・キリストのために自分自身を使うべきではないか。」ほかのことのためにも使うべきことはありますが、みことばと聖体拝領でイエスと固く結ばれたこの私を、主日と守るべき祝日には、イエスのために使ってほしいのです。

ではどのようにイエスのために使えば良いのでしょうか。イエスの祝福を受けた弟子たちの行動がそれを教えてくれます。「彼らはイエスを伏し拝んだ後、大喜びでエルサレムに帰り、絶えず神殿の境内にいて、神をほめたたえていた。」（24・52-53）

中田神父はこれを、「大喜びで自分本来の生活に戻り、神をほめたたえていた」と理解しました。みことばと聖体拝領（これが復活し、天に昇られたイエス・キリストです）に覆われた私たちは、大喜びで自分本来の生活に戻り、生活を証しの機会にします。

今日私が、みことばと聖体に結び合わされたことを忘れないようにしましょう。忘れずに一日を過ごすなら、天に上げられ、高い所からの力で覆ってくださるイエスが、私たちの使命を叶えてくださいます。

聖霊降臨の主日(ヨハネ 14:15-16,23b-26)

主日の福音 2025/6/8(No.1359)

聖霊降臨の主日（ヨハネ 14:15-16,23b-26）

全面的に心を開く人を聖霊は満たしてくださる

「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたしの父はその人を愛され、父とわたしとはその人のところに行き、一緒に住む。」（14・23）皆さんにとって、このみことばがどれくらい親しみがあるか分かりませんが、中田神父にとってはとても身近に感じるみことばです。

この箇所は、病人訪問をするときに使う儀式書の中に収められているいくつかの聖書の箇所のうちの一つです。病人訪問では、御聖体を授ける前に、時間が許せばできるだけ福音書の朗読をします。みことばと聖体で、病人が養われるように、慰めを受けるようにという配慮です。

病人にとっては、月に一度のみことばと聖体拝領かもしれませんが、司祭の側からするとその日の病人訪問で何度もこのみことばを朗読していて、ときどき違う朗読を選ばないと司祭のモチベーションが下がるくらいです。しかし何度も何度もこのみことばに触れているわりには、みことばから司祭が得る学びの何と少ないことでしょう。

本日、聖霊降臨の祭日です。聖霊が炎の舌のような形で使徒たちにとどまったとあります。熱意を注ぎ、愛の炎を燃やしてくださる聖霊が注がれますが、それを受ける私たちの熱意は同じくらい有ると言えるでしょうか。同じみことばを一日に何回か読んだだけで「あー疲れた」となる司祭には、聖霊降臨の恵みをしっかりと受け取る熱意が必要です。

聖霊は、きっと同じ熱量で私たちすべてに注がれるのだと思います。ただし、それを受ける私たちの心の状態によって、結ぶ実は違うのだと思います。能力の差ではなく、どれくらい受けようとしているのか。その差が出てくるのではないでしょうか。

病人訪問をしている司祭は「同じことの繰り返しだなぁ」と内心思いながらヨハネ 14 章 23 節を読んでいます。しかし、訪問を受けている人はきっと「一ヶ月ぶりにみことばと御聖体にあずかれる」と感謝して受け取っていることでしょう。これだけを見ても、能力の差ではなく、どれくらい心を開いているか。その「差」なのだと思います。

私たちは皆、イエスが約束してくださった聖霊を受けます。聖霊の実りは、能力の差で違ってくるのではなく、どれだけ心を開いて受け取るか、その差が違いを生むことになります。お見舞いを受ける方々が、完全に心を開いて恵みを受け取ろうとしている。だから恵みは、この方々の上に豊かに実を結びます。敬虔にみことばと聖体を受ける人の前で、司祭はまったくの無力であると痛感するのです。

聖霊に心を開き、照らしと導きを願いましょう。聖霊の望みが何であるかを知るのは、心を開き、身を低くして聞き従う場所でしか与えられません。五旬祭の日、使徒たちは祈りつつ待っていました。

聖霊を受けるために、私はどれくらい心を開こうとしているでしょうか。「それは受け入れられない」と、聖霊の望みを一つ断るたびに、私たちはキリスト者としての自由を失い、注がれる賜物も流れ落ちていくのです。聖霊に満たされる体験を逃さないようにしたいものです。

三位一体の主日(ヨハネ 16:12-15)

主日の福音 2025/6/15(No.1360)

三位一体の主日（ヨハネ 16:12-15）

私たちのうちに三位一体の神が働き続けておられる

今日、三位一体の主日ですが、三つのことばを一つに結び付ける作業から始めましょう。イエスが山に登って、そのお姿が変わったとき、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」（マタイ 17・5）という声が雲の中から聞こえました。このとき一緒にいた弟子たちに求められたことは「イエスに聞く」ということでした。

次にイエスが何かを諭すとき、「言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない」（ヨハネ 16・12）と仰います。他の箇所では、「パンの出来事を理解せず、心が鈍くなっていたからである。」（マルコ 6・52）とありますが、ここで弟子たちが求められていることは「イエスがどなたであるかを理解する」ということでした。

もう一つ、復活したイエスは弟子たちに使命を授けます。「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」（マルコ 16・15）神が人間に求めておられる三つのこと、「イエスに聞くこと」「イエスを理解しようとすること」「イエスに背中を押されて宣教に出かけること」これは別々の方からの招きではなく、同じ神からの招きです。ここから、三位一体の神に少し近づけるのではないかと考えました。

御父はその働きを御子に委ねたので、「これに聞け」と呼びかけます。御子は御父の全幅の信頼を得て「聞いて悟りなさい」（マタイ 15・10）と、聞いて受け入れる、聞いて信じるよう招きます。そして天に昇ったイエスは聖霊を送ってから、彼らが聞いて、理解し、信じたことを行動に移させるのです。三位一体の神は、ただ眺めて信心するだけの神ではなく、私たちが聞いて理解し、行動するように促す神なのです。

すると、私たちが聞いて、信じ、信じたことを行動に移しているなら、三位一体の神は私たちの中で働いていることになります。しかしその一連の流れが、どこかで滞ってしまうと、あとに続く人たちは誕生しないでしょう。つまり、神の言葉を聞き、これを信じて受け入れますが、信じたことが宣教に結び付かなければ、信じるだけの宗教に終わってしまいます。

信じるだけの宗教であれば、日本はありとあらゆる宗教のデパートであり、キリスト教さえも、信じるだけの宗教に終わるなら星の数ほどある宗教の一つで終わってしまうのです。イエスキリストを通して、御父は愛と赦しを人々に伝え、イエスは御父の思いを十字架の上まで実行し続けました。今私たちは、そのイエスが送ってくださった聖霊に勇気づけられて、信じたことの証しである愛と赦しを、出会う人に分かち合っていくのです。聞いて、信じ、信じたことを実行する。三位一体の神をたたえる私たちが、次の世代の人々を繋ぐために託された使命です。

キリストの聖体(ルカ 9:11b-17)

主日の福音 2025/6/22(No.1361)

キリストの聖体（ルカ 9:11b-17）

中濱繁喜神父様は信者のパンになってくださいました

今週、「キリストの聖体」の祭日なのは重々承知していますが、中濱繁喜神父様の追悼をしたいと思います。中田神父と中濱弟神父様とは学年二つ違いです。司祭時代はしょっちゅう同じ地区で顔を合わせました。三年前、私が下五島地区長、中濱師が上五島地区長を中村大司教様から仰せつかったのですが、私は上五島出身、彼は下五島の出身、慣れた土地の地区長でも良かったと思うのです。

しかし中濱師には苦手なことがありました。彼は極端な乗り物酔いをする人でした。小神学生の時から、私が奈良尾からフェリーに乗ると、すでに福江から奈留島、奈良尾まで船で揺られていた中濱師は真っ青な顔をして死人のようでした。彼の口癖は「あー、船に酔った。もうダメばい」でした。別に波浪注意報警報が出ているわけでは無いんです。子どもが風呂場で波を立てる、それくらいの波で「あー、酔った。もうその先のことはしいきらん」となっていたのです。

これで、想像つくと思いますが、下五島には二次離島がありますね。久賀島、奈留島、嵯峨島です。地区長は教区長の代理で地区内のすべての教会に目を配る必要がありますが、毎週浜脇教会に来ては「あー、酔った。今日はまともにミサできんばい」となられては困るわけです。そこで中村大司教様は、どっちを選んでも良かったのだけれども、中田神父を下五島の地区長に据えた。そうなのではないかと思っています。

非常に几帳面な人でした。任された仕事を投げ出すことは決してありませんでした。途中も手を抜いたりしませんでした。私などは結果オーライなので、途中は助任にさせて、いいとこ取りすることに何の抵抗もありません。修道院のミサでも、これは黒島教会時代のことですが、シスターたちは「定期船が欠航したからミサ休みだ」と言っているのに、ご本人が「修道院のミサに行かなければ」と言って定期船が欠航になっているのに、同級生の大村さんの船に頼んで帰ることがありました。

浦上教会の通夜で、次のようなエピソードが紹介されました。中濱師のノートが誰よりも几帳面に書かれているので、ある同級生は中濱師のノートを当てにして、大学の授業をサボったりしていたそうです。それでも気さくな中濱師は躊躇せずノートを貸してくれて、おかげで大学の単位を取らせてもらった生徒もいたらしいです。

どんな務めも全力で向き合うので、周りの人が肩が凝りました。ほぐすために私たちがイジるわけです。すると顔を真っ赤にしていました。面白い話を聞きました。上五島地区の堅信式が地区長本人の誕生日と重なり、大司教様が誕生日の歌を歌って、上品な帽子を被せてくださったのです。すでに癌は進行していて、ミサに臨席するのも大変な状態だったのですが、それでも最後まで嬉しそうに帽子を被ってくれていたそうです。彼の誠実さがよく分かる話でした。

中濱師は簡単なものしか食べませんでした。うどん、カレーがその

典型です。私は二度、黙想会の説教師に中濱師を招くため、12 月 27 日使徒ヨハネの霊名のお祝いに、ハウス食品の高級レトルトカレーセットを用意して直接お伺いに行きました。すると彼は、とっくに時効になっている話を蒸し返して、「浦上教会時代のカレー泥棒事件を話して良ければ引き受ける」と言ってきました。

たしかにこの事件は彼にとっては大事件でした。浦上教会時代、三人の助任が一人ずつ留守番をして二人は大手を振って月曜日休んでいたわけですが、私が留守番になっている週に、主任神父様から「今週甘鯛釣りに行こうで。休みはどがんなっとっとか」と聞かれ、中濱師を説得すれば何とかなると思い、「はい、ご一緒します」と返事したのです。

留守番を代わってもらうために、高級シェフが監修したという 500 円もするレトルトカレーを買って、留守番を代わってもらいました。運良くアマダイ・イトヨリを大漁して、おいしく頂いたのですが、夜 10 時になって小腹が空きました。中濱師は夜 10 時以降、決して一階の食堂に降りてくる人では無かったので、「明日までに埋め合わせればバレないだろう」と思い、プレゼントしたはずの 500 円のレトルトカレーを食べてしまったのです。

すると起こるはずのないことが起こりました。先輩が夜 10 時 15 分に、二階から一階の食堂に降りてきたのです。当然部屋はカレーのにおいが充満しています。中濱師は隠しておいた扉を開けるなり「なか!お前、食うたろ？」と問い詰めてきたのです。私は逃げ場もなく、明日買い直してくるので許してくださいと謝ったのですが、その後ずっと、この話を根に持たれてしまいました。「この話で黙想会の一回目をして良かったら引き受ける」と言われ、しぶしぶ受け入れた思い出があります。

中濱師は子どもが大好きで、子どもたちを遠足に連れて行くのはもちろん、司祭の忘年会で嬉野に行っても、自分のお土産は買わずに子どもたちのお土産をどっさり買って、両手いっぱいに抱えて子どもたちの所に行くのが喜びでした。修道院にもその姿勢は変わりませんでした。

報告によると、最後まで教会に戻って小教区のミサをしたかったのだそうです。内心、周りは無理だと思っているのに、彼は絶対に小教区に戻るのだと言って、あらゆる治療を試し、余命三ヶ月だったのを二年間、耐え忍びました。最後の半年は、まさに「希望の巡礼者」でした。

すべてを、司祭としてイエス様にささげたと思います。NHK でアンパンマンの連続テレビ小説が流れていますが、彼の司祭生活はあんパンそのものだったと言って良いでしょう。小さな小教区でも、大きな小教区でも、持てるものをすべて分け与えてご自身をキリストのパンの材料にしました。決して真似のできない 61 年間の短距離走でした。

「すべての人が食べて満腹した。そして、残ったパンの屑を集めると、十二籠もあった。」（9・17）中濱神父様、その残った十二籠のパン屑は今どこにありますか。もちろん最後の赴任地だった上五島地区には愛着があり、必要でしょうからそれを奪うつもりはありませんが、下五島地区は私が責任持って配りますから、できれば、私たちの地区にも分けてください。

聖ペトロ聖パウロ使徒(マタイ 16:13-19)

主日の福音 2025/6/29(No.1362)

聖ペトロ聖パウロ使徒(マタイ 16:13-19)

教会の柱がいる限り、教会は倒れない

最近、大工さんが家を建てるのを子どもたちはあまり見ないようですね。木曜日の教会学校で「みんなが住む家は、壁があって、屋根があれば立派な家ですか？」と聞いてみたのです。前もって言っておきますが、「柱が必要です」という答えを引き出したかった。

すると、辛抱して待って出た答えが、「窓が必要です」という答えでした。「まあ、窓も必要だね」と相づちを打ちますと、「玄関も必要です」という返事も飛び出しましたが、「まあ、窓も必要だね」という私の言い方で「あ、何か違うことを引き出したいのだな」というニュアンスは伝わりませんでした。「地震や、猛烈な雨や台風でも倒れないためには、壁と屋根だけで大丈夫ね？」と促しても、ついに「柱」という答えは返ってきませんでした。家が建ち上がる様子を、身近で見なくなったんだなぁとつくづく思ったのです。

イエスはペトロの信仰を受け入れて、「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる」（16・18）と仰いました。日本建築では、基礎の石と、柱があって、建物は建ちます。ですからペトロは東西南北の基礎の石であって、またその上に置かれる柱でもあるわけです。それはペトロだけでなく、最初に選ばれた使徒たち、そしてご自分を、「月足らずで生まれたようなわたし」（1コリント 15・8）と言い表したパウロも、イエスが建ててくださった教会の基礎の石、また重要な柱なのです。

ペトロとパウロが、教会の柱となってくださったことで、教会は今の今まで倒れることはありませんでした。強風に晒され、焼け落ちたり、崩壊の危機に立たされたことはあったかもしれません。しかしどんな逆境でも、教会は本来の姿を取り戻していきました。

私は今でも思い出しますが、上五島の江袋教会は、火事でほぼ焼け落ちました。しかし正確な図面が残っていて、柱が残っていたので、立派に修復されました。当時私は教区広報の委員長だったので、火事のすぐあと教会を訪ねに行きました。小雨の降る日で、全体にブルーシートが被せられていました。焦げ臭い匂いがまだ残ってはいたけれども、主要な柱は残っていて、ここからもう一度教会が修復されるのだなと確信を持ったのでした。

完成後も取材に行き、見事に修復された教会の中に、焼け焦げた柱が補強されたのちにそのまま使われている場所を見て、「柱があれば、家は元通りに戻るのだ」と驚いたものでした。もちろん厳密にはそう簡単ではないのでしょうが、柱があることの重要性を肌で感じた出来事でした。

イエス様は使徒たちを教会の柱としてお建てになりました。使徒たちだけでなく、聖母マリアも女性を代表して、教会の柱だと考えています。ここからが私の本題ですが、私たちの中にはたくさんペトロの霊名パウロの霊名、マリアの霊名をいただいた人がいると思います。一度で

良いので、「私の霊名はペトロだから、一度は教会の柱になるような働きをしてみよう」「私はパウロだから、教会の柱になるような働きをしよう」こういう望みを持ってほしいのです。

今日は聖ペトロ聖パウロ使徒ですが、教会の聖人たちは立派に教会の柱、支えとしての働きをした方々です。私たちもそうした人たちの霊名をいただいているのですから、教会の柱となるような働きを一度は引き受けたいものです。ちなみに私は、長崎教区で七人選ばれた地区長の一人であり、長崎教区の柱の働きと責任を感じて過ごしております。

「わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。」（16・19）私たちの教会は、姿は少しずつ変わるかもしれませんが、どれくらい続くでしょうか。具体的にこの教会は、どのくらい続くでしょうか。最終的には神様だけがご存じですが、柱となる人が続いてくれる限り、「陰府の力もこれに対抗できない」（16・18）のです。

年間第 14 主日(ルカ 10:1-12,17-20)

主日の福音 2025/7/6(No.1363)

年間第 14 主日（ルカ 10:1-12,17-20）

出来ないことに挑戦して神の国の収穫を得る

土曜日の朝は夢見の悪い朝でした。よく考えると本当は悪くなかったのかもしれません。全く面識のない人が近づいてきて私にこう言うのです。「あなたのしていることは出来ることばかりです。すでに知っていること、経験してうまくいったこと、それらをし続けているだけです。それで神様のお役に立っているでしょうか。弱さの中に働く神の力を必要としない仕事は、神様が求めている働きでしょうか？」

初対面でキツいことを言うなぁと思ったのですが、言われていることはごもっともと言うしかありません。その人は最後にこう言って去って行きました。「何かに挑戦しようという気は無いのですか？」ここで目が覚めて、聖家族修道院のミサを終え、朝食を済ませて説教に取りかかり始めます。朗読箇所は七十二人を派遣する場面です。

まずここで、一つ目の「挑戦」があると考えました。「七十二人」です。どれくらいの集まりの中で「七十二人」を任命されたのでしょうか。自治体で、災害の起こった地域に災害援助隊を送ることがあります。七十二人を任命することのできる自治体の規模はどれくらいでしょうか。それを頭に置いて、福江教会で「主はほかに七十二人を任命し、御自分が行くつもりのすべての町や村に二人ずつ先に遣わされた」（10・1）という行動は可能なのでしょうか。

「挑戦」は、「できることをする」という意味ではないと思います。「できない」と思われているからこそ「挑戦」ではないでしょうか。福江教会で「七十二人」が思い当たることがあります。それはミサの参加人数です。前晩のミサ、日曜日一番ミサ二番ミサの合計は、二百五十人から三百人人くらいでしょうか。

イエス様の行動を読み返すと、「主はほかに七十二人を任命した」とあります。福江教会が主日のミサ全体で、ほかに七十二人きてもらって使命を授けてもらい、生活の中に二人、三人の組にして派遣できないものでしょうか。福江教会にミサに参加できる信徒の実数を考えると、「できない」とは言えないと思います。主日のミサに参加して、みことばと聖体を味わい、それぞれが、何か使命を感じて生活に戻っていく。私たちの教会にとっての「七十二人」は、こんなところにあるのではないでしょうか。

「何かに挑戦しようという気は無いのですか？」この夢のお告げで二つ考えました。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。」（10・2）これから、ほかに七十二人、福江教会のミサに参加してくれる人を願いましょう。ミサの中で、惹きつけるものに違いがあるとしたらそれは説教ですから、毎週汗を流して準備したいと思います。

もう一つは、浜脇小教区と福江小教区の統合です。信徒総会で触れましたが、二ヶ月に一回協議を詰めて、六回の協議の後に来年度から統

合できればと思っています。これはおそらく、下五島地区の最初の挑戦となり、次の下五島地区の挑戦のモデルとなり、ひいては長崎教区の統合を進めるきっかけとなるはずです。

「長崎教区のことは都会が決めるのであって離島から変えることは出来ない」そう思っているかもしれません。私は下五島地区や上五島地区から提案して、長崎教区が変わるだけの発信は出来ると思っています。

どうか、「ほかに七十二人」を主が与えてくださるよう、熱心に祈り求めましょう。「収穫は多い」と、主が約束してくださっています。その状況は、今も、これからも変わらないのですから。

年間第 15 主日(ルカ 10:25-37)

主日の福音 2025/7/13(No.1364)

年間第 15 主日（ルカ 10:25-37）

その順番を、一つ下げることができますか

「さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」（10・36-37）

追い剥ぎに襲われ、半殺しの目に遭っている人のそばを、三通りの人が通りました。祭司とレビ人とサマリア人です。半殺しの目に遭った人はエルサレムからエリコに下っていたわけですから、反対に三人は、エルサレムに上っていたことになります。「エルサレムに上る」ということは、それぞれが、宗教上の大切な務めを果たしに向かっているということですから、途中で寄り道したりしている暇はありません。

実際、祭司とレビ人はその人を見ると、道の向こう側を通っていきました。エルサレムで宗教上の大切な務めがあるわけですから、道端に倒れている人にかまっている暇はないのです。これは原理原則通りです。しかし、旅をしていたあるサマリア人は同じことをしませんでした。彼も、礼拝の務めを果たすために先を急いでいたはずです。しかし彼は、いったん自分の最優先事項を横に置きました。

これから、私の中学生の時の体験を紹介したいと思います。今から45年も前の話です。すでに話を聞いたことがある人も、どうかもう一度耳を傾けてください。

当時私はすでに小神学生した。夏休みの終わり、8月 31 日、上五島から神学校に帰る日のことです。前の日に私は荷物を準備し、明日いつものように神学校に帰る予定でした。ところが前の晩、8月 30 日の夜中に、弟がひどい熱を出して、病院に運ばれていきました。

心配した母もいっしょに病院に行きました。その時母は、「自分で何とかして帰りなさい」と言い残して病院に行ったのです。けれども困ったことに私は母親からお金を1円も預かっていなかったのです。自宅からは、井持浦から福江に行くくらいの距離がありました。それなのにバス代も、船賃もありませんでした。

悪いことは続きます。バス停に行ってみると、もうバスは出発していました。港行きのバスは船の時間に合わせて一日三便しかありませんでした。ほかに港に行く方法も思い付きませんでした。

悲しくなって、バス停にしゃがんでいると、知らないおじさんが声をかけてきました。「あんた、輝明さん家の神学生やろ」「はい」「神学校に今日帰っとね？」「はい。けれども、行けなくなりました。」私は前の日からのことを話して、もうバスもいないし、帰ることが出来なくなったと話しました。泣きたい気持ちでした。

すると、そのおじさんはポケットからお金を出して、私に握らせてくれました。見ると一万円でした。45年前の一万円です。おじさんは私に、「そこの公衆電話でタクシーばつかまえてすぐ港に行かんね」と言

ってくれました。

私はお礼を言わなければいけないので、「おじさん、名前を教えてください」と言いました。するとそのおじさんは、「おじさんはおじさんたい。子どもは心配せんでよか。はよう行け」と言って、いなくなってしまったのです。

今でも、そのおじさんの名前は分かりません。元気なのかどうかも分かりません。けれども、そのおじさんは小神学生の私、海の物とも山の物とも知れぬ私に大金をくださったのです。45 年前の一万円、何か使い道があったでしょうに、道端で倒れかかっていたような私のために譲ってくださったのです。

そのおじさんは、信仰のことをとやかく言いませんでした。けれどもおじさんは、イエスの教えを完全に実行したと思っています。誰にでも優先事項があるはずなのに、その優先順を一つ下げて、目の前で半死半生にあったような私に手を差し伸べてくれたのです。

そのおじさんのことを、私は決して忘れません。おじさんは、本当に私がイエスの弟子になって、イエスに固く結ばれる手伝いをしてくれたのです。おじさんは、私の心の中に、説教の冒頭に触れたイエスの声を届けてくれたのです。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

大金を持たせてくれたおじさんに、私は返すものが何もありませんでした。私が司祭を目指している。それだけで、使おうとしていた予定を譲って私にくださいました。このおじさんに私は司祭になって何としても恩返しをしなければ。子どもながらにそう感じました。

45 年前のあの時のように、イエスは今でも私たちに声をかけて、「行って、あなたも同じようにしなさい」と言っていると思います。父や母を愛することは当然のことです。親が、息子や娘を愛することも当然のことです。それでも、神のことを優先する人がいます。神の招きを大切にできる人は、今までいちばん大事だと思っていたものでも、順番を一つ下げるのです。そしてそれは今でも続いているのです。

福江教会の助任司祭になられた青田神父様。社会人として立ち位置があった人でした。そうそうたるキャリアを積んできました。能力もあり、社会で成功できる人でした。それを、神のために順番を一つ下げて、神の招きを最優先にして司祭となられたのです。そして今回は、大司教様の要望を受け入れて、すでに二度、主任司祭を務めていたのを助任神父様になってくださっています。イエス様のために何度も、優先順位を一つ下げてくださっているのです。

私たちも同じことを問われています。イエスが期待に照らしてみて、自分の生活の優先順位を変えること。いざとなったら、今までは最重要だったものでも順番を一つ下げる。それは痛みを伴うかも知れませんが、私たちが信仰の証しをするとき、圧倒的な証しになると思います。

この世のものの価値を、永遠のものの価値と置き換えることはできない。この一言を、イエスへの返事として今週は生活に戻っていきましょう。その答えがあれば、生活すべてに、神の心にかなう順番を付けることができるようになるはずです。

年間第 16 主日(ルカ 10:38-42)

主日の福音 2025/7/20(No.1365)

年間第 16 主日（ルカ 10:38-42）

主を愛しているから違いがあっても姉妹になれる

田平教会時代に忘れられない侍者のやり取りがありまして、そこから入ってみたいと思います。リリーちゃんとモモちゃん、ということにしておきましょう。二人は同じ小学１年生で、初聖体を受けた後から早く侍者をしたくてたまらない女の子でした。

モモちゃんは、すでにお姉ちゃんが立派に侍者を務めていて、そのそばについてすぐに侍者の務めを身につけました。リリーちゃんはモモちゃんと良い意味でライバルなので、自分も早く侍者デビューしたがっていました。ついにその日がやって来ました。祭壇で緊張しているリリーちゃんを、会衆席の最前列でモモちゃんが見守っています。

祭壇上で聖変化の場面になると、鈴を鳴らす必要があります。リリーちゃんはいつ鳴らしてよいのかいまいち分かっていません。けれどもモモちゃんは会衆席から今にも飛んで行ってあげたいくらいハラハラして見守っています。ついに、指で文字を書き、「すず！すず！」と指示を飛ばしました。けれどもモモちゃんの指示はリリーちゃんにうまく伝わりません。

文字を書いたとしても、逆さまにしか見えないので分からないのです。するとリリーちゃんも指で字を書いて聞き返しました。「なに？なに？」祭壇の目の前で祭壇の親友に必死でサインを送るのを２メートルくらいの距離で見ながら、聖変化を唱える私の身になってみてください。涙ぐましいＡＤさんですが、笑いをこらえるのは大変でした。

同じ侍者を、同じ時期に始めたとしても、二人は同じにはなりません。今日のマルタとマリアも、同じ家に育ち、同じ宗教教育を当時の受け方で受けたことでしょう。当時は会堂に行って聖書を学ぶのは男性のみでしたら、それを家で聞く女性たちに違いが出てくるのはごく自然な流れです。ある女性は学んできた男性から座ってじっと聞くでしょう。ある女性は、家庭での女性の務めを果たしながら、そこそこ聞いていたかもしれません。

しかし、違う育ち方としたとしても、マルタとマリアは姉妹であり、どちらもイスラエルの今後を担っていく女性です。どちらも神さまにとって必要であり、あるときはじっと聞くマリアが求められますし、あるときはほかのことも同時にこなしながらイエスに聞き従うマルタも必要です。大切なのは、「天の父の求めに、良い方を選ぶ」その繰り返しだと思います。

福江小教区も、マルタとマリアの姉妹関係をこれから考える必要があります。これからときどき話に入れたいと思いますが、福江小教区と浜脇小教区は、イエス様にとって姉妹のような良い関係を築き上げていく時期に来ています。長崎教区全体が、これまで二つの小教区だったところを、マルタとマリアのような姉妹関係に高めていくことになります。

そのために、福江小教区は浜脇小教区を、浜脇小教区は福江小教区

を、互いに学び合い、親しみをもっていく努力をしなければなりません。

みなさんのご家庭に、「福江教会の牧者たち」という本があるでしょう。その第一巻、143 頁に次のように書かれています。

「一八九六年十月、野濱ナツ氏久賀島村から福江村に転住し、産婆を開業した。この野濱氏が福江最初の信者で、当時福江の信者は野濱氏一軒であった。その後、浦兵右エ門氏、木口善吉氏が相前後して転住し、信徒戸数も四、五軒になったようだが、野濱家がその中心になっていた。一室に祭壇が設けられ、福江でのミサはいつもここであげられていたという。また、明治の末頃から小教区が設立される前頃には、本町の『家御堂（いえみどう）』があり、ここでミサが捧げられた。」

最初に、福江の中心部で自分の信仰を公にして生計を立て始めたのが久賀島の助産師だった。それは私たちの先祖が、この世に生まれてくるときに久賀島出身の助産師からお世話になったということでしょう。この一つとっても、福江小教区と浜脇小教区の不思議な縁をもっと学びたいと思いませんか？

交流の機会をもっと設けるなら、福江小教区と浜脇小教区はもっと親しくなれるでしょう。形としては本教会と巡回教会の形になると思いますが、兄弟姉妹のように親しくなれると信じております。

マルタとマリアは、お互いに気付くことの多い姉妹だったと思います。マルタの持っているもの、マリアの持っているもの、お互いに学び合って、自分一人では持てなかった豊かさをもつ相手になりました。

私たちも、これからの時間で、福江小教区と浜脇小教区の間に、喜んでイエスを迎え入れる関係が築かれることを願っています。長崎教区全体に、マルタとマリア、違いがあっても主を愛する兄弟姉妹が増えていきますように。

◆マルタとマリア

10:38 一行が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。
10:39 彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。
10:40 マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」
10:41 主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。
10:42 しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

年間第 17 主日(ルカ 11:1-13)

主日の福音 2025/7/27(No.1366)

年間第 17 主日（ルカ 11:1-13）

主の祈りでイエスは「祈り」と「祈り方」を教えた

最近のパソコンは高性能で、言ったことを言わなかったことにできる怖さがあります。先週の 6 時のミサでは、教皇様の名前を間違って「フランシスコ」と言ってしまい、すぐに「教皇レオ 14 世」と言い直しました。このミサは収録をして YouTube にアップするので、そのままアップするわけにはいきません。

そのため、「フランシスコ」と言った「ほんのコンマ何秒」を切り取り、繋げました。興味のある方は先週のミサ動画をご覧になっていただければ分かりますが、ハサミを入れたことすら分からないほど良く仕上がっています。ある意味、怖いですね。

今週の朗読箇所には、一般的な新共同訳聖書を開くと「祈るときには」という小見出しが付いています。そして弟子の一人が、「わたしたちにも祈りを教えてください」と言い、イエスも「祈るときには、こう言いなさい」と答えているので、何も問題ないように思えますが、中田神父はここに違和感を覚えました。

おそらくイエスの弟子は、「祈りを教えてください」と言ったのは、たとえば私たちに「今年の聖年の祈りを教えてください」というような気持ちでお願いしたのだと思います。聖年の祈りはちょっと長いので、長崎教区は祈りのカードを用意してお配りしました。皆さんは何度も繰り返し唱えてきたので、もしかしたら見ないで言えるようになっているかもしれません。

しかしイエスが示したのは、「こう祈りなさい」ということでした。つまり「祈り」であると同時に「祈り方」を教えてくださったわけです。先ほどの「聖年の祈り」については、出来上がった「祈り」を教区は示しました。「聖年にふさわしい祈り方」を教えたわけではなく、その点、イエス様とは違います。

この流れに沿って、イエスが話されたたとえ話の結論を考えてみましょう。「そこで、わたしは言っておく。求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。」（11・9-10）

ここでイエスは、「与えてもらえる祈り」みたいなものを教えたわけではありません。「確実に見つかる祈り」「必ず開かれる祈り」を教えたわけでもありません。ただ、どのようにしたら与えられるか、見つかるのか、開かれるのかを教えられたのです。真夜中に「パンを三つ貸してください」と言った人は、「しつように頼んで」（11・8 参照）必要な物は何でも与えてもらいました。パン三つだけでなく、ほかの食材もきっと与えてもらったことでしょう。

ここまで考えてきたので、振り返ってみましょう。私たちは神に、「求めなさい」と言われて何を求めてきたのでしょうか。「探しなさい」

「門をたたきなさい」と言われて、どのように取り組んできたのでしょうか。「与えられるためのマル秘テクニック」というものをイエスに求めてきたのではないでしょうか。

私たちはカトリック教会として危機の時代を迎えているかもしれません。司祭を目指す神学生の減少、奉献生活者を目指す志願者の減少。それでもどうにかして、この危機の時代を突破しなければなりません。ありがたいことに「司祭のための祈り」を唱えてもらっていて、途中「喜びのうちにみことばを伝え、あたたかい愛をもって人々に仕える者にしてください」と唱えてくださっています。

ただ考えました。「これさえ唱えれば、司祭が『喜びのうちにみことばを伝え、あたたかい愛をもって人々に仕える者』になるに違いない」と、思っておられるだろうか？「唱えた祈りに、合わせて何をすれば、その通りになるか。」ときにはこのことを考えてみてください。司祭も、いろんな祈りの時、「唱えたことがその通りになるために、わたしに何が求められているだろうか」と考えています。

◆祈るときには

11:1 イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」と言った。
11:2 そこで、イエスは言われた。「祈るときには、こう言いなさい。『父よ、／御名が崇められますように。御国が来ますように。
11:3 わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。
11:4 わたしたちの罪を赦してください、／わたしたちも自分に負い目のある人を／皆赦しますから。わたしたちを誘惑に遭わせないでください。』」
11:5 また、弟子たちに言われた。「あなたがたのうちのだれかに友達がいて、真夜中にその人のところに行き、次のように言ったとしよう。『友よ、パンを三つ貸してください。
11:6 旅行中の友達がわたしのところに立ち寄ったが、何も出すものがないのです。』
11:7 すると、その人は家の中から答えるにちがいない。『面倒をかけないでください。もう戸は閉めたし、子供たちはわたしのそばで寝ています。起きてあなたに何かをあげるわけにはいきません。』
11:8 しかし、言っておく。その人は、友達だからということでは起きて何か与えるようなことはなくても、しつように頼めば、起きて来て必要なものは何でも与えるであろう。
11:9 そこで、わたしは言っておく。求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。
11:10 だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。
11:11 あなたがたの中に、魚を欲しがる子供に、魚の代わりに蛇を与える父親がいるだろうか。
11:12 また、卵を欲しがるのに、さそりを与える父親がいるだろうか。
11:13 このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。」

主日の福音 2025/8/3(No.1367)

年間第 18 主日（ルカ 12:13-21）

持ち物を神と人にスムーズに引き継ぐ

先週は上五島の母親が外来治療に来ていたのですが、後半の治療を金曜日に終え、上五島に帰る五島旅客船の切符を窓口で買って渡し、福江港で別れました。私自身は、久しぶりに整骨院に行って治療をして もらって帰ったのですが、まぁ小一時間だからと思ってスマホを司祭館 に置いていったのです。帰ってスマホを確認すると、母親本人からと、 上五島の弟から、これでもかと言うほど不在着信が入っていました。

この日は高速船 TAIYO が機関故障で代船になっていました。運悪く、桟橋も本来の高速船の桟橋ではなく、第二桟橋で、しかも出発時間も 10 分早くなっていました。この条件で置き去りにされた後期高齢者が、乗るべき船が第二桟橋に来て、しかも 10 分早まっているなど分かるはずもありません。乗れなかった母親は必死に電話をかけますが、わたしの電話は 1 時間以上、机の上に置きっぱなしでした。

整骨院の治療から帰るとまず弟から電話がかかりました。「船に乗れなかったからもう一泊させてくれって言ってるよ。」訳が分からず母親に電話をかけてみると先のような事情でした。可哀想にもう一泊司祭館の私の部屋で親子で過ごすわけですが、悪いことばかりではありませんでした。

皆さんの中にも、Amazon（アマゾン）というネット通販を利用していて、しかも AmazonPrime（アマゾンプライム）の会員の方がおられるでしょう。つい最近、PrimeVideo（プライムビデオ）で、「教皇選挙」という映画の無料配信が始まりまして、母親に「この映画観るね？」と聞いたら「観る」というので、親子で映画鑑賞が出来ました。内容は、ネタバレにならない程度しか話せませんが、教皇様が亡くなり、次の教皇に引き継ぐまでの物語です。秘密の教皇選挙の中身を見事に演じていましたが、私は「映画は映画だよね」と受けとめました。

今週の福音朗読を、「引き継ぐ」という切り口で考えてみました。ある金持ちの畑が豊作でした。誰でも豊作を喜ばない人はいないでしょう。この「豊かさ」を彼は引き継ごうとしたのですが、それは、すべて自分のため、自分の将来のためにだけの引き継ぎでした。「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」（12・19）

この金持ちには多くの下働きがいたでしょうし、書かれていませんが、家族もいたでしょう。目の前の豊かさを「この世の豊かさ」としてしか考えなかったのです。ひと休みする。食べたり飲んだりする。楽しむ。どれも良いことには違いありませんが、それが「この世のためだけになされる」のであれば、神の前には愚かなことなのです。

「豊作」を与えたのは誰でしょうか？神ではないでしょうか？そうであれば、神に感謝しながら、しもべたちに感謝しながら、家族に感謝しながら「豊作」「豊かさ」の引き継ぎ方を考えるべきでした。自分た

ちでは使い切れないほど恵まれたのですから、積極的にほかの人のために、何よりも神のために使うことを考えるべきでした。

少しヒントになればと思うのですが、最近のスマホはえらく秀逸で、古いスマホから新しいスマホに引き継ぐのがびっくりするほど簡単になりました。古いスマホと新しいスマホをケーブル一本繋ぐだけ、あるいは二つを近づけるだけで引き継いでくれます。かつての面倒くさい引き継ぎを知っている私のような世代には信じられない便利さです。

ただ、すべてを引き継いでも、安全対策は残ります。ここで福音朗読のたとえのように「自分だけが開いたり閉じたりできるように」、自分のためだけの暗証番号や、指紋認証をすると、そのスマホは「自分のためだけのもの」になります。普通はそうするでしょう。

しかし、ほかの場面が考えられないこともありません。もう一人、別の人と「暗証番号」を共有したり、もう一人の人の「指紋認証」を登録すると、通常の使用者にもしものことが起こった場合、そのスマホの情報を適切に処理してもらえるでしょう。中田神父はこの五年で二度、命の危険を味わったので、二度目の時に暗証番号をある人と共有することにしました。もちろん、自分が信頼できる人です。

自分が得たものを、自分のためだけに用いることは、案外危険なことです。今週の福音朗読がそれをよく教えてくれます。自分のものと言っても、究極的には神のものですから、神がその持ち物を神の望むように使うことを受け入れて生きるほうが、実際はより安全であります。

たとえとして出したスマートフォン、私一人しか操作できないとなると、もしもの時にはただのガラクタになってしまいます。私のスマホには長崎教区に関する大量の情報が収められているので、信頼できる人が開けるようにしておけば、少なくとも無駄にはなりません。

神も、私たちに同じことを望んでいると思います。あなたの持ち物は、あなただけが使っても構いませんが、あなたの心に思い浮かぶ人のため、また神さまのために、持ち物の使い方を共有しておくと良いと思います。まぁそれは遺言ということになるのかもしれませんが、限られた人生の中で、「愚かな者」にならないために、神の前に豊かになれるように、信頼できる人と持ち物の使い方を共有して、引き継ぎができるようにしておきたいですね。

私自身も、少し時間はかかるかもしれませんが、自分の持ち物を自分だけのものにせず、スムーズに引き継げるように準備をしておきたいと思います。自分のために富を積んだとしても、その富は積めば積むほど、手に余る量になります。神の前に、多くの人の前に豊かな人生設計を考えたいものです。

年間第 19 主日(ルカ 12:32-48)

主日の福音 2025/8/10(No.1368)

年間第 19 主日（平和祈願ミサ）（ルカ 12:32-48）

日本の教会は小さな群れだが、平和の働き手

「小さな群れよ、恐れるな。」（12・32）イエスを信じる神の民は、いつの時代も小さな群れでした。日本でカトリック信者は全人口の中の 41 万 8 千人です。このミサに来ている人はさらにその 300 分の 1（来たくても難しい人もいるでしょうが）、本当に小さな群れです。その小さな群れにもイエス様は「恐れるな」と力づけてくださるのです。

広島と長崎の被爆者手帳を持っている人が今年 3 月時点で 10 万人を切ったそうです。体験を直接語れる人が本当にいなくなる。そんな時がそこまで来ています。戦争は絶対にしてはいけない。核兵器は決して使用してはならない。実体験から確信を持って語れる人々は、イエス様がおっしゃる「小さな群れ」になりつつあります。しかしその小さな群れにも「恐れるな」と言っておられるのではないでしょうか。

それは、神が必ず希望を与えてくださるからです。小さな群れが、未来を希望できるようなしるしを、与えてくださるからです。例を一つ紹介しましょう。長崎の 83 歳の被爆者の体験を語り継ぐ小学 4 年生のニュースはご覧になったでしょうか。高齢化する被爆者本人に代わって、その家族以外の人々が体験を語り継ぐ「交流証言者」に、東京都世田谷区の小学 4 年生が被爆者団体から正式に認定されました。

家族旅行で長崎市を訪れ、原爆資料館を見学した際、館内を案内してくれたボランティアガイドとの出会いがきっかけだったそうです。「あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」と約束する神が、この世界に今も働いている一つの証拠ではないでしょうか。

「暗いと不平を言うよりも、すすんであかりをつけましょう」最近この言葉は聞きませんが、「暗闇のあるところに光を」これが平和をもたらす鍵だとしたら、現代の暗闇に、私たちは積極的に手を伸ばして光を灯さなければなりません。平和をもたらすためには、平和を願うと同時に、平和のために働く人にならなければならない。当然のことです。

小さな命が危険にさらされている。幼い子供が邪悪な大人に狙われている。すべての人に保障されるべき権利が踏みにじられている。格差が拡大し、絶望を生んでいる。こんな社会に私たちは置かれています。「私一人が何かを始めてもどうにもならない」そう思うかもしれませんが、「小さな群れよ、恐れるな」とおっしゃるイエス様は、必ず私たちが一人で始めたことに背中を押してくださり、見える形にしてくださいます。平和が満ち溢れる神の国を感じられるようにしてくださいます。

今日のミサは、神が平和への働きを必ず実らせてくださることを祈願するミサであり、祈願したことが与えられるミサです。こうもおっしゃっています。「どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。」（マタイ 18・19）

平和祈願はこれで良いでしょう。しかし、皆さんの心の奥には、いまだ晴れない疑念があるかもしれません。つまりこういうことです。「私たち下五島地区のカトリック教会は、実に小さな群れですが、本当に大丈夫なのでしょうか。希望を持てるのでしょうか。」

小教区の再編が近づき、司祭数の削減も現実味を帯びています。今できることを言いましょう。皆さんが下を向いて説教を聞いているから疑念が拭えないのです。顔を上げてごらんなさい。祭壇右の垂れ幕に何と書かれていますか。「神よ、あなたは私の希望」と書いてあるでしょう。これは「そうだったら良いよね～」ぐらいの言葉でしょうか。それとも、私たちが固く信じていることを文字にしたものなのでしょうか。

フランシスコ教皇が亡くなられた頃、ちょうど国内で「教皇選挙」という映画が上映されていて、一般の人のあいだでかなり話題になっていました。一般受けするように制作されていたと思います。私もネットのサービスで観ましたが、「事実は映画よりも奇なり」誰も予想していなかった枢機卿様が教皇レオ 14 世として即位されました。間違いなく、平和のため先頭に立って働いてくださるでしょう。

教皇選挙。それは、人間のなせるわざではなく、神の働きです。神が私たちに示された新教皇レオ 14 世は最初に次のようにあいさつされたそうです。「あなたがたに平和があるように。」下五島地区のカトリック教会にもこの言葉は向けられています。私たちが下を向かない限り、教会は私たちの希望であり続けるし、父なる神は喜んで神の国を、未来への希望を、与えてくださるのです。

ただ、人間的なことを言わせてもらえれば、握手をしたくない人は確かにいます。私にもどれだけ金を積まれても握手したくない人がいます。教会内がそうであるなら、教会は内部から分裂し、小さな群れは散り散りになってしまうでしょう。

それでも「平和のために働くことはできる」と言いたいです。私はあの人とはいくら頼まれても握手したくないけれども、手を開いて十字架にはりつけにされたキリストを通してであれば、手を取り合うことは可能かもしれません。私たち小さな群れが神の国の平和を願い続ける理由が見つかりました。神は私たちの希望であり、手を取り合えないほどいがみ合っていても、十字架上のイエス様が仲介して手を握らせてくれる。そうして次世代への希望を見いだすことができるからです。

加えて天国からも、先に旅立った人々が小さな群れである下五島地区の教会を助けてくれると思います。今年の巡礼指定教会の一つである打折教会に、私は何度も聖体訪問に行きました。ご存じと思いますが、使徒ヨハネ中濱繁喜神父様と縁の深い教会です。生きているときは一日でも長くこの世にいてくださるように、亡くなってからは神さまのもとでゆっくり休めるように、祈りをささげてきました。行くたんびにわざと巡礼ノートにも名前を書き付けてきました。

その繁喜神父様が先月私の夢枕に立ったのです。尊敬する川添主任神父様でさえ夢に出てきたことが無いのに、繁喜さんが夢の中でこう言うのです。「なかだぁ。わいは夏休みば取ろうとしよるやろ。ちゃんと同じだけ助任にも夏休みばやらんばぞ。」

余計なお世話じゃと思いましたが、繁喜神父様を通して、イエス様は「小さな群れよ、恐れるな」そして「主人が召し使いたちの上に立てて、時間どおりに食べ物を分配させることにした忠実で賢い管理人」を現代の教会にも与えてくださると考え、安心したのです。

日本のカトリック信者は小さな群れですが、恐れる必要は無いし、これからも希望の巡礼者として歩んでいくことができます。両手を開いてはりつけにされているイエス様が、すべてを叶えてくださいます。

主日の福音 2025/8/15(No.1369)

聖母マリアの被昇天（ルカ 1:39-56）

苦労をいとわず、人を愛し、神をたたえた

聖母マリアの被昇天の祭日を迎えました。小さなことですが、去年まで「聖母の被昇天」と呼んでいたように思いますが今年の典礼暦を見ると「聖母マリアの」とわざわざ書いてあることに目が留まりまして、今年から何かしら変更があったのか、それとも昔から「聖母マリアの被昇天」だったのを気付かずにいたのか。知りたいところです。

さて福音朗読はマリアがエリサベトを訪ねる場面です。エリサベトが住んだのは「エン・カレム」という町だったとされていますが、マリア様の住むナザレからエン・カレムまで、何キロあったと思いますか。車が走る現代のルートを辿っても、およそ 150km 離れている町です。

福江島の中で 150km 離れた場所を探すことはできません。福江港から長崎の大波止まで約 100km です。それでも足りません。長崎駅から 150km となると、博多駅が似たような距離になります。それを仮に、ろばに乗せてもらって旅をしたとしても、150km 離れた場所はそう簡単でなかったことは容易に想像できます。それでもマリア様は、身重のエリサベトを訪ねて行くことをためらいませんでした。

私たちは、「親戚の家に果物を届けてきて」と言われて、もし親戚の家が 150km 離れていたら「分かった」とすぐ返事ができるでしょうか。もし自転車のような乗り物しかない時代だったら、本当にお使いを引き受けるでしょうか。私だったら、郵便局に行って果物を送るかもしれません。

しかしマリア様は、苦労を決していといませんでした。150km 離れたエリサベトに挨拶して、姉妹のように心を通わせたのです。苦労を苦労と思わず、エリサベトを助けてあげたい、その一心で訪ねていきました。天に上げられた聖母マリアは、苦労を決していとわない方であり、苦労を苦労と思わない方であった。そう言えるかもしれません。

今日はこの一点を、皆様と分かち合いたくて説教を考えました。中田神父もたまに、井持浦教会や浜脇教会のミサに行きますが、井持浦教会まで片道 31km、これを 150km に置き換えると、あらかじめ二往復してから教会に出発してようやく 150km です。浜脇教会までは片道 13km ですから言わずもがなです。苦労を決していとわずに、150km 離れた教会にミサに行けるだろうか。マリア様のお手本を前にすれば、司祭が七人もいて、それぞれに努力していると言っても全然足りないのかなと考えました。

今回も、小教区統合の話をしたいのですが、離れた兄弟姉妹が、苦労をいとわず、苦労を苦労と思わず交流するなら、私たちは今日の聖母マリアの被昇天にとてもふさわしいあずかりかたをしていることになると思います。マリア様がエリサベトに挨拶に行く間の困難を思えば、私たち福江小教区と浜脇小教区が一つの家族となって神さまをたたえることは、困難があってもすばらしい価値ある働きではないでしょうか。

「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。」（1・46）危険と隣り合わせの旅を、何日もかけてやってきた聖母マリアの口から出たことばは主をあがめ、神を喜びたたえることでした。私たちにも小教区統合が近づいていまして、それは協議会を何回も重ねて積み上げた結果であり、もしかしたら危険と隣り合わせの結果かも知れません。

それでも私たちの第一声が、「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます」でありますように。苦労を乗り越えた先で、「今から後、いつの世の人もわたしを幸いな者と言うでしょう」（1・48）となることを願っています。神が、目をかけてくださったことは、どんなに困難なことでも、実現するに違いありません。

年間第 20 主日(ルカ 12:49-53)

主日の福音 2025/8/17(No.1370)

年間第 20 主日（ルカ 12:49-53）

信仰の理解で対立していてもいつか乗り越えられる

今日は珍しく主任司祭が説教をして、助任司祭がそれを聞いています。採点をしているかもしれません。たぶん 10 点満点中 4 点は減点されるでしょう。まず「長い」ということ、福音朗読の中身からずいぶん遠くまで行っていること、端々に「ドヤ顔」が見えること、共感は得られないだろうという減点４つで６点です。

「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。」（12・49）「火」のイメージは「焼き尽くす火」のイメージが大きいと思いますが、私は今日の朗読の中では「聖霊」と受けとめました。そのあとに「わたしには受けねばならない洗礼がある」（12・50）とあります。これがイエス様の「受難と死」を指しているなら、受難と死のあとに投げ込まれる「火」とは、「聖霊」のことではないでしょうか。

「その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。」（12・49）イエス様の願いは、果たして叶えられているのでしょうか。それとも未だ叶えられていないのでしょうか。不信仰な時代、不信仰な人々が、イエス様の切なる願いに水を差している。そうなると未だ叶えられていないのかもしれません。

イエス様の投じる「火」つまり「聖霊」は、すでにこの地上に投じられました。聖霊の照らしを受けて、「信仰は生きるものだ」と理解したグループと、「人は生きるのが先だ。今は信仰まで手が回らない」と考えるグループとは当然対立して分かれます。

一般的にですが、子は父親に反抗して「父のようにはなりたくない」と考えます。嫁もしゅうとめに反対して、「しゅうとめのようにはなりたくない」と考えます。そのように対立して分かれますが、何かのきっかけで、子が親を、嫁がしゅうとめを理解するときが来るのです。それは、何を生きてきたかを理解したときではないでしょうか。

ですから「信仰は生きるものだ」という理解は、信仰を生きてきた世代にとってはすんなり受け入れられるのですが、信仰に付き合わされていると感じている世代にとっては、余計な時間を使い、余計な費用を払わされ、迷惑千万と考えるわけです。

しかし考えてみてください。何を生きるにしてもある程度のお金は必要です。私は今のノートパソコンを使い始めて６年目ですが、買い換えを考えるようになりました。以前のノートパソコンを買うとき、最新のモデルにオプションまで付けて買いましたが、やはり６年ほどで不満を覚えるようになり、現在のパソコンを手に入れました。

説教を書き、それをブログやホームページに反映し、更にはミサの動画を収録してより多くの人に下五島三つの教会のミサ礼拝を届ける。私が司祭として信仰を生きるには、お金の部分も必要と考えています。「生きるためにお金は必要」結局これはどの世界でも共通です。

ある世代は「信仰は生きるものだ」と考え、生きるためにはお金も必要とちゃんと理解してそれぞれの教会の規定に沿ってミサ献金や教会維持費、教区費を納めてくださっています。もちろん、支払が困難な人がいます。少し多めに入れることのできる人がいれば、教会は全体とし

て助かります。なかには次の世代が信仰を生きてくれるために、大きな額を寄附してくださる方もおられます。ちょっとした例では、聖母マリアの被昇天のミサ献金の中に五千円札が一枚入っていました。千円札を二枚、四つ折りにして一人が入れたと分かる献金もありました。

司祭職についても、「司祭職は生きるものだ」と考えている司祭と、「司祭職はあくまで『職務』だ」と考えている司祭がいると私は想像しています。あくまで想像です。そして私も、もっと髪がふさふさしてチャラチャラしていていた時期は、「司祭職は『職務』だ」という意識だったかもしれません。

振り返れば、先輩司祭たちの生き方がダサく見えて、耐えられないと感じる時代がありました。しかし、私が批判していた先輩司祭たちは、司祭職を「生きている」人たちでした。司祭職に命をかけている人たちでした。今、命をかけている司祭たちがどれだけいるか。イエス様が投じた「火」は、その見極めをする「火」になっていると思います。

「その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。」この私にも、命をかけて取り組みたいことが見つかりました。それは長崎教区のために「正確な洗礼の記録を残すこと」です。2025 年版「カトリック教会ハンドブック」を見ると、長崎大司教区の信徒数は 57061 人となっています。もう既にその四倍が亡くなっているかも知れません。すると長崎教区で洗礼の恵みにあずかった人は、台帳に記録し始めてから 28 万 5 千人くらい存在する計算になります。2024 年黙想会で話しましたが、洗礼番号 53 番の次の人の洗礼番号も 53 番と書かれていたり、所々不正確な部分があるのです。

私は長崎教区の洗礼の記録を正確に残すことを、司祭生活のすべてを賭して成し遂げたいと思っています。私は、働きを理解してくれる協力者をもう一人得ました。大司教様もご存じの方です。その方とこれまで五つの教会、17500 人の記録を教区に報告できる所まで来ました。

中田神父の司祭生活は 75 歳まで 16 年です。5 年で 17500 人ですから、75 歳までには 5 万人の正確な記録を残せるだろうと思っています。もちろん、中田神父のライフワークを理解してくださり、協力してくださる司祭・信徒が更に得られれば、私が生きているうちに 28 万 5 千人すべての正確な記録が教区に保管できるようになるでしょう。

私にも、「司祭職は生きるものだ」と理解できる日がやって来ました。愚かな私は理解するのに 30 年を要してしまいました。イエス様の投じた「火」は、決して消えないものとしてすべての人を奮い立たせてくれます。皆様の中でも、「信仰は生きるものだ」との理解が深まり、そこまでたどり着いていない人との対立もいつか解消され、共に手を携えて信仰を生きていく。各自がそのために奉仕したいものです。

先週お知らせした通り、下五島地区として聖書の一節を標語とすることが決まりました。それはヨハネ 14 章 6 節です。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。」私も、父と子と聖霊による洗礼を受けたすべての人の歩んだ道を、正確に記録し続けていきたいと思っています。

年間第 21 主日(ルカ 13:22-30)

主日の福音 2025/8/24(No.1371)

年間第 21 主日（ルカ 13:22-30）

どこで、狭い戸口から入ろうと努力しますか

「狭い戸口から入るように努めなさい。」（13・24）イエスの招きは、「できればそうしなさい」ではなく、狭い戸口を通った先でしか、主人と喜びを共にすることはできないという強い招きです。自分のこととして受け止めるきっかけを探しましょう。

「狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。」その人が体験した「狭い戸口」の先で神が用意しているものがきっとあって、「狭い戸口から入る」体験をしてみないことには、それを軽々しく口にできないのだと思います。

苦い思い出があります。初めての教会で数年が経ったときでした。私はその教会で聖歌の奉仕をしてくださっている聖歌隊の練習担当を命じられていましたが、この方々に生意気なことを言ってしまい、主任神父さまはじめ、先輩の助任神父さまにも迷惑をかけたのでした。当時、聖歌隊はいつになっても新しいメンバーが加わらず、このまま先細りしていくばかりでした。結論だけ申しますと「私はいつまでも皆さんの子守をするつもりはない」と言ったのです。変化を起こすつもりでした。

この発言が炎上しまして聖歌隊から猛抗議を受け、「私たちはもうお手伝いしたくありません。指導してくれる司祭を変えてください」とそれはもう大変なことになりました。結局私は責任を取って聖歌隊の指導を外され、先輩の助任司祭が指導をすることになります。代わりに引き受けてくださったのが中濱繁喜神父様でした。

当時の主任司祭は私にこう言って反省を促しました。「あのなぁ。60 歳にならんと言えんこともあっとぞ。言うとることがどれだけ重いことか、考えてものを言えよ。」最初で最後、当時の主任司祭から受けたお叱りでした。

今になって考えると、主任司祭が言いたかったのは「お前が主任司祭を何年も務め、いくつもの教会を通ってみないと分からないこともあるんだぞ」そういうことだったと思います。下五島地区に来てこれまでと全く違う経験をしました。狭い戸口を通らせていただきました。酸いも甘いも経験してから何かを言うのと、経験もないのに言うのとでは、言葉の重みは全く違ってきます。当時の主任司祭の一言は、「狭い戸口」を通り抜けた司祭だけが言える、重みのある言葉でした。

どんな時代にも、親の世代よりも子供の世代が高い教育を受けるものです。すると子供は親よりも多く得た知識をもとにして意見することがあります。ですが高い教育を受けているだけでは、本当に「狭い戸口」を通った人の知恵や言葉に優るとは限らないのです。

私は母親から、「世の中に絶対ということはない」この一つを教えてもらいました。母は中学までしか教育を受けていません。大学を卒業し、さらに高度な専門教育を受けた私とは比較になりません。しかし、「世の中に絶対ということはない」という教えは、厳しい社会をくぐった人だから言える言葉であり、私にはとてもありがたい言葉でした。

「御一緒に食べたり飲んだりしましたし、また、わたしたちの広場でお教えを受けたのです」（13・26）たとえ話の中で家の主人から締め

出しを食らった者たちが主人に必死に弁明しています。主人はこの人たちの本性を見抜いています。彼らは調子のよい時だけ顔を出し、日ごろは主人の思いに背を向けて生きてきたのです。

「お前たちがどこの者か知らない。不義を行う者ども、皆わたしから立ち去れ」（13・27）彼らは「狭い戸口」を避けて日々を送ってきたのです。いざという時に、この「狭い戸口から入る」努力をしたかどうかが問われるのです。

私たちに当てはめてみましょう。「ご一緒に祈りをしましたし、聖書講座にも行きました。」それはそうかもしれませんが、祈りをしたことがある、聖書講座に行ったことがあるだけでは、必ずしも「狭い戸口から入る」努力をした保障にはならないのです。むしろ一日も欠かさないこと、毎日続けることのほうが、「狭い戸口から入る」証明になることがあります。

今日も明日も、欠かさずに朝夕祈る。これは並大抵のことではありません。誰の目にも止まらないかもしれません。しかし神は、「狭い戸口から入ろうと努力する」これらの人々を見ておられるのです。

聖書愛読運動に現在取りかかっています。詩編の朗読の三年目です。私の見立てでは、通常終了の待降節までには読み終えることができないけれど、年明けてから残り四回ほど付け加えれば、詩編 150 編をすべて読み終えることができると考えています。

三年前、詩編をすべて読み上げるという目標は、文字通り「狭い戸口」に思えたことでしょう。典礼委員でさえそう感じていたかもしれません。しかし皆さんは、「狭い戸口から入るように努めなさい」という招きに応えてくださり、経験した人でないと分からない喜びにたどり着こうとしているのです。

イエス様が招いた道であるからには、私たちは必ず「狭い戸口から入る」ことを求められます。狭い戸口の先には、招いてくれた主人と共にする喜びが待っているのです。ここまで説教を聞いて、皆さんはそれでも狭い戸口から入ることを避けようとするでしょうか、イエス様の招きを信じてみようかなと考えるでしょうか。このミサの間に考えることにしましょう。

◆狭い戸口
13:22 イエスは町や村を巡って教えながら、エルサレムへ向かって進んでおられた。
13:23 すると、「主よ、救われる者は少ないのでしょうか」と言う人がいた。イエスは一同に言われた。
13:24 「狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。
13:25 家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまってからでは、あなたがたが外に立って戸をたたき、『御主人様、開けてください』と言っても、『お前たちがどこの者か知らない』という答えが返ってくるだけである。
13:26 そのとき、あなたがたは、『御一緒に食べたり飲んだりしましたし、また、わたしたちの広場でお教えを受けたのです』と言いだすだろう。
13:27 しかし主人は、『お前たちがどこの者か知らない。不義を行う者ども、皆わたしから立ち去れ』と言うだろう。
13:28 あなたがたは、アブラハム、イサク、ヤコブやすべての預言者たちが神の国に入っているのに、自分は外に投げ出されることになり、そこで泣きわめいて歯ぎしりする。
13:29 そして人々は、東から西から、また南から北から来て、神の国で宴会の席に着く。
13:30 そこでは、後の人で先になる者があり、先の人で後になる者もある。」

年間第 22 主日(ルカ 14:1,7-14)

主日の福音 2025/8/31(No.1372)

年間第 22 主日（ルカ 14:1,7-14）

末席に座ってあなたと食事を共にしたい

8 月の日曜日、今年は 8 月 31 日まで日曜日が回ってきました。31 日までミサとなると、お賽銭を郵便局や銀行に納めるのは 9 月 1 日以降になります。私はこういう所は神経質なので、8 月のお賽銭を 9 月に入れるのは納得がいかないのです。中田神父のわがままですからこれ以上言うのはやめましょう。

今から 6 年前、コロナの関係でミサが中止になることがありました。中止になったり再開したりでしたが、この少し前頃から、私はミサを収録し、公開するようになりました。とある日曜日、信者のまったくいないミサでしたが、私の心の中では、よからぬ思いと本来のあるべき思いと両方が浮かびました。「よからぬ思い」とは、非公開のミサをささげ、それを YouTube にアップしたところ、通常 80 回ほどの視聴回数が 240 回を超えました。

一人で喜びたいなら、非公開のミサを選ぶでしょう。たくさんの方に観てもらえているのですから。しかし、一人でミサをささげる寂しさはたとえようもありません。もちろん、参加できないすべての人と、心を合わせてはいますが、人間ですからそれを目で確認できないままミサをささげても気持ちの入り方が違う気がします。

「招待を受けたら、むしろ末席に行って座りなさい。」（14・10）「宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。」（同 13）この箇所を読み返しながら、今回初めて、自分が初めての教会に赴任して間もない頃の出来事を思い出しました。

もう 30 年も前のことです。広い管轄区域の信徒と親睦を深めるため、宴会の席もしばしば開かれていました。司祭の霊名のお祝い会、敬老会、さまざまな機会に食事とお酒の席が設けられました。浦上に入って一年目、主任神父様と先輩の助任神父様たちはそれぞれ思い思いの席に出向いて、信徒の皆さんに飲み物を勧めていました。司祭に飲み物を注がれた信徒はきっと嬉しかったでしょう。

しかし私は、先輩たちのように気軽に信徒の席に飲み物を勧めに行くことができませんでした。まだ誰も、顔を覚えていない中で、お酌をしに行くのは私には不可能でした。身動きできないでいる自分にショックだったことを覚えています。会場は賑やかに盛り上がり、宴もたけなわなのに、私一人司祭の座る席から動くこともなく、茫然としていたからです。

あとで分かりました。先輩たちも新人の時に同じ思いをしたし、当てもなく注ぎに行っているのではなく、声をかけやすい信徒に上手にお酌をしに行っていたのです。そうやって先輩も自分たちの姿を見せながら、私の自発的行動を促していたわけです。しかし私はなかなかセルフ・スターターになれませんでした。そこは本当に苦労した点でした。

主任司祭に、または助任司祭に飲み物を注いでもらうだけで、信徒がどれだけ嬉しいか、今なら分かります。初めての主任司祭を経験した太田尾小教区で、お祝い会の席で民謡とかの出し物があると、よくスー

タン姿のまま飛び入りで混じったものでした。本来なら私が入ると調子を狂わせてしまうはずですが、いつも歓迎してもらい、会場は大盛り上がりでした。民謡を踊った後に一通り飲み物を注いで回ると、いろんな人からふだん聞けない話を聞くことができたのです。

「招待を受けたら、むしろ末席に行って座りなさい。」（14・10）「宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。」（同 13）末席まで座りに行くと、会場の様子が手に取るように分かります。様々な不自由を抱えている人に「来てくれてありがとう」と感謝を伝えると、会場全体が喜びで満たされます。

何かを当てにしているのではありません。一人一人に、私はあなたのそばにいるよ。今日あなたが来てくれて嬉しいよと素直に伝えたい。そのためだけに末席まで行き、飲み物を注ぎ、すべての人と同じ食事を食べるのです。

もちろん、たかだか何度かの経験で、生まれ変わったように社交的な人になれるかというとそうではありません。私は基本的には社交的ではない人間です。だからこそ分かるのです。末席まで出向いて座ることは、どんな知識や経験よりも人の心を開かせるさせるということを。

初めに受けたショック。主任神父様も先輩助任神父様も末席に座って嬉々としているのに、自分は長崎教区で最も広く大きい信徒会館で一人ぼっちになっている。そのショックが、末席に座る大切さ、お返しのできない人を招く大切さを痛いほど教えてくれました。

今も、コロナは完全にはなくなっていませんが以前ほどではなくなり、会食の機会も増えてきました。いちばん楽しかった時代が、もう一度やって来ることを心から願っています。末席に座ってお酒を酌み交わし、嬉々として宴会を楽しむ日が一日も早く来るように、「へりくだる者を高められる」主に願いましょう。

14:1 安息日のことだった。イエスは食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになったが、人々はイエスの様子をうかがっていた。
◆客と招待する者への教訓
14:7 イエスは、招待を受けた客が上席を選ぶ様子に気づいて、彼らにたとえを話された。
14:8 「婚宴に招待されたら、上席に着いてはならない。あなたよりも身分の高い人が招かれており、
14:9 あなたやその人を招いた人が来て、『この方に席を譲ってください』と言うかもしれない。そのとき、あなたは恥をかいて末席に着くことになる。
14:10 招待を受けたら、むしろ末席に行って座りなさい。そうすると、あなたを招いた人が来て、『さあ、もっと上席に進んでください』と言うだろう。そのときは、同席の人みんなの前で面目を施すことになる。
14:11 だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」
14:12 また、イエスは招いてくれた人にも言われた。「昼食や夕食の会を催すときには、友人も、兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼んではならない。その人たちも、あなたを招いてお返しをするかも知れないからである。
14:13 宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。
14:14 そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる。」

年間第 23 主日(ルカ 14:25-33)

主日の福音 2025/9/7(No.1373)

年間第 23 主日（ルカ 14:25-33）

（被造物を大切にする世界祈願日）

イエスを愛するために憎むべきものを憎んでいるか

「自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。」（14・33）今日、私たち皆が、ここにたどり着けるようにと願いながら、説教を始めたいと思います。

暑いさなか、日曜日に葬儀、金曜日にも葬儀、時間はどんどん削られ、以前の材料を使って焼き直して説教に臨んでいます。私たちはそれぞれ、自分なりの理想を持って生きていると思います。小神学校時代に、私は消灯時間が夜９時半と、あまりに早いのに不満を持っていました。校長先生が濱崎渡神父様、副校長神父様が阿野武仁神父様で、なぜこの消灯時間なのか、まったく受け入れられず、一般の生徒のことを思うと悔しい限りでした。

しかし今なら分かります。小神学校時代は、「限られた時間の中でしなければならないことをこなす」訓練の期間でした。その証拠に大神学校時代は、小神学校で受けた訓練のおかげで、限られた時間の中で果たすべき務めを果たせるようになりました。

そして司祭になると、小神学校時代の訓練がいかに大切だったかが分かります。司祭になると、自分のための時間を取れない場面がしばしば起こります。込み入った相談の電話、命の危険にかかわる病人のために病院を訪ねる、葬儀が入るなどです。

それが土曜日に一度に重なっても、それでも主日のミサはやってきますし、説教を準備しなければなりません。福江教会は前晩のミサがあります。さらにお葬式が土曜日に入ると、当てにしていた時間をすべて諦めなければならなくなります。

ここで、今週のイエスの招きを重ねて考えるのです。「自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。」小神学校時代の私は、「勉強したい人に思う存分勉強の時間を与えてくれればいいのに」という考えを捨てきれずにいたのです。「考え」も「持ち物」の一つです。何かを捨てなければ、イエスの弟子ではありえないということです。

親子の間でも、この戒めは当てはまります。「これくらいは出来るはず。その年齢に達しているから」という考えを、ひょっとして握りしめ、捨てきれずにいるのではないでしょうか。「この年齢になってなぜこんなことができないのか？」本当にそうでしょうか？その考えを親が捨てなければ、イエスの弟子ではありえないのです。

一方で子は親に対して理想を描いているでしょう。現実の親が理想から外れている、あるいはかけ離れていたら、親を拒絶すべきでしょうか。むしろ、子が親に対して持っている理想を横に置いて、現実の親の姿を直視し、受け止める必要があります。子が捨てなければならないのは、親に対して持っている「お父さんお母さんはこうでなければいや

だ」という思い込みです。

それぞれが持ち物を捨ててこそ、イエスが示す十字架を担えるようになります。何かを握りしめていたら、手は自由に使えず、十字架を担うことはできません。私たちが担うべき十字架を担うために、握りしめているものを憎み、手を自由に使えるようにしておくのです。

日本の教会は毎年９月を、「すべての命を守るための月間」と定めています。イエスがまず先に、人類に期待する理想像を「憎んで」捨て、人類の弱さそのままを「自分の十字架」として担い、「命を守り抜いた」方です。このイエスに導かれて、私たちもすべての命を守る生き方を特に今月目指していきましょう。命が守られていない状況が一日も早く解消するように、祈りを付け加えることにしましょう。

◆弟子の条件

14:25 大勢の群衆が一緒について来たが、イエスは振り向いて言われた。
14:26 「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。
14:27 自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない。
14:28 あなたがたのうち、塔を建てようとするとき、造り上げるのに十分な費用があるかどうか、まず腰をすえて計算しない者がいるだろうか。
14:29 そうしないと、土台を築いただけで完成できず、見ていた人々は皆あざけって、
14:30 『あの人は建て始めたが、完成することはできなかった』と言うだろう。
14:31 また、どんな王でも、ほかの王と戦いに行こうとするときは、二万の兵を率いて進軍して来る敵を、自分の一万の兵で迎え撃つことができるかどうか、まず腰をすえて考えてみないだろうか。
14:32 もしできないと分かれば、敵がまだ遠方にいる間に使節を送って、和を求めるだろう。
14:33 だから、同じように、自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。」

十字架称賛(ヨハネ 3:13-17)

主日の福音 2025/9/14(No.1374)

年間第 24 主日(十字架称賛)(ヨハネ 3:13-17)

十字架を背負って、生き方でイエスを称える

今週は９月 14 日の「十字架称賛の祝日」が日曜日と重なったため優先して祝っています。イエス・キリストの祝祭日と、その他の重要な祝祭日の場合は、日曜日であっても優先されることになっています。聖人の記念日ではほとんど日曜日のほうが優先され、その年の典礼暦から消えてお休みになります。ただし、ある場合は日曜日に重なってしまう祝日を、月曜日に繰り越して祝うこともあります。

私は、十字架称賛の祝日で忘れられない思い出があります。馬込教会のある伊王島で、「遠見岳（「遠く」を「見る」と書きます）」と呼ばれる山の頂上にある個人の土地に、馬込教会信徒の力を借りて十字架を建ててもらい、祝福したのです。浦上教会に所属する辻地区にも、十字架山と呼ばれる場所がありますが、同じような場所を伊王島に設置することができたのは、思い出深い経験でした。

当時は、遠見山の頂上まで登る山道は大変険しく、人通りも少なかったのです。けれども十字架を設置しようという計画が本決まりになったことで、滑りやすかった山道を歩き易くしてくれる人が現れ、周囲の草払いも進み、立派な十字架も信徒の協力で制作され、十字架称賛の祝日に合わせて土地と十字架を祝福したのでした。

十字架を設置した当初は、長崎の大波止と伊王島港の間を船で行き来するときに遠見岳頂上に十字架が見えて、たいへん誇らしかったのを覚えています。もし、伊王島に渡る人がこの説教をメルマガかブログで読まれたら、今の様子を聞かせてほしいなぁと思っています。

さて、十字架称賛の祝日にあたり、福音の学びを「十字架を背負って、生き方でイエスを称える」としたいと思います。十字架称賛の祝日は、イエスが磔にされた十字架を思う日ですが、それは当然、十字架上で最期を遂げられたイエスの生き方を思う日でもあります。

選ばれた朗読個所の「天から下って来た者」（3・13）に目を向けてみました。十字架の姿と重ね合わせて考えることができると思います。十字架が、地面にしっかり立つためには、十字架の縦の木が地面に深く下ろされる必要があります。ただ単に十字架を立てるわけではなく、人が磔にされた上で倒れないようにしっかり立つためには、深く穴を掘り、地面に埋める必要があるからです。

イエスは、ご自身が言われている通り「天から下って来た者」です。天から下って、人となられ、この世界に深く根を下ろしました。仮住まいではなく、完全な人として、人間が体験するすべてを体験されたのです。この、世界に深く根を下ろした姿が、イエスのご生涯の始まり、出発点になります。

そしてイエスは、ご自分の使命を完成させます。「信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得る」（3・15）という使命です。これは、十字架の横木に当たるのではないでしょうか。神が御子を世に遣わし、

御子は天から下って来て、御自分を信じる者に永遠の命を得させてくださいました。しかもこの救いのわざは、十字架の上で完成されました。私たちはこの十字架を特別に今週称えているのです。

イエスの十字架を称えることは、十字架によってご自分の計画を完成されたイエスのご生涯を称えることでもあります。その生き方とは、この世に深く根を下ろし、御自分を信じる者に永遠の命を得させるという生き方でした。

そこで私たちも、イエスの生き方に倣い、この世に深く根を下ろし、この世界の一人でも多くの人に永遠の命を得させるための働きかけをしましょう。きっと私たちは、この世に深く根を下ろすことについては教会で何も言われなくても十分に実行できていると思います。それを十字架の縦の木、つまり土台として、出会う人々にキリスト者としての証しをすれば、私たちが担う自分の十字架は完成です。

お一人お一人が根をおろしている場所は、一つとして同じ場所はないと思います。司祭は、ここに集まっているお一人お一人ともまた違った場所に根をおろしているわけです。

私が置かれている場所を痛感した出来事がありました。上五島時代のことです。月曜日、地区の司祭たちと浦桑のお店で食事を共にしていました。私の携帯に、知らない番号で電話がかかり、電話を取ってみると、もうこれ以上生きていけないといった深刻な電話でした。周囲の場の雰囲気に合わない電話の内容でしたが、私は「決して死んではいけない、今日一日、明日一日生きれば十分だから」と返事をしました。

私の携帯電話の番号をどうやって知ったのか分かりません。いちおう教会の留守番電話には、緊急の時に携帯にかけるようにと携帯番号の紹介が録音されていたので、そこから知ったのかもしれません。けれども、ふだんの生活の中にあって、生きるか死ぬかの瀬戸際の電話がかかる。そういう場所に司祭は根をおろしていることを痛感したのです。亡くなった先輩司祭の言葉を思い出します。「どこに行っても司祭、どこにいても司祭」。

イエスは御自分の救いの計画を十字架の上で完成されました。私たちも、生き方でイエスの十字架を称えましょう。生活に深く根を下ろすことを十字架の縦の木として、自分にできる証し、横の木の働きをしましょう。証しを見た人が、証しの向こうにある十字架上のイエス・キリストに導かれるように、このミサの中で願い求めましょう。

3:13 天から降って来た者、すなわち人の子のほかには、天に上った者はだれもいない。
3:14 そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。
3:15 それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。
3:16 神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。
3:17 神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。

年間第 25 主日(ルカ 16:1-13)

主日の福音 2025/9/21(No.1375)

年間第 25 主日（ルカ 16:1-13）

神が天の国に場所を用意してくれるように、立ち回れ

今日、敬老のお祝いを受ける皆様、今日まで健康で、神さまの祝福をたくさん頂いてきたことにあらためて敬意を表します。金婚式を迎えた方もおいでになっています。中田神父にとっても金祝のお手本です。

皆様の中には、小学生または中学生から、元気をもらえるハガキが届いた方がいると思います。「敬老の日」と書かれ、先週の「祖父母と高齢者のための世界祈願日」に合わせて教区家庭委員会が作成したものです。実は私も、このハガキが司祭館のポストに入っていました。15 年後に読めばちょうど良かったのですが、つい誘惑に負けて書かれた内容を読んでしまいまして、涙腺が緩みました。

実は過ぎた週までのあいだ、年休を取らせていただくため、約一ヶ月間、三年前とか六年前とか、九年前の説教の焼き直しを使っていました。この間に司祭評議会や顧問会など、難しい会議も挟んでいて、説教に十分時間を費やせなかったことお詫び申し上げます。

本日の朗読に登場する「不正な管理人」ですが。中田神父が思い描いた像は、長年主人に尽くしてきたベテランの管理人だったのではないかと思っています。「土を掘る力もないし、物乞いをするのも恥ずかしい。」（16・3）

管理人を務めて日が浅いのであれば、管理人の職を解かれても別の仕事で再起することができたでしょう。しかし彼は、ひょっとしたら高齢者で、もはや転職の見込みが無いのかも知れません。管理人であるうちに、自分の命を守るために持っていた権限を手放す決意をしたのでしょう。

このたとえは、いつの時代の高齢者にも通じる話かもしれません。つまり、人生の終わりが近づいたときに最大のピンチが訪れたなら、ピンチを乗り切るためには大勝負に打って出ないといけない。残る命のためにほかはすべて手放し、危機を乗り越えなければならないということです。

職を解かれようとしている管理人は、一つずつ権限を手放していきます。油を主人に納めている人から、小麦を主人に納めている人から、それぞれ納めるべき分量を差し引きます。自分の懐に入れてよい分を、一気に手放して、油を納める人、小麦を納める人に恩を売ったのです。

この物語は、主人から預かった権限を、最終的にすべて主人にお返しできるか、自分のものにしないで手放せるか。そのことを問いかけているのだと思います。それはどんなに高い地位に就いたとしても同じことです。最近の例では、教皇ベネディクト十六世と教皇フランシスコの例が思い出されます。

教皇ベネディクト十六世は、退位したときバチカン内にある修道院に住まいを移されました。退位して「名誉教皇」という称号になりましたが、後任の教皇フランシスコと権威が並び立つことにならないように、

静かに暮らしたのです。いろいろ口出しをすれば、それを叶えてくれる人はきっといたでしょう。そうなると教皇フランシスコの働きに影響が必ず出ます。「影響は出ない」と考えたとしても、出るのです。

教皇様さえ、今日のたとえ話の例に倣って、自分に与えられた権威を手放し、使用しなかったのです。すべての権威、権限が主人である神さまから与えられたものだから、一つ残さず、神さまにお返しして最後の日々を過ごしたのです。どんなに大きなものでも小さなものでも、自分のものにせず、忠実に神さまにお返しする。なんと偉大でしょう。

物語の管理人は、主人に職を解かれると悟って行動を開始しましたが、わざわざ職を解かれてから行動し始める必要はありません。この世の中でも「後進に職を譲る」という言葉がありますし、それは先輩や大先輩にしかできない、最後の務めだと思います。

中田神父はかつて、赴任した教会の最初の役員会議で、「皆さんのほとんどが、私より二回りくらい年上ですね。選挙をして入れ替わってもらいます」と宣言したことがあります。その時は不満とか不平が噴出しましたが、主任司祭の私と年齢の近い人たちが役員に推薦されて、すっかり入れ替わったのを見ました。もちろん推薦された人たちも大変ですが、たくさん学んで、大先輩にもたくさん聞いて、立派な教会役員に育ちました。

ある意味、職を中田神父に奪われた大先輩たちは、物語の管理人と同じように、急いで立ち回り、教会運営上の影響力を手放したのです。賢い振る舞いでした。教会での地位を手放した辛い体験は、あとで必ず、神さまが褒めてくださると思います。もちろん私も、その小教区に影響力を残すことなく、すべての権限を手放して異動しました。私が手放したものがどう使われているか、それは気になるときがあります。

いずれにしても、物語の主人は、不正な管理人の抜け目のないやり方を褒めました。手放すことはしばしば辛いものですが、手放すものの中には、恩を売ることができるものも結構あるのです。小教区からいただいて司祭たちは食べさせてもらったり、生活に使う物を買ったりしますが、そうして使っても最後にその小教区にたくさんのものを手放していく司祭がいます。私もすでに、黙想会の謝礼を手放しました。

司祭こそ、土を掘る力もないし、物乞いで生きていくこともできません。小教区の信徒に感謝されるような形で一つずつ手放すことが、いつまでも迎え入れてもらえる唯一の道ではないでしょうか。なかでも、これまでの経験から、司祭が最後に手放すべきは居住地、住所変更だと悟りました。転勤の辞令が来たのに同じ住所のままというのは、司祭として最後の務めを果たしていないです。これは長崎教区のすべての聖職者に言いたいです。

今日お集まりの高齢者も、きっと鮮やかに、身軽に、持っていた権限や立場上の力を、惜しげも無く譲って今日まで過ごしてきたと信じております。その働きの上に、神さまが幾重にも祝福を送って下さるよう、ミサの中でお祈りいたします。

年間第 26 主日(ルカ 16:19-31)

主日の福音 2025/9/28(No.1376)

年間第 26 主日（ルカ 16:19-31）

あなたは今日、ラザロの話をしましたか

今週の朗読箇所は有名な「金持ちとラザロ」のたとえです。いろんな示し方が考えられると思うのですが、金持ちが必死になってお願いしているのに結局何も変わらなかったのはなぜだろうか。何が足りなかったのだろうか。そのことを考えてみたいと思います。

「父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。」（16・24）当然のことですが、自分が苦しい目に遭ったら、自分の苦しさを取り除いてもらいたいです。自分のことしか考えられない。それはそうでしょう。

この願いは完全に打ち砕かれます。自分のことしか考えられない人は、神の国の宴席に招かれることはないのです。金持ちは、自分がいかに自分のことしか考えずに毎日遊び暮らしていたかを思い知らされます。

すぐに、金持ちは頭を切り替えました。兄弟のことを考えたのです。もしかしたら兄弟たちも、たいして変わらない生活、自分のことしか考えず、ぜいたくに遊び暮らしていたのかも知れません。そうなるとほぼ間違いなく、死後は自分と同じ境遇になります。ここでようやく、近い隣人のことに思いが至りました。

しかし、彼を諭す人として現れたアブラハムは、聖書の教えに耳を傾けさえすれば、十分滅びの道から免れることができると、金持ちの提案を退けます。もう一人登場しているラザロは、この世の中で最も貧しい人ですが、たとえばイザヤ書 58 章には貧しい人に果たすべきわざがちゃんと書かれてあります。

「わたしの選ぶ断食とはこれではないか。悪による束縛を断ち、軛の結び目をほどいて、虐げられた人を解放し、軛をことごとく折ること。更に、飢えた人にあなたのパンを裂き与え、さまよう貧しい人を家に招き入れ、裸の人に会えば衣を着せかけ、同胞に助けを惜しまないこと。そうすれば、あなたの光は曙のように射し出で、あなたの傷は速やかにいやされる。あなたの正義があなたを先導し、主の栄光があなたのしんがりを守る。」（イザヤ 58・6-8）

金持ちであれば、教育も十分受けているはずです。当時の教育とはすなわち聖書の学びのことですが、「律法と預言者の書」を十分学び、実践する機会も余裕もあったのです。もちろん、残されている兄弟たちもそうです。だから、死者が生き返ってなどというあっと驚くことを持ち出す必要など無いと、却下されたのです。

実はイエス様も、次のような言葉を残しています。「自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。」（マタイ 5・47）自分が生き残ることだけ考えてもダメ、兄弟が生き残ることを考えたとしても

まだまだ不十分で、最後はここまでたどり着かなければならないと、イエスは続けています。「だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」（同 5・48）

そこで、ラザロのことを考えてみましょう。金持ちは、ラザロを受け入れていれば、きっと宴席に加われたはずです。ラザロとはいったい誰のことなのでしょうか。単に、できものだらけの貧しい人、金持ちの門前で、食卓から落ちる物で腹を満たしたいと願っている人のことでしょうか。

最初は文字通り考えてみましょう。食卓から物が落ちる状態とは、どういう状態でしょうか。よほど、料理を並べすぎて、食卓からその一部がこぼれ落ちたのでしょうか。これが、ラザロが期待していたものでしょうか。そうかもしれませんが、もっと違う何かかもしれません。

ラザロは、何も頼るもののない人の代表でしょう。しばしば、何も頼るもののない人は、神にのみ信頼を置く人と同一人物です。「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである。」（ルカ 6・20）その、神にしか頼ることのできない人ラザロに金持ちは目を向けなかったのです。

金持ちも、一日中家から一歩も出ないわけではないでしょう。するとラザロ、神にしか頼ることのできない人が、視界に入ったはずです。それでも金持ちは気に留めなかった。施しのわざをおこなっていたら、結果は違っていたでしょう。神にしか頼ることのできない人を、その日のどこかで気に掛けていたら、金持ちも宴席に招かれていたでしょう。

同じことが私たちにも問われています。私たちはさすがに自分のことしか考えない人は少ないかもしれませんが、せいぜい考えて家族のこと、ここまでしか日常の話題にしない人はいるかもしれません。しかし神にしか頼ることのできない人、日夜神に叫びを上げている人が確かにいるのです。その人たちのために、私は今日何をしただろうか。

一度だけ、フィリピンに体験学習に行ったことがあります。一週間、ホームステイをしました。驚いたのは、自分たちでは生活できない家族を、車の運転手にあえて雇って部屋を与え、住まわせていました。そして食事の祈りの時に、それこそ神にしか頼ることのできない人を思い起こして、ゲストの私たちと食事をしたのです。

この通りせよということではありませんが、今日私は、神にしか頼ることのできない人、つまりラザロのことを心に掛けただろうか。今日、家族みんなで、日々神に叫びを上げている人のことを話題にしただろうか。振り返ることにしましょう。司祭館の食卓では、ニュースで報道される日々命の危険にさらされている人の話題だけでなく、赴任した教会で、助けることのできた人、助けてあげられなかった人のことを話題にしたりします。

今も、誰にも気付かれない境遇で神に叫びを上げている人がいます。どうかこのミサの時間だけでも、思い起こし、その人から逃げない、背を向けないと、心に決めましょう。あなたは今日、あなたにとってのラザロを話題にしましたか？

年間第 27 主日(ルカ 17:5-10)

主日の福音 2025/10/5(No.1377)

年間第 27 主日（ルカ 17:5-10）

からし種一粒の信仰は絶大な信仰のこと

過ぎた週は、恒例の司祭団ソフトボール大会に佐々町に出かけておりました。予選を一試合、そこで勝ったので午後から決勝戦を一試合。結果、上五島下五島連合チームは優勝しました。そう言うとすごいと思うに違いありませんが、私は五回組まれたチームの練習に一度も参加できず、当日の試合に代打で一度ずつ立たせてもらっただけです。

ただ、決勝戦の代打では奇跡が起きました。打ったのではなくて、相手のエラーを誘ってサヨナラ勝ちに繋げたのです。五回をめどに試合をするのですが、決勝の相手の佐世保平戸連合チームにずいぶん打たれて最終回の攻撃は 12 対 8 から始まりました。後攻の私たちは敗色濃厚ですが、あれよあれよと打者がうしろに繋いでくれて、12 対 11 まで追い上げたところで上五島の鳥瀬地区長神父様が長打を打ちました。

「これでサヨナラ勝ちだな」と思ったのですが、一人は生還したのですが一人は三塁で自重し、満塁となりました。12 対 12 のツーアウト満塁になったところでヒゲの監督の川原神父様が「代打・下五島地区長」と告げたのです。「何で俺に回すとや？」と思いつつも、「しかし打てばヒーローだな」という思いもあり、初球を狙おうと打席に立ちました。初球は天井に届くくらいのボール球でしたが、天井の電球をたたき割るようなバットの振りかたでボールに当てて、案の定、ボテボテのピッチャーゴロになりました。

しかし、最後まで何が起こるか分かりませんね。懸命に一塁に走ったら、第一試合でもそうだったのですが、割合足が速いものですからピッチャーが急いで一塁に投げようとして暴投してしまい、相手のエラーで三塁走者が生還し、13 対 12 で決勝戦を制したわけです。メンバーは大喜びでしたが、私は恥ずかしくて、その輪に加われませんでした。そんなわけで、来年の下五島大会まで、優勝旗を福江教会で預かります。

今週の福音朗読で、主人に命じられた務めを果たす僕に「こう言いなさい」と告げるイエスの言葉が身に染みます。私は何度か、養殖業の船に、見学で乗せてもらったことがありますが、養殖魚の餌巻きは、定期的に、計画的に行われます。船で一定の量の餌を撒くと、ほとんどの魚が争って餌を食べます。この仕事を任せられた船員さん、船長さんは、命じられたことを忠実に、すべて果たしますが、だれも威張ったり、得意になったりしません。むしろ、イエス様のことばを喜んで自分に当てはめるでしょう。「しなければならないことをしただけです」。

もちろんその仕事の中にも、どの魚があまり餌を食べなかったとか、どのいけすはふだんと違っていたとか、ちょっとした変化も見逃さずに報告します。魚が湧いている様子に興奮している見学者とは大違いです。それでも、イエス様が「言いなさい」と勧める言葉は控え目です。「わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです」（17・10）。

それ以上言わなくても、主人がすべてを知っている。その信頼関係が、イエス様の「こう言いなさい」ということばの中にあるのでしょう。同じ24時間で、一人は三倍以上の働きをし、一人は半分以下の仕事しかしない。そんな労働者が職場にいるとしましょう。三倍以上働いた人が「しなければならないことをしただけです」と言うなら、きっとその労働者には雇用者に対する深い信頼があるのだと思います。

2025年4月21日、カトリック教会ではフランシスコ教皇が逝去されました。遺言に、「墓碑にはフランシスコとだけ彫ってほしい」と遺されたそうで、その通りに、質素な墓に「FRANCISCVS」（VはUの意味）とだけ記されているそうです。初めての南米からの教皇様、バチカンでは矢継ぎ早に改革を推し進め、一方では声を上げることのできない人や、人間に破壊されるがままになっている地球環境のために叫びを上げ、在位12年で数多くの結果を残されました。

控え目に言っても、三倍以上の働きをなさった方ですが、墓碑には何も書き残しませんでした。イエス様への深い信頼がそこにはあります。「わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです」。イエス様は一つも見落とさずに、今フランシスコ教皇様を懐に置いてくださっているのだと思います。

事あるごとに私は、「この世を旅立つに当たって、イエス様のたとえ話の登場人物の一人を生き抜くとか、イエス様のことばの一つを生き抜くとか、そうした信仰の一生を携えて旅立つべきです」と言っています。婚礼の席で、水がぶどう酒に変わる「しるし」がおこなわれる。水を汲んで瓶に入れた使用人は、このぶどう酒がどこからもたらされたかを知っていましたが、言われたとおりに宴会の世話役に運び、それ以上何も付け加えませんでした。

強盗に襲われた人を介抱し、宿屋に泊めてあげたサマリア人は、名前も告げずに助けてもらった人と別れます。最後の晩餐の時、重労働である水汲みをする人も、食事の席が整った頃には舞台から去っています。聖書のたくさんの人物が、「わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです」を実行していながら、何も知らせずに舞台の袖に消えていくのです。それでも、神様は彼らがしたことを何一つ忘れることなく、報いてくださいます。

もし、この信仰を一言で言うなら、「からし種一粒ほどの信仰」ということになるでしょう。見た目で目立つわけでもなく、気付かれもしませんが、神様はこの信仰の持ち主に答えてくださるのです。「からし種一粒ほどの信仰」は、「ごく小さな信仰」と言うよりは、神が自分を覚えておられるという「絶大な信仰」のことなのです。

年間第28主日(ルカ 17:11-19)

主日の福音 2025/10/12(No.1378)

年間第 28 主日（ルカ 17:11-19）

あなたの信仰が、今日神の救いのわざを完成させた

過ぎた木曜日、救急搬送された母親を見舞いました。「見舞い」と言うより、「看取り」に来たつもりでした。次男からの報告では、水曜日に吐血したときは、大量の出血があり、血圧も尋常でない下がり方をしたというので、最後の言葉を聞きに来たつもりでした。救急搬送されたあと、当直の医師が懸命の治療をしてくださったようです。眠れぬ夜を過ごして、朝 7 時半のジェットフォイルに乗りました。

ところが母は、いざ面会してみると自分の置かれている状況をまったく理解してなくて、緊急事態を脱したあととはとても思えない、機関銃のように起こった出来事を話し始めたのです。しかも時間をずらしてやって来る子どもたちに、同じ話を一から繰り返しました。まるで楽しんでいるようでした。深刻な状態を想定して、茨木から、福岡から、福江からやって来ている子どもたちを拍子抜けさせる元気さでした。

ただ、もう一度吐血したら覚悟してくださいとかかりつけ医から釘を刺されていますので、仮に子どもたちが一息ついてそれぞれ帰ったとしても、急に呼び出されて皆さんに迷惑かける可能性は十分あります。その時は申し訳ありませんが力を貸していただきたいと思います。

福音朗読の学びを得ましょう。皆さんが、集団で「イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください」（17・13）と叫ぶとしたら、どのような状態になったときでしょうか。私は最近左肩が上がらなくなりまして、いわゆる「五十肩」に苦しんでおります。

同じ思いをしている人はこの中にもおられるかもしれません。ついでですが、福江教会の司祭館は主任司祭の私が 3 月生まれで 59 歳、助任司祭の一人が 58 歳、もう一人が 53 歳ですが、二人のうち一人は同じ「五十肩」です。肩の痛みを食事の時などに分かち合いますが、だからと言って「主任神父様、イエス様に一緒にお願いしてみましょう。『イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください』」。と叫ぶかというと、そうはなりません。

どれくらいの緊急性が生じると、「イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください」と叫ぶのでしょうか。先週水曜日の夜は、少し体験できたかもしれません。救急搬送された時点で、「出血が止まらなかったら覚悟してください」と言われたと LINE の知らせがあったので、会えないままのお別れは絶対に避けたくて、「イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください」という気持ちでした。

朗読の中で登場した重い皮膚病を患った人たちは、十人とも癒やされていたと考えられます。しかし、病が癒やされたとき、病の向こうにあるイエス様の思いに気付くことはできなかったのです。その中に一人だけ、病が癒やされたときに「すべての人の痛み苦しみに無関心でいられないお方」の思いに気が付いたのです。人の命に無関心でいられない神が、自分にも目を留めてくださった。一人だけが神を賛美するために

戻ってきたのです。

自分の痛みや苦しみでは、私たちはイエス様に叫びを上げないようです。医学やサプリが進歩して、ほとんど神に頼ろうとしません。むしろ自分以外の人の苦しみが自分の痛み苦しみに感じられるようになったとき、人は神様に叫びを上げるのでしょう。母親の例で申し訳ないのですが、母親の痛みが自分の痛みに感じられたので、どうか、兄弟皆集まるまで、無事でいてほしい。無意識に「イエスさま、先生、どうか、イサ子の子どもたちをを憐れんでください」と叫んたのだと思います。

実は神様が真っ先に、被造物である私たちの悩み苦しみを自分のものとしてくださいました。被造物と同じく悩み苦しみを背負うために、神様は人となってくださいました。私たちの苦しみを、ご自分の苦しみとなさるためです。被造物の私たちの命に無関心でいられなかったので、人となってくださったのです。この神の愛、神の憐れみを理解し、感謝し、神を賛美しに来る人は十人に一人。その数は二千年前も今も全く変わっていないようです。

イエス様はそのことを嘆いたでしょうか。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」（17・19）よく、「本当に主任神父様の説教を聞かせたい人はミサに来ていないのだから意味が無い」と言ったりします。本当にそうでしょうか。「立ち上がって、行きなさい」と励ましたその人は、使命を託されて出かけて行きます。「神を賛美しに戻って来ることは必ず意味がある」と、伝えに行くために「立ち上がって、行きなさい」と言われているのではないでしょうか。

みなさんも、そうです。神様の救いのわざを完成させるために、十人に一人かもしれませんが、ここに集まっています。「ほかの九人はどこにいるのか。」どこにいるのか分かりません。分かりませんが、あなたは救いのわざを完成させるために神を賛美するために戻ってきてくれました。感謝いたします。

今日私は、皆さんに「立ち上がって、行きなさい。」と伝えたいと思います。ミサで疲れたと、下を向いてトボトボ帰るのではなく、あなたの信仰は、あなたを救う力があるのです。神様の救いのわざを、神を賛美するために戻って来ることで完成させることのできる大きな力を秘めているのです。今日から私たちは、「あなたの信仰があなたを救った」と証しするために、胸を張って日々の生活に戻りましょう。

年間第 29 主日(ルカ 18:1-8)

主日の福音 2025/10/19(No.1379)

年間第 29 主日（ルカ 18:1-8）

司祭の唱える祈りに参加者みなが深く一致できるように

鯛ノ浦で、吐血して緊急搬送された母親に、もしものことがあった場合に備えて待機しておりましたが、いつの間にか待機日数ばかりが増え、日に日に元気になりまして、戻って来る直前には手すりをつたっての歩行訓練が始まるまでになりました。輸血しても輸血しても追い付かないほど出血し続け、胸が締め付けられたことを思えば、信じられない回復ぶりでひとまず安心しました。担当医の懸命の処置にも頭が下がります。

さて日本の教会は「新しいミサ式次第」発行から３年が経ちました。３年前の原稿をもとに、式次第の中の「叙唱前句」について少し触れたいと思います。具体的には「主は皆さんとともに」「またあなたとともに」「心をこめて」「神を仰ぎ」「賛美と感謝をささげましょう」「それはとうとい大切な務めです」この部分になります。

この叙唱前句の目的は、解説を引用すると「賛美と感謝の祈りを唱える人と、参加している信者が互いに心を合わせ、信者が司式者の唱える祈りに深くあずかるようにすることです」となっています。

その中で特に、「信者が司式者の唱える祈りに深くあずかるようにすること」この部分に中田神父は身が引き締まりました。信者が司式者の唱える祈りに深くあずかるためには、当然、司式者がそれ相応の唱え方、祈り方をしなければならない。私はそう理解しました。

信者が司式者の祈りに深くあずかれるのは、司式者の祈りが信者の心に響くときでしょう。信者にとって司式者の祈りが、まさに願って欲しい祈り、神様に届けて欲しい祈りに聞こえたとき、司式者の祈りに深くあずかれるわけです。それは同時に、司式者の祈りに深く一致できる瞬間でもあります。

これまで３年、新しいミサの奉献文を唱えてきました。唱えていくうちに、心に響く部分が出てきました。以前の奉献文には無かった新しい部分です。「いま、ここに集うわたしたちをあわれみ、」という部分です。

以前は、「なお、わたしたちをあわれみ」という漠然とした表現でしたが、「いま、ここに集うわたしたち」と実際に集まった会衆を強調しています。「いま、」「ここに」集うわたしたち。司式者の祈りに深くあずかれるように、司式者の祈りに深く一致できることができるようにと、実によく考えられていると思います。

ルカ福音書の 22 章、過越の食事の冒頭で、イエスが珍しく個人的な感情を表す場面があります。「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。」（22・15）この祭壇で繰り広げられていることは、イエスが切に願っていたことなのです。それが司式者から参加している会衆に伝わるように、司式者と会衆の一致した祈りとなるように、常に心がける必要があります。

朗読された福音にも触れておきましょう。一人のやもめが、傲慢極まりない裁判官のもとにやって来て訴えます。「相手を裁いて、わたしを守ってください」（18・3）。この女性の言葉はボディーブローのようにじわじわ効いてきます。ボクシングでボディーブローは、効き始めると地獄の苦しみを味わうそうです(ちなみに顔を殴られ続けて倒れるのは天国の快感を味わうそうです)。諦めないやもめの訴えに耐えられなくなった不正な裁判官は、ついに本来の務めを果たします。

どんなに傲慢な人でも、不正な人でも、良い部分はあるわけです。やもめの訴えは不正な裁判官からさえも正しい振る舞いを引き出す粘り強い訴えでした。不正な裁判官から隠れていた良心のかけらを呼び覚ます、心に響く言葉を持っていたやもめ。それはイエスのことだったのかも知れません。

司祭も、ミサの中でイエスの働きをします。これまで数限りなくミサをささげましたが、そのうち何回が、「いまここに集うわたしたち」の祈りを御父に届けたでしょうか。また祈りの結果、なるほどと、納得できるような形で御父から答えを引き出せるミサをおささげできたでしょうか。十分でないことを認め、神にあわれみを乞うしかありません。

もしかしたら叙階式ミサのその日、このミサ一回だけは、個人的な感情を挟まず、祈りをささげられたかも知れません。そうなるともしこれから失点を取り戻そうとしたら、何十年も、私心なく、二心なくおささげしていかなければなりません。私は、命が尽きるまでに、皆さんの祈りを私心なく御父にささげる境地に達することができるでしょうか。皆さまの助けがなければ一人では出来ないことです。

イエスはミサの中で一人ひとりの司祭を使って、昼も夜も叫び求める人の声を拾い上げ、父なる神に届けてくださるのです。それはどんな司祭であっても、「あれが司祭か」と思える司祭であってもです。力を引き出してくださるのはいつもイエスだからです。

皆さんが祈りの中で願い求めていることは、イエスが目の前の司祭を通して必ず父なる神に届けてくださいます。今回のミサ奉献文の変更で、私たちは「いま、ここに集うわたしたち」となりました。これからも、司祭と心を合わせ、ミサをささげていきましょう。司祭も今まで以上に皆さんと深く心を合わせて、ミサをおささげしていきたいと思います。

年間第 30 主日(ルカ 18:9-14)

主日の福音 2025/10/26(No.1380)

年間第 30 主日（ルカ 18:9-14）

私たちが欠けていることを謙虚に認めて祈る

今年、長崎教区は司祭の黙想会を三つのグループに分けて開いています。理由はカトリックセンターの閉鎖です。カトリックセンターが数十人受け入れできたので、大司教館の宿泊受け入れと合わせて、まとまって黙想会ができていたのですが、出来なくなりました。そこで会場と日程と説教師を三通り設け、黙想会を受けさせています。

私は大司教館での班に参加してきました。説教師は長崎の愛宕教会を任されているレデンプトール会の瀬戸神父様でした。修道会の神父様でしたので、レデンプトール会を立ち上げた聖アルフォンソからの学びがほとんどでしたが、その中に長崎教区司祭が日頃足りていない部分を見つけることができて、とても学び多い黙想会でした。

司祭の黙想会の中でももちろんミサがあります。オルガンを弾いてくれたシスター以外は、全員司教と司祭です。私はその中で、二日目のミサの主司式を依頼され、引き受けました。福音の朗読箇所は、「あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである」という部分を含んでいました。

黙想会中であっても、赴任先の教会の信徒が亡くなることがあります。だから「『人の子』と、『お葬式』は思いがけない時に来ます」と前置きして、全司祭と司教様に問いかけました。「亡くなった方の遺族、また葬儀社から亡くなった方の霊名、洗礼を受けた教会、洗礼日が分からないと電話が来たらどうしますか？」

「下五島地区の答えはこうです。下五島地区は半数の教会が、スマホ調べて返事ができます。黙想会を受けながら指示を出せるので、慌てて戻って黙想会の残りの貴重なお話を無駄にせず、ギリギリまで黙想会に参加できます。皆さんの地区はどうですか？」葬儀が入ったと言い残してさっさと帰り、残りの黙想をすべてキャンセルする神父様がいます。致し方ないのかもしれませんが、それって、黙想になってますか？説教の最後には、一日も早く、教区全体が下五島地区のようになれるよう、帰ったら何をすべきか考えてくださいと付け加えました。

さて福音朗読ですが、ファリサイ派の人と徴税人が神殿で祈りをささげました。神様に私たちが祈る時、それはほとんどが「願いの祈り」だと思います。日々を感謝する祈り、自分のことは横に置いて純粋に神様を賛美する、礼拝する祈り。こういった祈りもありますが、多くは、願い事の祈りだと思います。

そんな中で、ファリサイ派の人の祈りはどうだったのでしょうか。ファリサイ派の人の祈りはちょっと鼻につきますが、基本的には「感謝の祈り」だったのだと思います。ですからいちおう、祈りと言えるものでした。与えられた身分や環境の中で自分が出来ていることを感謝していたからです。しかし、ファリサイ派の人の祈りは、私たちだけでなく、きっと神様にとっても鼻につく祈りだったのではないでしょうか。

一方で、徴税人の祈りは私たちがよく唱える「願いの祈り」でした。「神様、罪人のわたしを憐れんでください。」（18・13）徴税人の祈りは受け入れられ、義とされて帰っていきました。感謝の祈りがダメで、願いの祈りが良い。そう言いたいのではありません。皆さんも何となく分かっているでしょう。感謝の祈りと称して、自分は完璧だと言っていることが問題なのです。

徴税人は、自分に欠けているところがおおいにあるので、憐れみを願い求めました。人間だからどこかが欠けているはずなのに、自分には欠けたところが無いと思い込んで感謝するファリサイ派の人は、感謝している風で、感謝していなかったのではないでしょうか。

どんな人にも欠けているところがあります。周りから完璧だと思われている人でも、神様にさんざん不平不満を言いたくなるような不幸な境遇に置かれている人にも、欠けているところがあるのです。その欠けているところに気づき、認め、赦しを願ったり憐れみを乞う。欠けているにも関わらず、働かせてもらっていると感謝する。すべてに、欠けていることを謙虚に認めることがあって、祈りは成り立っているのです。

中田神父には、「私はあの人よりはマシな神父だ」と思っている節があります。するとファリサイ派の人と同類ですから、祈りをしても神様に受け入れて貰えません。「あの人より数倍働いている」とすら考えています。そんな、兄弟司祭を見下す私の奢り高ぶりを、毎年黙想会で反省して帰ってきます。「私には欠けたところがある。」私の欠けたところを学んで帰るのが、中田神父にとっての黙想会なのだと思います。

私たちの祈りは、欠けたところを認めた上での祈りでしょうか。感謝、賛美、礼拝、願い。どの種類の祈りであっても、私の祈りの底辺を流れているのが、「欠けたところ」という謙虚さでありたいものです。特に願いの祈りを唱えた後に、「私の祈りはかなえて貰えなかった」と嘆く人がいますが、そこに何かが欠けているのではないでしょうか。

神は必ず、欠けていることを認める人の願いに耳を傾け、欠けているところを恵みで満たしてくださる方です。徴税人は、自分が欠けていることは自覚していましたが、「あーこれで私の祈りは叶えられた」と満足して帰ったでしょうか。祈ったけれども、私の祈りは叶えて貰えるはずが無い。そう思って帰ったのではないでしょうか。欠けているところが大きすぎるので、期待すらしていません。それなのに、欠けたところがどんなに大きくても、神の恵みは十分すぎるほど深く広いのです。

「金継ぎ」という技法があります。割れた陶磁器、欠けた陶磁器を漆で接着し、継ぎ目に金粉を施して美しく仕上げる日本の伝統技法です。「割れたもの、欠けたもの」を「割れていないもの以上の価値に引き上げる技法」と言ってもよいでしょう。神は人祖アダムとエワが罪を犯した時、救い主イエス・キリストを遣わす計画を立て、人間を、罪を犯した時以上に価値あるものにしてくださったのです。「欠けていることを謙虚に認める」とは、私たちが義とされるための「窓」なのです。

死者の日(ヨハネ 6:37-40)

主日の福音 2025/11/2(No.1381)

死者の日（ヨハネ 6:37-40）

お墓に眠っている人が必要なものを届ける

11 月、死者の月になりました。今月死者のためにミサをささげる方が多いと思いますので、主任司祭も助任司祭も今月はミサ依頼が多いといいなぁ、と期待していると思います。また今日は、午後から墓地でのミサを予定していますので、死者のために私たちが出来ること、亡くなった方が期待していることを、福音朗読から読み取りたいと思います。

「わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。」（6・39）このイエス様の使命、目的の中に、私たちに出来ること、死者が期待していることを読み取りたいと思います。

まず私たちが出来ることですが、私たちは身体を持っているので、身体を使った働きができます。それぞれに先祖がいて、先に亡くなった家族がいます。彼らは私たちの所に歩いてくるわけにはいきませんが、私たちは彼らの眠る墓に、車で行くか歩いて行くか、とにかく訪ねて行くことができます。出かけていって、墓の掃除をしてあげたり、もちろん個人のために祈ることができます。それは、「わたしに与えてくださった人を一人も失わない」と言われるイエス様の言葉にも合致します。

誰も世話してくれない墓、誰も近づかない墓は、そのままにしておくとどうなるでしょう。聖書の言葉を借りれば、「あなたたちは不幸だ。人目につかない墓のようなものである。その上を歩く人は気づかない。」（ルカ 11・44）誰にも気付かれない墓となれば、イエス様の「一人も失わない」という使命が果たされなくなってしまう危険があります。私たちはそうならないためにも、定期的に墓を訪ね、お世話をするわけです。

亡くなった方が期待していることもあるでしょう。彼らの家族が定期的に墓を訪ねてくれるとします。この世の関係者が彼らと繋がっていることを積極的に示してもらう。それを亡くなった方々も期待するでしょう。単に墓の掃除とか手入れとかをしてくれるだけでなく、「終わりの日に復活すること」を手助けしてくれることを期待しているのではないでしょうか。

墓の前で祈ることもそうですし、子どもたち孫たちに、こんな人が私たちの先祖にいて、霊名と名前を教えてあげて、ミサをささげるお手本も見せて、それが子供や孫たちにも受け継がれていくようにする。こうして確実に、「わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させる」また先祖たちの期待に応えることができます。私たちは自分一人の力で天国に行けないし、イエス様が一人残らず復活させることにも、私たちの働きは繋がっているのです。

今日の話をまとめます。死者のために祈ること、墓に集い、すべての人の復活を願うこと。これは生きている私たちにとって、イエス様の使命、おいでになった目的、御父の御心に参加することなのです。

ラテラノ教会の献堂(ヨハネ 2:13-22)

主日の福音 2025/11/9(No.1382)

ラテラノ教会の献堂（ヨハネ 2:13-22）

新しい神殿、新たな時代の幕開け

ラテラノ教会の献堂の祝日を迎えました。11 年ぶりに日曜日と重なりました。ローマを巡礼したことがないので実際のラテラノ大聖堂を見たことがないのですが、コンスタンチヌス帝によってローマのラテラノに建てられたこの聖堂の記念は、十二世紀から 11 月 9 日に行われたと伝えられています。

この聖堂はローマ司教区の司教座聖堂ですから、献堂記念は初めはローマ司教区だけで祝われていました。私たち長崎教区も、浦上教会を司教座聖堂としていまして、献堂の記念は諸聖人の 11 月 1 日に長崎教区だけで祝います。のちにラテラノ教会は「ローマと世界のすべての教会堂の母であり頭」「全カトリック教会の司教座聖堂」と呼ばれるようになり、全世界のローマ典礼の教会で祝われるようになりました。この日を共に祝うことで、ペトロの座に対する一致と親愛のしるしを表します。

福音朗読に入りましょう。今日のラテラノ教会の献堂の祝日と関連付けて、私たちの教会のあるべき姿について考えてみたいと思います。イエスは神殿から商人たちを追い出しました。神殿の境内には、牛や羊や鳩を売っている者たちと、両替をしている者たちがいました。

当時の神殿での礼拝は、収入に応じていけにえをささげ、神殿税を納めていました。いけにえは、各自が持ち寄ってささげることも可能でしたが、遠方からはるばる礼拝に来る人たちにとっては、神殿でいけにえの動物を調達できるほうがはるかに便利でした。また神殿税は、当時一般に流通していたローマ皇帝の肖像が刻まれたデナリオン銀貨ではなく、神殿専用の古い貨幣で納める必要があったので、両替をする人もおのずと幅をきかせていたのです。

イエスはこれらの人々を追い出し、強い口調で立ちはだかります。「このような物はここから運び出せ。わたしの父の家を商売の家としてはならない。」（2・16）神殿で売り買いをすることがイエスの神経に触ったのでしょうか。

それだけでは、「縄で鞭を作り、羊や牛をすべて境内から追い出し、両替人の金をまき散らし、その台を倒し（た）」（2・15）行動は説明できません。イエスが腹立ち紛れにこのようなことをするとは考えられないからです。二度とこのようなことは行われない。今後、従来の礼拝に立ち戻ることは決してない。その決意の表れが見て取れます。

イエスは何を知らせようとしたのでしょうか。イエスはこの日の出来事で、「新しい神殿、新たな時代の幕開け」を知らせようとしたのです。動物のいけにえをいくらささげても、人間の罪が償われ、救いが完成することはありません。もはや後戻りすることのない人間の救いの計画、イエスによって救われる新たな時代が到来したことを、はっきりさせるためにイエスは神殿から商人を追い出したのでした。

犠牲の動物をいくらささげても救いは完成しませんが、イエスがご

自身を犠牲としてささげるなら状況は一変します。神は御子の犠牲を受け入れられ、人類を救ってくださいます。私たちは御子が十字架の上で完全な犠牲をささげてくださったことを知っており、この犠牲は今もカトリック教会の祭壇の上で繰り返し行われていると理解しています。

祭壇で行われるミサを通して、動物の犠牲では果たせなかった完全ないけにえがささげられます。そして今日は、ラテラノ教会の献堂を祝い、全世界の祭壇でミサをささげることで、一致してこの世界には新しい神殿が建てられていて、新たな時代が到来していることを世に示しているのです。

ところで、イエス・キリストという「新しい神殿」でご自身を犠牲としてささげた唯一の礼拝はすでに完成していますが、この唯一の礼拝は、世の終わりまで受け継がれる必要があります。イエスはご自分をいけにえとしてささげる礼拝を、ミサという形で弟子たちに残し、「記念として行いなさい」と命じました。

ミサ聖祭は、イエス・キリストの身分において祭儀を執り行う司祭と、祭壇を囲む信徒によって行われます。司祭はここにいますが、祭壇を囲む信徒とは誰のことでしょうか。もちろんここに集まっている人すべてですが、特に私は、今年度堅信の秘跡を受けて大人の信徒の仲間入りをする受堅者が、祭壇を囲む信徒に含まれていると思います。

堅信の秘跡を受けるまでに準備を行い、堅信の秘跡によって聖霊の七つのたまものを受けた信徒が、これからも教会に与えられなければ、イエス・キリストによる唯一のいけにえ、唯一の礼拝は続けていくことができないと思うのです。

もちろん司祭は必要ですが、たとえ司祭がいても祭壇を囲む信徒がいなければ「主は皆さんとともに」「またあなたとともに」というミサ聖祭は豊かさを失ってしまいます。洗礼の恵みを強められ、信仰を強く表す聖霊のたまものを受けた信者が、これからも教会に必要なのです。

中田神父が考える教会のあるべき姿は、堅信の秘跡を受けた信者が常に与えられ、祭壇を囲む姿です。信仰に反する考え方や態度に勇敢に立ち向かい、祭壇を囲んでくれる姿です。イエス・キリストの唯一の礼拝であるミサに集い、共にささげる信徒が絶えない教会です。

堅信の秘跡を受けた信徒がこれからもミサ聖祭にたえず集まる教会は、自分たちが受けた聖霊のたまものによって、信徒同士の活動と、宣教活動にも照らしを与えられ、教会は立ち止まることなく、活動していくでしょう。

今年も、堅信の秘跡を受ける子供たちがこの小教区と下五島地区に与えられました。「たくさん」ではありませんが与えられました。イエス・キリストという新しい神殿による唯一の礼拝はすでに始まり、新たな時代が幕を開けています。今年度の受堅者にも豊かに聖霊の恵みが与えられ、「私を教会の中で使ってください」と勇気をもって答える人に育っていけるよう、私たち皆で願い求めることにしましょう。

年間第 33 主日(ルカ 21:5-19)

主日の福音 2025/11/16(No.1383)

年間第 33 主日（ルカ 21:5-19）

苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む(3)

今週の福音は、「苦難があり、そこで忍耐を学ぶなら、希望が開ける」こう学ばせようとしているようです。イエスは話の結びとして、次のように仰います。「忍耐によって、あなたがたは命をかち取りなさい」（21:19）。忍耐について学ぶなら、私たちの未来には希望が待っています。今週、忍耐と希望について学ぶことにいたしましょう。

今週の説教の内容は、2004 年のものを参考にしています。2013 年にも参考にしていますからブログを読んでくだされば分かりますが、(3)と書かれています。以前のものを参考にしたすべての説教に、何回目と印をしておけば良かったと今気づきました。

弱音を吐くことは誰にでもありますが、きっと皆さんは、私など及びもつかないような忍耐を、生活の中で経験しているに違いありません。夫婦で一つ屋根の下にいれば、いろんなことでどちらかが我慢していることがあるのだと思います。夫婦と言いましたが、それは親子の間でもそうでしょう。気持ちよく過ごせる日ばかりではないと思います。

それ程多くの場面で忍耐を強いられているのですが、私たちは果たして忍耐から何かを学んでいるのでしょうか。ある意味、いちばん多く積み上げてきている徳であるにもかかわらず、そこから学ぶことが少ないのではないでしょうか。そこで今週は、忍耐が私たちキリスト信者をどこまでたどり着かせてくれるのか、確かめたいと思っています。

忍耐と言っても、経験から思い知らされているように、何も学べずに終わる忍耐もあり得ます。憎しみを心に抱いたまま、我慢し続けている。それも忍耐なのでしょうが、おそらくそのような忍耐は不毛なのだと思います。忍耐することで何かをかち取る。イエスに少しでも触れることができるように、要点を押さえてみましょう。

みことばが教えているのは、「忍耐する人は、命をかち取る」ということです。どんな命でしょうか。「中には殺される者もいる」（16 節）。殺されてもなお失わない命、それは神が与えてくださる永遠の命です。だれからも取り上げられることのない神の命です。永遠の命を得るのであれば、それは私たちが神と出会っていることと何ら変わりません。忍耐によって神と触れ合うことになるのです。

忍耐のすばらしさを確かめましょう。まことの忍耐は、愛を現します。介護をしている人がいるとして、着替えを手伝うこと一つ取り上げても、しばしば忍耐を求められます。まことの忍耐を積む人は、お世話しているその人に、私の中の愛を現しているのです。あるいは食事の介助をしている時でも、まことの忍耐を積むことで目の前の相手に、またその相手を通して神に、私の愛を現すことになります。

忍耐が愛を現すことが分かれば、そこから次のことも考えるに違いありません。私はこれまで介護に携わってきたけれども、愛を現すチャンスに変えてこなかった。忍耐していたけれども、私は苦しい思いだけ

を積み上げてきた。今日、愛を現す忍耐があることを学びました。まことの忍耐は、人間を救うためにあらゆることを忍耐された神の愛に、参加するまたとない機会なのです。

次に、忍耐は私に与えられた生き方を完成させるものです。結婚生活に置かれている人、修道生活に召されている人、司祭に召された人、いろんな生き方に神は私たちを置いてくださっていますが、いずれの生き方（召命）についても、忍耐なくしてはそれぞれの道を全うすることは叶いません。キリストはそのことを身をもって示してくださいました。イエス・キリストは「一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心を持ち、愛をもって互いに忍耐する」（エフェソ４・2）この模範を残してくださったのです。こうして、召された生き方をまっとうしてイエスに倣いなさいと招いておられるのです。

忍耐せずに置かれた生き方を全うできるならどれほど楽でしょう。現実は、そんなに簡単なものではありません。どんな生き方に召されていても、たとえ他人からは暢気に暮らしているように見えても、完成するためには忍耐が必要なのです。忍耐する覚悟を持たずに逃げようとすれば、完成できずに召された生き方を終えることになるのです。

さらに、忍耐することで私たちは真の神の子らとなります。神は人間を愛し赦し救うためにあらゆる忍耐を通ってこられたのですが、私たちがまことの忍耐を積むなら、そのまま神に似る者となります。忍耐する人は、心の柔和・謙遜なイエスの弟子となることができるのです。

これほどの高みに、忍耐は私たちを運んでくれるのです。私たちは数多くのことを忍耐してきました。場合によっては道理に合わないことすら耐え忍んできたのです。ですが、なかなかそのことが私を清め、キリストに似る者となる機会に結びついていませんでした。

今は違います。忍耐する時、私は一歩ずつ真の神の子、イエスの真の弟子に近づいているのです。苦難は忍耐を生み、忍耐する人はイエスによって永遠の命の希望を手に入れるのです。

最後に、一人の神父様を紹介したいと思います。長崎に原子爆弾が投下され、一瞬で市内は焼け野原になりました。東洋一と言われた浦上天主堂も失われました。苦難の中、一人の神父様が浦上教会主任司祭に抜擢されます。それが、フランシスコザビエル中田藤太郎神父様です。

神父様は二年間浦上の主任を務めましたが、その間に仮聖堂建設を成し遂げます。もちろん信徒の力が大きいですが、苦難の中で想像を絶する忍耐心をもって仮聖堂建設までこぎ着けました。たくさんの命が失われましたが、忍耐によって滅びることのない命を数多く勝ち取ったのです。長崎のカトリック信者の魂とも言える浦上教会聖堂を再興し、多くの人の希望を取り戻したのです。亡くなられた教皇フランシスコの通常聖年大勅書タイトル「希望は欺かない」そのことを証明したのです。

今年は通常聖年です。「神よ、あなたはわたしの希望」を心から体験する年です。その一助として、中田藤太郎神父様を偲んで出版された「道のさなか」この本をお勧めします。

王であるキリスト(ルカ 23:35-43)

主日の福音 2025/11/23(No.1383)

王であるキリスト（ルカ 23:35-43）

感謝して、信頼していただく御聖体

王であるキリストの祭日を迎えました。日曜日 9 時ミサでは、三名のお子さんが初聖体を受けます。担当のカテキスタのシスターが準備してくださって、おそらく「御聖体にはどなたがいらっしゃいますか？」「イエス様がいらっしゃいます」「主の祈りを唱えてみてください」「天におられるわたしたちの父よ・・・」くらいの想定問題は考えていると思いますが、残念ながら今年は違う質問をする予定にしています。「聖体拝領の前に唱えることばを言ってください」。

答えは「主よ、わたしはあなたをお迎えするにふさわしい者ではありません。おことばだけで救われます。」これは質問としては相当難しいと思います。たぶん、司祭生活 33 年、こんなに難しい質問をしたことはないです。ですからこの質問に答えて初聖体を受ける今年の三人は、特別優秀だという証しになると思います。

さて、お集まりの皆さんにも、関係がある質問をしますが、聖体拝領の前に司祭は何と言っているでしょうか。答えは「世の罪を取り除く神の小羊。神の小羊の食卓に招かれた人は幸い。」ですね。私はこれを、「九つ目の幸い」と呼びたいと思います。すると当然、「ほかに八つの幸いがある」ということになりますね。思い当たるでしょうか。

それは、マタイ福音書の 5 章、あるいはルカ福音書の 6 章に紹介されている幸いのことです。「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。」（5・3）ここから始まる、イエス様だけが与えることのできる幸いです。聖体拝領する直前に、「神の小羊の食卓に招かれた人は幸い」と高らかに宣言しています。初聖体を受け、毎週聖体を拝領する。そのことで、もう一つの幸いにあずかるわけです。

もう少し言わせてもらうと、「神の小羊の食卓に招かれた人」は幸いです。「招かれた」という言葉を見落とさないようにしましょう。招待を受けたのであって、何か当然の権利として受けるわけではないのです。招かれたことのある人は経験があると思いますが、招いてくれた人に喜んでもらえるように、少なくとも招いてくれた人に失礼にならないように、整えてくるのではないでしょうか。それは感謝とか、信頼とか、謙遜の心を整えてくるということです。「主よ、わたしはあなたをお迎えするにふさわしい者ではありません。おことばだけで救われます。」ここに私たちの準備のすべてが込められていると思います。

王であるキリストが、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」（23・43）と招いています。私たちを神の国の宴席に招いてくださいます。初聖体の子どもたちには「神の小羊の食事に呼ばれた皆さんは、とっても幸せです」と招きます。感謝して、信頼していただく食事・御聖体は、はたしてどんな味がするのでしょうか。

待降節第 1 主日(マタイ 24:37-44)

主日の福音 2025/11/30(No.1385)

待降節第１主日（マタイ 24:37-44）

あなたがたも用意していなさい

本日ほど忙しい一日も無いでしょう。ミサ、葬儀、地区の研修会、教区評議会。いろんなことがあるため、説教も心に響かないかも知れません。間をあまり空けずに井持浦教会に来ていますが、偶然では無いのかも知れません。助任司祭の一人が最後に長期休暇を取ったのですが、土曜日の日中に福江に渡ることが難しくなり、フェリー太古に乗りました。日曜日の朝福江港に戻って、福江の９時ミサをする段取りです。五島は土曜日の午前中に移動手段が失われると、フェリー太古が最後の頼みの綱です。この船が欠航しなくて本当に良かったと思っています。

教会の暦は待降節に変わりました。大自然の季節はゆっくり変わっていきます。教会の暦はパッと変わりますが、それでも大自然の季節の変化に似ているところがあります。たとえば、待降節に「栄光の賛歌」を唱えなくなりますが、「最近どうして『栄光の賛歌』を唱えないのかな。そうか待降節に変わったのか」と気付く人は多いでしょう。教会の暦に日々の信仰が馴染んでいくのも徐々にで、大自然と似ているということなのかも知れません。

この待降節の始まりに、「あなたがたも用意していなさい」ということを考えてみたいです。朗読でも「あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである」（24・44）と結んであります。助任司祭が土曜日に帰れないと分かったのは「思いがけない出来事」でしたが、待降節を過ごしてご降誕を迎えるのは、「思いがけない出来事」なのでしょうか。

少なくとも、「思いがけない時に」と感じる部分は含んでいます。季節はこれからますます寒くなってきます。するといつか雪が降ります。初雪はいつ降るか。今のところは分かりません。冬の支度をしている中で、それこそ「思いがけない時に」降るでしょう。イエス様の到来も、この「思いがけない時に」と感じる部分を含んでいると思います。

歳を重ねてきてだんだん困るようになってきたことがあります。それは「今年は何年？」ということです。西暦 2025 年で令和 7 年。今 11 月 30 日ですからさすがに理解できていますが、書類に年号を書く時、年が明けた最初のうち「2025 年」「令和 7 年」とサッと書けたでしょうか。書けなかったと思います。いつからかは分かりませんが、思いがけない時にすっと書けるように、言えるようになったわけです。

こうしたことは、ヒントになるかと思います。神の御子の到来をこれから準備します。馬小屋の準備もその一つでしょう。ご降誕の夜半のミサ、日中のミサ、ここまで過ごしてもイエス様がおいでくださったと、実感できない人がいるかもしれません。けれどもどこかに、神の御子がおいでくださったから今がある。用意さえしていれば、そう実感できる時が与えられると思います。

すべての人が同じ瞬間に御子の到来に気付くとは限りません。しか

し大切なのは「あなたがたも用意していなさい」とイエス様がおっしゃるように、「用意する」ということだと思います。どんな状況に置かれていても、「用意」が必要です。そしてどんな状況でも、「用意」は可能です。

どんな状況でも、「用意」は必要で「用意」は可能だと言いました。けれども本当に辛かった待降節が一度ありました。1997 年、平成 9 年の待降節です。私は滑石教会の助任司祭でしたが、滑石教会の主任司祭であった竹山 凉（すずし）神父様が、滑石教会の堅信式の日に入院され、急性肺炎で 12 月 16 日に亡くなったのです。あっという間でした。

葬儀を終えて、12 月 21 日が日曜日でした。私も、教会の信徒も落胆している中で、目の前に迫ったクリスマスに心を向けさせるのは本当に大変なことでした。それでも、何とか心を一つにしてご降誕を迎えました。当時のクリスマス夜半の説教の見出しにこう書いてありました。「今日、あなたがたのために救い主が生まれた」。

大黒柱を十日前に失った教会家族にも、憐れみ深い神は救い主を送ってくださる。中田神父個人は毎年クリスマスを迎えていましたが、心から、あなたがたのためにおいでくださったのだと実感したのは、1997 年のクリスマスでした。それもこれも、「あなたがたも用意していなさい」とのイエス様のことばにしっかり留まったからだと思っています。

どんな状況でも、主をお迎えする「用意」が必要ですし、「用意」することができるものです。このことに信頼を置いて、これからの待降節を過ごしてまいりましょう。

待降節第 2 主日(マタイ 3:1-12)

主日の福音 2025/12/7(No.1386)

待降節第 2 主日（マタイ 3:1-12）

声を聞いた人が声の主に導かれていく

待降節の第 2 主日は、決まって洗礼者ヨハネの話が読まれるのですが、今年はこの人の姿形を横に置いて、「声」だけに注目して話したいと思います。洗礼者ヨハネは、イザヤによって次のように預言された人でした。「荒れ野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。』」（マタイ 3・3）

洗礼者ヨハネが「声」だとすると、声の主がいるわけです。洗礼者ヨハネは、「声」だけを強調するので、自分自身が声の主であるとは考えていません。朗読とは別の箇所ですが、ヨハネ福音書で祭司やレビ人たちが遣わした者から「あなたは、どなたですか」と問われ、彼は公言して隠さず、「わたしはメシアではない」と言い表しました（1・19-20 参照）。

「声」や「音」は、その出所を探しに行かせます。司祭館で受話器が上がったままの時、手もとの電話機に赤ランプが付きまして、「誰か電話してるのかな」と最初は思うのですが、いつまでも赤ランプが付いたままだと「受話器を戻し忘れてる」と判断して司祭館の中を歩いて回ります。「プー、プー」と音が聞こえて、「ここか」と確かめ、受話器を戻します。最近は冷蔵庫も開けっぱなしだとピーピー言いますね。

要するに、「声」がすると、その「声」の主のところに近づこうとするのです。ただ洗礼者ヨハネは、「わたしはメシアではない」と言うのですから、洗礼者ヨハネが指し示す声の主は別の人です。それは紛れもなく、私たちが待ち望んでいる救い主、神の子メシアのことです。

私たちに当てはめてみましょう。私たちが声を上げたとき、その声は私からの声でしょうか、別の人からの声でしょうか。たいていの場合、声と、声の主とは同じでしょう。親が子供に「早く起きなさい」と言うとき、それは父親母親からの声です。しかしたとえば、「教会の鐘」が鳴った時、それは建物としての教会の「音」ではなく、私たちを教会に招くイエス様の「声」なのではないでしょうか。

私は、ふるさとの鯛ノ浦教会にいた時、教会の鐘が鳴るとため息しか出ませんでした。「あー、起きらんばいかん。」そして神学校に行き、司祭になり、20 年 30 年経ってくると、ふるさとの教会の鐘はさらに苦痛になってきました。

なぜかと言うと、自分が赴任している教会よりも早い時間に「寄せ鐘」が鳴るからです。赴任している教会では 5 時 30 分に鐘が鳴っているのに、鯛ノ浦教会は 5 時 15 分に鐘が鳴るのです。「どうして休暇で帰ってきているのに赴任先よりも早起きしなければならないのか」と思うのです。

それでも教会の鐘は、イエス様の「声」ですから、呼ばれたら返事をしなければなりません。「はい」と答える人もいるでしょうし、「いいえ」と答える人もいるでしょう。全員が「はい」と答えるわけではあ

りませんが、「音」や「声」が、別のもっと大切な人に向かわせる体験は皆さんすでに十分に持っていると思います。

では私たちは、私たちの「声」から、本当の声の主であるイエス・キリストに向かわせることは可能でしょうか。ミサの中では、かなりの確率で声を聞いた人をイエス様に向かわせることが可能です。ミサの中での私たちの「声」は「賛美・礼拝・感謝・嘆願」どれをとっても声を出している私に人を向けさせるものではなく、純粋に人を神に向かわせるものばかりです。その要素が足りないのは司祭の説教くらいです。

教会のミサではそうですが、一歩外に出て、社会の中ではどうでしょうか。私の声が、「声の持ち主イエス・キリスト」に人を向かわせることはあるでしょうか。長生きしている人、危険を乗り越えて今を生きている人は、すぐに出来ることがあります。「私の今があるのは、カトリックの神様のおかげです。」これはとても自然な、人を本当の声の主に導く場面です。

今はまったく行きませんが、私は飲み屋さんのカラオケで曲を入れて、「典礼聖歌 666 番」と言ってから自分の好きな歌を歌ったことがあります。一瞬、周りの人が私に注目しました。歌は違う歌ですが、「この声の主は、私たちとはちょっと違う」と思わせるのに十分だったと思います。典礼聖歌 666 番があるかどうか、私は知りませんが。

洗礼者ヨハネの声を聞いた人は、洗礼者ヨハネが予告した「後から来る方」に思いを馳せました。私はどんな「声」で、どんな生き方で、人の心を「後から来られる方」に向けさせますか？

待降節第 3 主日(マタイ 11:2-11)

主日の福音 2025/12/14(No.1387)

待降節第３主日（マタイ 11:2-11）

御子を抱いた人は、ヨハネより偉大である

ご降誕までいよいよ十日となりました。今日の福音で「わたしにつまずかない人は幸いである」（11・6）とあります。イエス・キリストを受け入れる、信じることがあなたにとって生活のつまずきになっていませんか、もうすぐおいでになる救い主が私たちの生活の喜びの源でしょうか、と問いかけています。

また堅信式も１ヶ月ちょっととなりました。人数は下五島地区で 13 人です。ほとんどが福江教会の受堅者です。ほとんどが福江教会ということは、今年は他の小教区に対象者がいなかったということで、もしかすると今後も同じような傾向が続くかもしれません。イエス・キリストをクリスマスで喜んで受け入れた受堅者たちが、勇気を持って証しできる人になってくれることを願っています。

「わたしにつまずかない人は幸いである。」イエスにつまずく人もいます。どんなに「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている」（11・5）と言われても、それを言葉にすることに抵抗がある人がいます。イエス・キリストはその人にとって生活の重荷、妨げになっているのです。

見えなかったことが、見えるようになる。ご降誕の夜半に話そうと思っていることをちょっとだけ告知しますが、イエス様の誕生がすべての人のためであるなら、すべての人が、新生児を受け取ることになります。結婚した人、独身の人、独身をささげた人。すべての人が子をいただくのです。この視点は、「見えなかったことが見えるようになる」と言えないでしょうか。

または、足の不自由な人が歩きます。足の不自由な人はたくさんいますが、その中には、どうしても、どんな苦労をしてでも、ご降誕のミサにあずかりたいと思って、不自由な体で教会に来るのではないでしょうか。それはつまり、足の不自由な人が歩く姿ではないでしょうか。

全員が来ることが出来るわけではありません。実際、今年の初めからずっと悪性リンパ腫の抗がん剤治療を受けていた実家の母は、ご降誕のミサに参加できないかもしれません。しかし、それでもミサに行く、これが最後であってもミサに行くと言うならば、それは死者も同然の人が生き返ったのと同じではないでしょうか。

すべての人を引き合いに出すことは出来ません。しかし、少なくとも中田神父は、今年、母親がたいへんな目に遭ったにもかかわらず、ご降誕を待つことは生活の支えであり、誰に対しても堂々と証しができる体験となりました。今年あった出来事は、私にとっても、家族にとっても、必ず通るべき道だったのだと思います。

皆さん自身、似たような体験をなさってきたのではないでしょうか。今まで見えなかったことが、主日のミサ説教で見えるようになった。ま

たは結婚式、葬儀のミサ説教で見えるようになった。もしかしたら説教はつまらなくとも、ミサ全体を通して、見えなかったことが見えるようになった。そういうことが無かったでしょうか。

あるいはどうしても行きたくなかった場所に（それは教会かもしれないし、教会以外かもしれませんが）、「まさか」という人が来ていたとしたらどうでしょう？「何があってもあの人は教会に来ない。」そういう人が来ていたら、足の不自由な人が歩いてきたことと変わりないのではないでしょうか。死んでいた人が生き返ったのと変わらないのではないでしょうか。

おいでになる救い主イエス・キリストは、私たちにとって本当に私の生活を喜びに変えてくれるお方か、私の生活の重荷、足かせとなるお方か、どちらかです。それはあなたがいちばんよくご存じでしょう。あなたの心に正直に、イエス・キリストと向き合ってはいかがでしょうか。

今年は聖年であると同時に、終戦から 80 年です。長崎に一発の原子爆弾が投下され、浦上教会はその日のうちに主任司祭・助任司祭、おそらくお祝い日前にゆるしの秘跡に来ていた人々が一瞬で亡くなりました。長崎市全体でも 24 万人のうち 7 万 4 千人が亡くなったとされています。

この状況で浦上教会の信徒たちは、「信仰も何もあったものか」と考えたでしょうか。むしろ、一日も早く仮の聖堂を建て、ミサを始めたいと動き出したのです。浦上天主堂ががれきと化した時から二年間、主任司祭を務めたのは中田藤太郎神父様でした。

詳しいことはこの本に書かれています。どうぞ手に取って、お読みください。キリスト者にとって、おいでになるイエス・キリストは喜びなのか、つまずきなのか。がれきの街と化した浦上の信徒たちの信仰表明が、この本には書かれています。

古い体験ですが、私は神学校の中学生時代に毎年 2 月 5 日に行われていた二十六聖人ミサの説教で「このような説教をする司祭になりたいものだ」と心震わせたことがありました。この話は何度か皆さんも聞いたことがあると思います。

「あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか。風にそよぐ葦か。（中略）しなやかな服を着た人か。（中略）では、何を見に行ったのか。預言者か。そうだ。言っておく。預言者以上の者である。」二十六聖人を「預言者以上の者」と表現して、寒さに震え、早く帰りたいと心の中で説教師を恨めしく思っていた少年に火を付けてくれたのでした。

俯いて説教は聞いていたので誰なのか知りもしませんでしたが、初めての助任司祭が浦上教会になった時、「君が司祭に本気でなろうと思ったきっかけは何か」と聞かれ、「二十六聖人ミサで、『あなたがたは、何を見にここへ来たのか』と説教した神父様に憧れたからです」と答えると、「その説教をしたのはわしだ。よく司祭になってくれた」と喜んでくれたのを今でも忘れません。どこから切り取っても、どの時間で切り取っても、救い主の誕生は中田神父にとっては生きる喜びです。

待降節第 4 主日(マタイ 1:18-24)

主日の福音 2025/12/21(No.1388)

待降節第 4 主日（マタイ 1:18-24）

恐れず、受け入れなさい

「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。」（1・20）実は同じ朗読箇所が先週の木曜日に選ばれていて、一度取り上げた箇所をどう違うように説教をしようか、悩んだのですが、木曜日からは少しは広がりがあるので辛抱して聞いてほしいです。

ヨセフにとって婚約者のマリアを妻として迎え入れるのは、困難なことでした。「二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていた」この事実があるからです。「聖霊によって宿ったのである」という天使の説明を聞いても、「なるほどね。それなら安心」となるわけがありません。妻として迎え入れても、彼女をどうやって人々の好奇心や非難から守ってあげればよいのか。大いに悩んだことでしょう。悩んだ挙げ句、ひそかに縁を切ろうと決心までしたのです。

私も、小神学校の最終学年の時に「神学校と縁を切ろう」と考え、実際に行動したことがありました。高校三年生として、生徒会長と一緒に生徒を束ね、導いていかなければと思ってはいるのですが、下級生たちは言うことをあまり聞いてくれません。

努力が徒労に終わってしまうと、誰でもやる気を失ってしまいます。私は当時の校長であった小島栄神父様に、「自分は続けていく気力を失いました。神学校を辞めます。99％帰ってくる気はありません」と言って、学期の途中で勝手に神学校を飛び出して、自宅に帰ったのです。

私が小島校長神父様にそのことを告げた時、小島神父様はこう言いました。「そうね。99％戻る気はなかとね。でも私は、残りの 1％に賭けてみるよ。」それから自宅に帰って神学校を辞めると伝えると両親はがっかりし、父親は涙を流していました。当時の鯛ノ浦教会には主任の熊谷（くまだに）神父様と助任の山脇神父様がいましたが、山脇神父様が身体を張って説得してくださり、私はまた神学校に戻ることにしました。しかし神学校はすでに「中田先輩は辞める」その噂で持ちきりになっていたので、残りの日々は針のむしろにいるような気分でした。

しかし、受け入れられない環境を受け入れて福岡の大神学校に入学した時、一年先輩の山村神父様から、「中田のために、葛嶋神父様がどれだけ心配していたか、お前は知らないだろう。戻ってきてくれるように祈っていたんだぞ」と言われ、私は自分で神学校を飛び出して、自分で神学校に戻ったと考えていたけれども、多くの人を通して、神様が支え、導いてくださっていたんだなと初めて知ることができました。

「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。」ヨセフにとっては、とても受け入れられない状況でした。マリアの顔に、「神が共にいてくださるから恐れないで」と書いてあるわけでもありません。それでも、マリアを妻として迎え入れました。そして神様の導きが決して離れずに留まることを、生まれてくるイエス様を通して示してくださ

いました。

私たちは今日、このヨセフの模範を自分自身の模範とするよう求められています。たとえば、私たちがカトリックの信仰を受け入れること、それはヨセフの模範に倣うことになります。「恐れずに受け入れなさい。」この季節ですから、イエスの誕生を受け入れることが、カトリックの信仰を受け入れる一つの形になります。イエスは「インマヌエル」「神は我々と共におられる」というお方です。

時に、カトリックの信仰があなたの生活の重荷に感じられることがあるかもしれません。なぜ私たちは、日曜日をミサに費やさなければならないのか。日々の祈りが求められ、ときどき罪を告白してゆるしを得なさい、堅信も受けなさい、結婚式も教会でしなさいと、周りの人と比べると何とも束縛されていると感じるかもしれません。

しかし、これらを恐れずに受け入れるなら、「神は我々と共におられる」ということを必ず体験させてくださるのです。病院や老人施設で、こう言われたことがあります。「教会はよかですね。私たちは家族がいてもめったに会いに来てくれませんが、教会の人は定期的に神父さんが来てくれる。」自分が弱って、共にいてくれる体験が欲しい時にカトリックの人たちが見舞いを受けているのを見て、そのように言ってくださったのでしょう。

恐れずに、受け入れる。もうすぐ神の御子はおいでになります。その瞬間を受け入れるだけでなく、神の御子を通して示される一つひとつの出来事を受け入れていきます。恐れずに受け入れる準備が必要です。恐れずに受け入れたなら、どこにいても「イエスは私たちの救いのためにおいでになった方です」と態度や言葉に表せる人になるでしょう。恐れずに受け入れる人は、幼子イエスを見守るもう一人の養父になります。

主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

主日の福音 2025/12/25(No.1389)

主の降誕(夜半)(ルカ 2:1-14)

民全体に与えられる大きな喜び

主の降誕おめでとうございます。すべての人が幼子を抱きます。すべての人に誕生の神秘が与えられます。結婚した人、独身の人、年齢も関係なく、神は私たちに小さな命を抱く喜びと、神と共に歩む使命を与えようとしておられます。

今年取り上げたいのは、ご降誕が「民全体に与えられる大きな喜び」だということです。羊飼いたちがこの天使のメッセージを真っ先に聞いたのですから、羊飼いにとって「大きな喜び」となっているか、考えてみましょう。

考えるにあたり、身近な体験を引いてみます。中田神父の実家では牛を飼っています。動物はしばしば、月の満ち欠け、潮の満ち引きで生まれたり死んだりします。「野宿をしながら」という箇所を読みました。生前父親が月の満ち欠けの時間に合わせて子を宿した牛の様子を見に行っていたのを思い出しました。

夜中でも気を抜くことができませんでした。自力でお産のできない牛がときどきいて、出産のときに引っ張り出す補助をしていました。「野宿をしながら」という描写は、出産の近い羊がいないか、夜を徹して見守る様子なのかもしれません。

しかし、仮に子羊が生まれても、子羊一匹の命の価値はほとんどの人にとってはたいした価値ではないでしょう。そんな命ですが、羊飼いにとってはかけがえのない命です。そして大きな喜びです。「布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子」は、羊飼いだからこそ理解できる大きな喜びです。ふだん誰からも見向きもされない「小さな命」と彼らはいつも向き合っているからです。

去年の夜半のミサの始まりに、中田神父が取った「小さな思いつき」に気づいた人はいるでしょうか。ミサの始まりは、御子様を主任司祭が抱いて入堂しました。けれども馬小屋の飼い葉桶に安置する直前、当時の洪助祭に渡して安置させたのです。ご本人が気付くかどうかは分かりませんが、もしもどこかで、彼のところに助祭が来たとき、思い出してくれたらいいなと思っています。助祭として御子様を安置するチャンスは、生涯に一回だけなのです。

助祭の時に御子様を安置した経験は、司祭職のキャリア全体からすれば何十分の一かもしれません。この、誰も気づかないかもしれない小さな思いつきのおかげで、去年中田神父は「民全体に与えられる大きな喜び」を味わったのです。「小さな出来事を通して神が示す大きな喜び」を味わったのです。

現代では、教会の中で体験する喜びは、世の中の人々にとって取るに足りない、見向きもしない喜びになってしまいました。堅信式の喜びよりも、部活での全国優勝の方が喜びは大きいかもしれません。教会での結婚式よりも、その後の披露宴の方を本人たちは喜んでいるかもしれ

ません。何度もお色直しをすれば、人々から喝采を浴びるでしょうから。

そんな時代ですが、神はカトリック教会が受け継いだ信仰の中で「民全体に与えられる大きな喜び」が示されるのです。泊まる宿が与えられず、助産師にも恵まれず、衛生状態も良くない場所に置かれた乳飲み子から、「すべての人の希望」「夜を照らす光」が始まったのです。

この夜半のミサから、もう一度教会で体験する喜びが私にとって「大きな喜び」になっているか。馬小屋の前で各自問い直すことにしましょう。

主の降誕(日中)(ヨハネ 1:1-18)

主日の福音 2025/12/25(No.1390)

主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

言（ことば）は、自分の民のところへ来た

あらためて主の降誕おめでとうございます。日中のミサの典礼です。朗読はヨハネ福音書の１章です。朗読の中に馬小屋も飼い葉桶も乳飲み子も見当たりません。司祭になって最初の 10 年、「いったいこの朗読からどのようにご降誕を解き明かせばよいのだろうか」と考えました。

しかし今、解き明かしは「肉となってくださった言（ことば）」が必ず実行してくださると考えています。朗読箇所に躓くことがあるとしたら、すぐに答えを求めようとしている司祭の方に、説教しなければと焦っている司祭の方に原因があるのです。

夜半のミサでも触れたのですが、昨年は御子様を助祭に渡してから馬小屋の飼い葉桶に安置してもらいました。それはもう、新生児を母親にそっと抱かせる、そう言っても良いほどでした。助祭であった洪師が、主任司祭から慎重に御子様を受け取ったのをはっきり覚えています。

ここで本日の朗読から目に留まった箇所があります。それは「言は、自分の民のところへ来た（が）」です。ただ皆さんもすぐにお気づきと思いますが、来たには来ましたが、民は受け入れなかったとあります。「言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。」（1・11）

なぜ、受け入れることができなかったのでしょうか。それは、民のほとんどが、「こうであってほしい」という色眼鏡で、言（ことば）に接したからです。何が足りなかったのか。少し考えてみましょう。

中田神父は、今日までに初雪が降ってくれたらなぁと、切に願っていました。雪を手に取る感覚をたとえにして、話を進めたかったからです。しかし雪が降りそうな気配は少しもありませんでした。もし雪が降って、それを手に乗せるとしたら、皆さんはどのようにするでしょうか。

きっと、手のひらにそっと乗せるはずです。決してこちらから手を振り回すのではなく、降りてくる雪を、そっと受けとめるはずです。それは、「言は、自分の民のところへ来た」この肉となってくださった言（ことば）を受けとめるしぐさそのものなのです。

私たちのもとへ来てくださったみことばであるイエス様を、ただ受けとめる。手を振り回すのではなく、そっと受けとめる。こうして初めて、肉となってくださった言（ことば）を、迎えることができるのです。「こうであってほしい」といった色眼鏡ではなく、みことばであるイエス・キリストが降りてきてくださるのをそのまま受け取る。その時私たちは「自分を受け入れた人」「その名を信じる人々」となり、「神の子となる資格」が与えられるのです。

肉となった言（ことば）であるイエス・キリストは、人知れず、そっと降りて来てくださいました。受け取る準備、受けとめる準備が出来ているでしょうか。「肉の欲」は、何か要求しようとします。おいでくださった言（ことば）に、全面的に心を開きましょう。その時私たちは「父の独り子としての栄光」を知り、恵みと真理に満たされるのです。

聖家族(マタイ 2:13-15,19-23)

主日の福音 2025/12/28(No.1391)

聖家族（マタイ 2:13-15,19-23）

イエス様を囲んで自分に託された務めを果たせば聖家族

ご降誕日中のミサ説教でちょっと話したのですが、クリスマスまでの１ヶ月、できるだけ長く告解場に座るように、特に助任司祭には念を押していたのですが、日中のミサ当日、もしかしたらと私が告解場に座ったら二人やって来ました。幼子イエス様は、まだひとことも話すことが出来ませんが、それでも、日本風に言えば「目で合図をして」司祭を動かすことができる方だとあらためて思いました。

それと同じように、聖家族はヘロデの魔の手を逃れるためにまずエジプトに避難するわけですが、その際も、ヨセフとマリアを励まし続けたのは、御父であり、御子イエスであり、聖霊であったのだと思います。主の天使の言葉は御父のことばであり、旅の途中の幼子イエス様の存在はヨセフとマリアを動かす力の源であり、数々困難が待ち受けていたであろうエジプトまでの旅を聖霊が見守ってくださったのです。

ところで、エジプトでの滞在期間はどれくらいだったのでしょうか。おそらく２年から３年だったと思います。ヘロデが占星術の博士たちからだまされたと知って、ベツレヘムで二歳以下の男の子を殺害したとあり、またヘロデはその後亡くなりましたから、おそらく３年は滞在していたのでしょう。

ユダヤとエジプトは、別の国ですが、言葉の問題は無かったのでしょうか。現在宝亀教会に赴任しておられる湯浅神父様に尋ねたところ、エジプトもパレスチナも当時はローマ帝国が占領していて、広大な領地を統治するために、ある程度言葉もギリシャ語が通用し、一般の人々はアラム語を話していたようだから、特に問題は生じなかったのではないか、ということでした。

ヨセフ様もマリア様も、二カ国語、三カ国語話せたのだろうかと想像を膨らませましたが、そこまでで無くても幼子イエス様を守り抜くことは出来たようです。かつてはヤコブの末っ子ヨセフが兄たちの悪意でエジプトに売り渡され、モーセによってエジプトを脱出するまで留まっていますから、エジプトはパレスチナの人にとって不安を抱かせる国では無かったのかも知れません。

さて前置きが長くなりましたが、幼子イエス様は、預言を実現できるお方です。人を動かし、歴史を動かし、世界を動かします。それは幼子の状態であっても変わりはありません。ただ、今回のように、預言の実現のために、ヨセフとマリアの協力を必要としていたかもしれません。ヨセフとマリアがいなければ、エジプトへの避難と、エジプトからの帰国は難しいです。あくまでも幼子ですから。

私たちに当てはめると次のように言えるのではないでしょうか。幼子イエスが預言を実現するために、行動を起こすために、今は私たちの手を借りようとしている、ということです。たとえば、勇気を持って信じていることを行動する。そのために、堅信を受ける人々を必要として

いる。エジプトに行っても、エジプトから帰国してもイエス様は神の子として変わらず神様ですが、ずっと見守り続けるヨセフ様とマリア様の配慮を必要としておられました。

堅信を受ける一三人の人たち、また新成人の六人、更には二十歳の集いを迎える十四人の人たちが、県外に出でも、五島市に戻ってきても、「私たちはイエス様が何をしたいか、いつも耳を澄ませていて、いざとなったら動きます」というところを見せてくれたらなと思っています。

聖家族は、今は手足を使って指示を出さなくても預言を実現する力のあるイエス様を見守り続けるヨセフとマリア様とで成り立っていますが、イエス様を見守り続ける皆さんが加わることで、皆さんの中でも聖家族が成り立っている。私はそう考えています。

私がときおり「福江教会家族」と言うことがありますが、それは御聖体のイエス様を中心にして、ここに集まり、ここから派遣されていく共同体のことです。血のつながりではなく、イエス様と共に歩む、イエス様のそばを離れない。そのことが家族の絆を形づくっているのです。この中に参加している時、私たちも聖家族の中に加わっているのです。

「聖家族は模範としてあるだけで、私たちとは縁遠い」そう考えているかもしれません。縁遠い模範にどんな意味があるのでしょうか。私たちにとって馬小屋の聖家族は身近な模範です。イエス様を囲んで、ヨセフ様とマリア様が自分に出来ることを全力で果たします。それは私たちにとっても同じことです。イエス様のために私が出来ることをしっかり果たす。私たちもその中で、聖家族の一員に加わります。

ところで、2025 年聖年も 1 年を過ぎました。浦上教会では長崎教区としての閉幕式ミサが午後 2 時から行われます。巡礼指定教会をすべて巡礼した方々の何人かは、このミサに与ってその努力をたたえてもらうことになっています。私たちもこのミサで聖年を終えることにします。たくさんのお恵みが与えられたことを記憶にとどめつつ、拝領祈願のあとに垂れ幕（バンナ）を降ろすことにします。

神の母聖マリア(ルカ 2:16-21)